
自分らしい生き方を

A - G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分らしい生き方を

【Nコード】

N7202Y

【作者名】

A-G

【あらすじ】

所謂マンガやアニメへの転生もの。

主役になるには中途半端な主人公。というより内面がネガティブな上、他者に見せる自分もコントロール仕切れずブレている。

人としての軸が定まっていない彼が物語の登場人物と接触し触れ合っていくことで、成りたかった自分に成ることは出来るだろうか？

(鬱陶しいヤツなので成長してくれないと困ります)

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙いどころか拙過ぎる文章です。

ご指摘や感想など頂ければ幸いです。

プロローグ

俺は今、自分の人生を振り返っていた。
というか無理矢理振り返させられている。

俺の目の前には巨大なスクリーンがあり、さながら映画館のように妙に広く暗い空間に俺一人だけが座り、流れる映像を羞恥心とか不快感とか諦観とかをグチャ混ぜにした「いつそのこと殺して下さい」という気持ちで眺めている。

「もう死んでるのに殺してなんてナンセンスだねえ」

俺が生まれてから幼少期、少年期、青年期と今に至るまでの成長してきた流れを結婚式なんかで使われるようなダイジェストストーリーで編集されているのだが……

「こんなのが結婚式で流されたら千年の恋も冷めちゃうだろうねえ。花嫁さんからしたら夢から醒めさせられたかな？」

内容は悪意で編集されたとしか言いようがない。
適当な言葉で誤魔化し、嘯く自分。

他人と当たり障りのない付き合いをし、決して本心を明かさない自分。
いい加減で乱雑で卑怯で臆病で見るに耐えない自分。
作り過ぎて着飾り過ぎていい人になるように形作り、そんな自分に
自分ですら持て余す。

「自分を見失うってヤツかな？でもそれを冷静に眺める自分にちょっと酔ってる感じ？」

気持ち悪い。

「うん。ぶつちやけマジキモい」

醜いし無様だ。

吐き気がする。殴り飛ばしてやりたい。

こんなヤツ嫌いだ。

こんな自分が本当に嫌いだ。

「僕も嫌いだねえ。エヴァンゲリオン観たとき、シンジ君にも同じ気持ちを持ったねえ。まあ彼の場合は生まれ育った環境に問題があるとフォローを入れてあげるけど。因みに僕はアンチじゃないよ？好きだからこそ苦言を呈すタイプさ」

なんでこんなヤツが俺なんだ。

知れば知るほど、見れば見るほどに嫌になってくる。

悪意を持って編集された映像の中の俺は、俺がずっとこうしてやりたかった気持ちをはつきりとさせてくれる。

「俺を殺してやりたい」

「ハモつちやつたねえ。これまたぶつちやけ気持ち悪いねえ。

でも自分嫌いもここまでくると一周回って清々しいかな？太陽系一周して漸く清々しいって感じだけど。あとさっきも言ったけど君死んでるから殺すとか無理だから。ナンセンスナンセンス」

自分が嫌いだ。こんな自分を見たくなかった。自分を変えたかった。本当の意味で良いヤツになりたかった。

格好いいヤツになりたかった。
だから……

「職業を看護師に選んだんだよねえ。人のために役立つ自分になる
うとしたんだよねえ。まあそれも失敗しちゃったけど」

涙が出る。膝の上で握り締めていた手を開くことも出来ない。
嫌いな自分を表面だけでも肩書きだけでも良くしたかった。
なのに……

「自分の医療ミスで患者さんを死亡させちゃって、患者さんの遺族
に責められ懲戒免職。いよいよ内面どころか外面も取り繕うことも
出来なくなっちゃったねえ。挙げ句の果てに」

スクリーンの映像が変わる。

俺の最後の場面……

「茫然自失で歩いてたところを階段を踏み外して落ちてきた子供を
受け止めて転倒。頭の打ち所が悪くてぼっくり。
そして今は僕の前。
うーん、テンプレ乙」

もう涙も言葉も出ない……
いや言葉は出るか。

時間にして約三時間半の『偽りだらけの我が生涯』という無駄に凝
った映像を見終わり、座っていた丸椅子を基点に身体の向きを変え
る。

俺の1メートルほど後ろでソファーにどっかり座った男性と目が合
い絞り出すように声を掛ける。

「で、俺はなんで自分の人生の総集編を精神的苦痛アリアリで見せられたんですか？」

明かりが俺の背後のスクリーンだけなので逆光みたいになり、只でさえ陰鬱な俺の顔に更に陰がかかっている。

そして丁度スクリーンに流れる監督から脚本まで全員同じ名前のスタツフロールと同一人物の口に出す。

「その、えつと・・・神様？」

プロローグ（後書き）

自分で推敲しても全く修正できていない事実。
修正したら涙が出るほど元の原型が保てない。
おかしな点がありましたらご指摘お願い致します。

第一話・向こう側（前書き）

誤字や脱字、おかしいところがありましたらご指摘のほどお願いします。

第一話・向こう側

スクリーンにエンドマークが表示されてから無駄に広い室内が照明が灯る。

(と言っても照明器具らしきものは一切ない)

気がついたら丸椅子に座り、最悪な自分史を延々と見続けさせられていたので実際の室内の広さを確認出来たのは今が初めてなのだけでも。

広い・・・ではなかった。

スクリーンと俺と丸椅子、そしてソファーに座る神様(?)の他はただ延々と真つ白い空間が続いているだけ。

正直、真つ白な空間なんて表現はよく聞く(見る?)けれども、実際に自分がその場にいると発狂しそうになるくらいの異常空間だった。

約三時間半の苦行で磨耗した精神状態には堪える。

「自分の人生を苦行だなんて、君は『目覚めた人』にでもなりたいたいかな?だとしたら苦行が足りないねえ。あと二千年くらい」

ニヤニヤ笑いながら目の前の男性・・・もう神様でいいか、神様はさつきからずけずけと人の内面に入り込んでくる。

「あの、先程からもそうでしたけど・・・お、私の考えてることが解るのですか?」

というか解るのだろうな。この異常空間は落ち着かないものの、俺の順応性は案外高かったらしい。

会話をする取っ掛かりとして何となく聞いてみたが、これは居心地が悪い。

本音と建て前がバラバラな上、何気ない会話ですら頭の中でシミュレートしてから話す俺としてはコミュニケーションの相手としては最悪の相手だ。

「初対面のヒト（神）を最悪の相手と認識して会話するのは一社会人として如何なものかねえ」

・・・ほら最悪だ。しかもやはり心の中を読まれている。

普通、ニヤニヤした顔で裏も表も読まれている相手となんて会話なんてしたくもないだろう。

しかし妙な感じだ。

神様が笑っているのは解るのに、顔付きや体格、年齢や服装といったものを認識出来ない。

何となく男性っぽいと思うのだが、個人として特定出来ないような・・・自分の人物描写が苦手という弱点が露呈してしまった。いや背景描写とかその他諸々も苦手だけど。

「メタっぽい発言だねえ」という神様の発言も大概だとは思っ。

「まあ君の思う通りでグルグル渦巻く考え通りだよ。人間の一人や一兆人くらいの思考なんてちよちよいのちよいで読み取れるよ。君の『ちよちよいのちよいは古い』って思考もねえ」

つくづく嫌すぎる相手だ。帰りたい。逃げ出したい。

なるべく平静を保ちたいけど、思考を読まれ、胸の内を透かされるだけでいっぱいいっぱいなのに、異様な空間と対面の人物からくる圧迫感で身体が全く動かない。汗が止まらないし鼓動も早鐘のようにずっと鳴り響いている。さっき俺は意外と順応性が高いとか言ったけど無理だ。

馴染めるものかこんなもの。

所謂転生系主人公の人達はこんな空気の中で神様と普通に会話して
るのか？

そんな真似が出来る時点で普通の人間じゃない。

完全に『あちら側』の人種だ。

「君も十分『こちら側』だと思うけどねえ。君の言葉を借りるなら
『大概』だよ君も。」

ふう、凡人の枠内に居たいのかな？憧れるけど怖いのかな？」

「私は・・・」

「『俺』でいいよ、いちいち切り替えてるのが見えて聞いてて気持ち
悪い」

「・・・俺は凡人で普通です。さっきの映像でも再認識しまし
たし。」

いや俺はたぶん普通よりも下です・・・貴方の言われる通り気持
ち悪いヤツです。感情と理性がちぐはぐで思考もバラバラです。適
当な言葉と態度と誤魔化して体面を作ってる人間です」

自分で言ってる嫌になる。何が嫌って、こつこつ風言葉並べて
自分を形作ると落ちて着いてくるのが。

精神の磨耗云々や汗や鼓動がどうとかも誤魔化せる。

自分を作って逃げ道を作ること慣れすぎて、作らないと俺は人
になることも出来ない。

映像の中の幼少期の自分すらそんな有り様だった。

我ながら気色悪い子供だと思った。

普通の家庭に生まれ普通の両親に育てられたのに、どこでこんな子
になったのやら。

育てられ方を間違っ て受け止めてる。

両親には先立つ不幸より「歪に育ってごめんなさい」と謝りたい。

「過小評価というより過微評価って感じだねえ」

神様から若干あきれが混ざった言葉が掛けられる。

存在自体は超然としてるのに人間臭さが感じられる。

大体この神様は俗っぽい。

会話の端々にアニメやスラングがちらほら現れし。

そのせいか、格上なのに敬う気持ちあまり出ない。

失礼にならないように言葉には気を遣うけれども。

「思考を読まれると解っていないながら、そんなことを考えている君は十分以上に失礼ではないのかねえ」

またふうと息をつかれる。

「い、いえ・・・その決して貴方を悪く思ってるわけではなく、あ、あの・・・どちらかと言えばお立場を考えるに大変気安く親しみやすい方だ・・・」

しどろもどろになりながら必死に言葉を繋ぐ。手振りを加え姿勢も前に出してしまう。

生前は友人（自分の矮小さを知った今となっては自分から友人と言える立場じゃないが）から「冷静で真面目で落ち着いたヤツ」という評価を貰っていたのだが見る影もない。

またしても自分を象るものが上っ張りだけだったと再認識。死んでからの俺、生前よりも駄目だ。

またもや駄目思考に沈んでいると、神様が笑っていた。

さっきまでのニヤニヤ笑いと違い、楽しいものを見て笑うようにしている。

クスクスと言えはいいのか？

（どうでもいいけれども、その人をはつきり認識出来ないのに感情や表情が理解出来るのはどういった理屈だろうか）

怪訝そうな俺に手を振って笑いながら語りかけてくる。

「いやあ、楽しいねえ。君のキャラが壊れ、また取り繕ったあとですぐ崩れたり。

順応出来ない君はどこにいったのかな？

僕に畏怖する君は？

冷静が売りな君は？

主人公達と違い神様（僕）と会話なんて出来ない普通の人間の君はどこかな？

いい加減に気付こうねえ？

たかだか性格に難があるだけのヤツが神なんて存在会えるわけないよねえ？

言ったよねえ？過微評価だつて？

神に会って自分の形だけを取り繕う人間が。

ただの人間だと？

はつきりと言わなきゃ解らない？

自分の逃げ道を作る暇があるくらいだから解ってるでしょ？

でもいいよ。言っただけよ。

羨ましくて憧れて、でも怖くて受け入れられなかった現実を。

君は最初っから『主人公』だよ」

第一話・向こう側（後書き）

話が進まない。

何時まで喋ってんだか……

第二話・転生系主人公（前書き）

誤字や脱字、おかしい点がありましたらご指摘のほどお願いします。

第二話：転生系主人公

「俺が『主人公』？」

訳が解らない。

今居る自分の立ち位置から鑑みればそう見えなくはない。

『事故に遭い死亡』

『神様と出会い会話する』

『神様から特別（主人公）扱い』

転生系主人公ものだと言われたらよくあるパターンだと納得出来る。
対象が俺でなければ……

「なんだつたら『勘違い系主人公』でもいいよ？
自分は大した人間じゃないと思ってるのに何故か周囲の人達からは
凄いヤツだと思われたりねえ」

クスクス笑いからまたニヤニヤ笑いに戻った神様が、ソファーにも
たれかかり足を組み替えている。
だから動作が解るのに体格も服装も解らないなんておかしいだろう。
いっぱいいっぱいな状況が多すぎる。

考えてみたら自分が死んでいるという状態に一切疑問を挟んでない。
もう今更過ぎて蒸し返すネタじゃないんだと無理矢理納得する。
クツションも敷いてない硬い丸椅子に三時間以上座って、いい加減
尻が痛いことも今更だ。

大体死んでいるのに痛いやら心臓の鼓動やらもう滅茶苦茶じゃない

か。

展開に流されて忘れられてるかもしれないけれども、生前は俺は看護師だったんだ。

新米だったけど。

こんな現代医療に真っ向から喧嘩を売る状態になっっているのに「死んでいるのに生きているんだ俺」と思う自分が嫌だ。

自分を着飾る為になった看護師とはいえ死ぬほど勉強してきたのは事実。

何日も徹夜もしたし、課題やレポート、看護記録なんかを書きまくって二十歳そこで肩こりに悩まされ整体通いまでしていた。

苦労してきた生前のことを自分自身でなかったことにしていた訳だ。

看護師を目指した動機も不純で利己的。

働いていた時も患者を見守りながら看護をしながら、自分をよく見せるポーズにしていた。

最低だよ。最悪過ぎるだろう。

何よりも最悪最低なのが、『人一人殺しておきながら、のうのうと事故死してその過失をリセットしている自分』に気付いたからだ。

さっきの自分の映像を見てまだ一時間もたっていない。

死んだから終わったことにしている自分に吐き気がする。

何もない真っ白な空間？

異常だよ、ああ異常異常！

時計もないのになんで上映時間がわかった？

時間の経過が正確に解るのは何故だ？

答えは『よく解らないけど何故か解る』だ！！

ご都合主義もここに極まってる。

なかったことにしていた罪悪感に頭を抱え込んでいた俺を、一言も話さずただ眺めている神様。

自己嫌悪で狂いそうで懺悔する人の気持ちを理解する。

「赦されるつもりも赦されないうつもりもない人間が懺悔してもねえ」

「君はほっとくとすぐ自己嫌悪と自己弁護に走るんだねえ」と辛辣な言葉を頭上から掛けられる。

神様はいつの間にか立ち上がって俺の前にいたらしい。

「僕から言われるまで『転生』なんて口にしなかったのは、人を死なせておいて自分が助かる逃げ道がある可能性への罪悪感と期待がらかな？」

唇を噛み締めながら降りかかる言葉を黙って聞く。

「最低な看護師さんだもんねえ。まあ僕に言わせてもらえば、お金貰ってその分しっかり働いていたんだから良く見せる為のポーズでも問題ないと思うけど」

「格好いいポーズってね」と神様は笑いながら話す。

「魔法陣グルグルまで知ってるんですか・・・貴方普段どんな生活を送っているんですか・・・」

神様と漫画の趣味が合いそうだ。

絶賛自己嫌悪中（神様の言うように自己弁護中でもある）であつても会話の小ネタに反応してしまう。

本当に俺はどうなりたいんだろう？

漫画や小説の中の主人公。

真っ直ぐでひたむきで格好良くて。

迷っても悩んでも最後には立ち上がる。

嘘ばかりで逃げ出してばかりの自分とは大違いだ。

死んでも逃げて出そうとする自分とは本当に……

「格好いいヤツになりたいなあ……」

「人生二回目の本音だねえ」

神様が嬉しそうに笑っている。

自分でも確かに本音を言ったと思う。でも二回目？

「看護師を目指す時も言ったよねえ。

『格好いいヤツ。いいヤツになりたい』

結果は伴わなかったし目指した目標も自分の為の手段に成り下がった。でもあの時の君は二十数年間の人生で一度だけ変えようとしたんだよ。

取り返しのつかない失敗はしたけど、そこまでの努力だけは本物だよ。

神様である僕が保証してあげる」

畜生。赦されるつもりも赦さないつもりもなかったのに……

生前から死んでからまで、今漸く少しだけ救われた気持ちになっ
てしまった。

今更が多すぎるけど。

二十数年間も生きて死んで。

俺は初めて素直な感情を表出して泣いた。

「で、君の転生先なんだけどねえ」

大の大人がわんわん泣いた数十分後。

神様は漸く本題に入ったとばかりに説明を始めた。

俺はというと所在なさ気に例の硬い丸椅子に座り直している。

気恥ずかしさがメーターを振り切っているが流石に今回は逃げ出せない。

泣き止んでしまつと冷静になつてしまい自分の醜態を思い出し、なかなか顔を上げられずどうしようかまたもや逃げ道や誤魔化し方を考えていたら「知らないのかい？神様からは逃げられないんだよ」とご親切なことに逃げ道に回り込まれた。

絞り出すように「それは大魔王の台詞です」と目と顔を赤くしながら呟き神様の前に座った。

わざわざ冗談を交えて俺が起き上がりやすいように配慮してくれるのが嬉しかった。

でも神様のニヤニヤ笑いを見て、ただその台詞を言いたかつただけだとわかり嬉しさが引つ込んだ。

「候補は3つ。」

ひとつめは中世なファンタジーな世界。剣と魔法を武器にモンスター

「や魔王を倒すロープレ的な展開」

王道ってやつかな。

俺の考えを読んでか神様はうんうんと頷く。

「ふたつめは現代風ファンタジー。現代社会を基盤としつつ裏の世界には異能と異形があったり色々ね」

超能力バトルとか？

現代の闇に潜む怪異との戦いみたいなものも含むのだろう。

これまた神様はうんうんと頷く。

神様という会話という基本的なコミュニケーションツールが退化しそうだ。

「最後は最近の転生先でも流行りかな？漫画やアニメの世界に入っちゃうヤツね」

・・・これまた王道テンプレな。

つまり先の二つだと全く知らない世界行くわけだ。

行った先では何が起きるかわからない。

自分の力で切り開く正に主人公となる・・・のかもしれない世界。

この解釈であっているのだろう。神様は両腕で頭の上に丸を作っている。

シールドだ。

最初の頃の威圧感はどこにいったのだろう。

まあ神様は終始ニヤニヤしていただけだし俺が勝手に畏怖していたのかもしれない。

それが単に慣れただけか。

俺もいい加減に力が抜けたように思うし、本音と感情を晒して開き直ったのだろう。

しかし本質が変わった訳ではないので、自己に埋没すればまたドロドロした思考に捕まってしまう。

生まれてからずっと一緒に育ってきたようなものだし、早々割り切れたりはしないし、切り捨てることも出来ないだろう。

というかこういう思考状態がドロドロに入りこむ原因だ。

考えたら沈むし考えなければ先ず動けない。

つくづく・つくづく自分が嫌になる。

とか言ってる内にまた沈みかけており、神様がポカッと頭を叩いてくれたおかげで頭と思考が浮き上がる。

有り難いけど擬音の割には痛烈な一撃だった。

「さて君はどれにするか決めたかな？

なんて説明した手前で言ったけど、正直君が選ぶ選択肢は解ってるんだけどねえ」

神様のニヤニヤ笑いももうテンプレだ。

言う前から答えが解られているのは少ししゃくだが、それこそ今更言うことじゃない。

大体俺の答えはそれこそ説明される前から決まっている。

神様の目（おおよその目の位置）を見ながら俺の選択した答えを告げる。

「俺は主人公だと神様が言われましたけど、俺は主人公じゃなくいいんです。

俺は自分が憧れた主人公達をその側で見たい。

その強さや信念、生き様を物語の中で生きる姿を見て感じたい」

主人公の仲間や協力者でなくてもいい。

傍観者を気取るつもりはないけど、共に生きる世界で、世界を守り仲間を守る主人公達を見たいんだ。

「うんうん。了解了解。どの道、三番を選べばひとつめもふたつめも一緒だからねえ。要は君の立ち位置が変わるくらいだからねえ」

神様は「まあ、立ち位置がどうとかなんて気にしても無意味だけど」と妙に引つかかることを呟いていたが、それを追求しようとしても「気にしない気にしない」と適当にあしらわれた。適当な誤魔化しは俺のキャラなんだけど。

「じゃあ後はどの世界するかなんだけど、希望はあるかな？」

考えてなかった……

主人公のいる世界云々とかは考えていたけれども、どの世界に行くかは全くノープランだった。

行ってみたい世界、あってみたいキャラクターはいっぱいあるけれども、みんなみんなみな叶えてはくれまい。

ここでまた頭を抱える事態に陥るとは。

肝心な時にはいつも俺はこうだ。本当にどうしようもない男だ。くそっ！鬱だ死のう！

「しょうもないところで沈むねえ君は」

また頭をボカって叩かれた。さつきよりも痛かった。擬音がそれを現している。

「本当はゆっくり決めて貰っても構わないんだけどねえ。

まだ決めなきゃいけないこともあるし、今回は僕が君にぴったりの世界を選ばせ貰おうかな」

俺は優柔不断なところがあるので、神様のオススメを選んで貰える

のは有り難い提案である。

あれこれ考えたい気持ちもあるので不満がない訳ではないが、それこそ思考の負のスパイラルにまた入り込む可能性がある以上この方が無難だ。

苦しい時は神様頼みだ。本神が目の前にいることだし。

「神的な本音を言えば、いちいち沈んでる君をサルベージするのも面倒だしねえ」

俺を前にしてぶっっちゃけ過ぎだと思う。

「さっきみたいにネコ型ロボットの歌で遊びながら選ばれるのもみていて気持ち悪いし」

そこもぶっっちゃけ過ぎだと思う！

そしてその件に関してはスルーして頂きたかった！！

結局神様にお任せした形になったが、行き先については「ついてからのお楽しみ」らしい。

不満はなくはないが不安はそれなりにある。
知っている世界だといいのだけれども。

第二話：転生系主人公（後書き）

転生前からウジウジジメジメ回りくどくて鬱陶しい主人公。

おかげで話が進まないっいたらありやしない。

神様の読心設定で主人公が喋らなくてもいい分、余計に思考に沈むようになってしまった気がする。

ダウン系主人公なんて何がいいんだ……

第三話：規格外の能力（前書き）

誤字脱字やおかしなところがありましたらご指摘のほどよろしくお願ひします。

今回から文章量が少しずつ多くなっていく予定です。

しかしどうしてこうなった。

第三話：規格外の能力

「さてお待ちかねえ。」

当事者も観客も誰もが一度と言わず二度も三度も夢想し期待する展開だよ。

君はどんな能力を望むのかな？」

「そういう流れになるのかなとは思ってましたけど、本当にあるんですね。転生前のご都合イベント」

正直期待していた。

自分がもし物語に関わるならこんな力が欲しい。

あんな武器を使ってみたい。

最強。無双。チート。

ちょっと痛い妄想なんて誰だってしたことあるだろう。

俺だって中学生くらいによく発症する病と十年以上付き合ってきたんだ。

いい年して胸が躍ったっていいじゃないか。

膝の上で握り締めている手に力が入る。

口元も緩んでいる気がする。

何の因果か自分だけが得られた幸運を嬉しくないわけがない。

でも……

「あの神様、一つ確認したいことがあるのですがお聞きしても宜しいですか？」

「『どうして俺なんかここまでしてくれるんですか？』かな？」

神様が俺の疑問を、素直に喜べない心情を察してくれる。

俺は単純に喜んだり浮かれたりしてはいけない。

生前の自分は決して真つ当な人物だとは言えない。

それに事故とはいえ人を死なせている。

なのに自分だけが降つて湧いた幸運をただ享受することは出来ない。先ほどより強く握っていた手を一度開いてからまた握る。

じんじんと手のひらに痺れとも痛みとも取れる感覚がある。

この程度の痛みで贖罪を気取るつもりはないけれども、少しでも自分に何らかの罰を与えていないと心が耐えられない。

自分が反省している姿を作っていないと好意も施しも受けられそうにない。

「面倒臭い人だねえ君は。『ヤッタ！ヤッタ！』と喜んでいればいいのに。」

話をちゃっちゃと進めたい僕の気持ちも察してよ。」

嘆息する神様に申し訳無さがまた一つ追加される。

思わず「うつつ」と呻き声を上げるけれども、神様の方は俺が気になっっていることについて答えてくれるらしい。

ふうと息を吐いてから口を語り始めた。

「この際だから君の疑問や困惑、良心の呵責なんかを纏めて解決しちゃう。」

先ず一つ。君が死んで僕の前に来たのは偶然でも幸運でもましてや僕のお情けでもない。

最初から決まっていた決定事項だよ。

僕は言ったよな？普通じゃないから君は此処にいるって。君は生前過ごしてきた世界にとってイレギュラーなのさ。」

イレギュラー？俺が？なんで？

想像もしてなかった答えに反射的に身体が浮き、その反動で丸椅子がガタツと音を立てて倒れる。

神様は俺に手を翳して立ち上がるのを制する。

丸椅子を直して座り直すが流石に落ち着いてはいられない。

「イレギュラーなんだからそうとしか言えないねえ。

ああこれは別に君が死ぬ間に助けた子供のことは関係ないよ。

あの子は君と違って普通の人間。完全無欠の一般人だよ。

それこそ君が助けず死んでいたって全く世界には影響はない。

後世にも響かない」

「助けてくれた君が死んだことでトラウマなり罪悪感なりは生まれ
たかもねえ」と意地悪く続ける。

あの子を俺の現状に対する理由にするつもりはなかったけど、死ん
でも構わないように言われると不快に思う。

助けたことがあの子にとつて悪いように聞こえるから尚更だ。

そんな俺の様子を見て肩をすくめる神様。

眉間に皺が寄り睨むように前を見るが全く気にされていない。

「そんな顔されてもねえ。僕にとってただの子供の一人や千兆人死
のうがどうなるうが本当にどうでもいいんだよ。

人間の感覚で神（僕）をはからないで欲しいな。

別に僕からすれば人間なんて虫けらとか塵芥だなんて思ってないし
ねえ。

人間は人間。

虫けらは虫けら。

しっかり線引きして混同はしないよ。

それに君の死云々があの子供に影響与えたからってなんだい？

トラウマになるかもしれないけど、それで塞ぎ込むのも助かった命
に報いるのもあの子次第だよ。

助けた責任を持ち出すのは格好いいかもしれないけど、死んでまで
気にすることかい？

なんだつたらあの子の夢枕に立って『助かってくれて有難う！俺のことは気にせず楽しく生きてくれ！』って言いに行く？それで満足するのは君であって君だけだよ。

利己的で自分本位な人間を気取るなら、助けた結果だけに満足して後のことなんか省みないようにねえ。

善行も偽善も悪行も偽悪もやるなら徹底的にやってねえ。

中途半端は君のキャラクターだけどやられた方は困っちゃうよ」

・・・一気に虚仮卸された。

善いことをして説教されるなんて理不尽過ぎると思うけど、呆氣にとられて眉間どころか唇や手や身体中から力が抜けている。

だらんと四肢を垂らし口を半開きにしている俺はさぞかし間抜けに見えることだろう。

反論する気も失せた。

俺の思考と心情を読み取り、わざわざいらぬ説教をさせられた神様も「あーあー」と喉を押さえながら発声し仕切り直している。

説明を脱線された意趣返しも含めた説教だったのだろう。

神様の癖に器量が小さい。

とは言え俺の思考にいちいち付き合ってくれるのだから神ゴトがいいのかもしれない。

他人の思考を読めるなんて便利に思えたけれども、俺を相手に行っている姿を見るとコミュニケーションツールとしては不便極まりないな。

面倒臭いと言いながら面倒見がいいのは神様の性格だろうか。

難儀な神様だ。

「あーあー、うん。よし話を戻すよ。

君はイレギュラーだって言ったけど、その理由を説明したげる。君は君が居た世界にとって規格外なんだよ。

笑っちゃうくらいに規格外。

その気になれば現実世界に君臨する魔王になれたかもねえ。

ファンタジー
ねえ？規格外でしょ？

幸か不幸か、君が中途半端な卑屈人間で外見を飾る程度にしか能力を發揮してないから問題はなかったけどねえ。

死んだ後の魂だけでも規格外だったから、肉体を失い制御不能の無意識状態で力を發揮して世界に影響を与えようとするんだもん。

何が起きたか教えて欲しい？ああ怖がらなくても大丈夫。被害は全くないよ。僕がすぐに拾いに行ったから。

ちよびつと洩れた力のせいでみんなびつくりしただろうねえ。

一瞬だけ地震が起きたんだよ。揺れたような気がただけだろうねえ。安心した？

でもね、もしそのままにしてたら……」

生まれてきてすみません。

死んでしまってすみません。

日本の皆さんごめんなさい。

そして生きとし生けるもの全てにごめんなさい。

どうやら俺は真正正銘イレギュラーの規格外だったようです。

なんたって……

「もしそのままにしてたら、日本沈没していたからねえ」

全く笑えないよ神様。

「まあそんな君だから僕の前に居るわけなんだよ。わかったかな？」

丸々全て信じたわけではなかったけど。

最初に見せられた最悪な自分史を初め、この不思議空間での神様との不可解コミュニケーションを通して、もう大抵の異常なことに慣れてしまった。

これだけ異常なことが連続して起きているんだ。転生系主人公に自分なるくらいなんだ。

元々自分が異常だったことくらい受け入れるさ。

もうどうにでもしやがれた。

「諦観しちゃってるねえ。気持ちは解るつもりはないけど解ってあげるよ」

神様の軽口にも返す気力はない。

なんかもう罪悪感とか転生することへの期待と不安とかもどっか行ってしまった。

今の俺は虚脱感に抗うことなく丸椅子から下りて地べたに胡座をかき、動物園のパンダ宜しく丸椅子を左手でゴロゴロ転がしながら遊んでいる。

なんだか久しぶりの逃避だ。常に自分を取り巻く世界から逃げながら生活していたあの頃が懐かしい。

「そのままでもいいから話を再開するよ？」

しかし死んだら日本沈没ってどんな存在だよ。地球破壊爆弾か俺は。

「つまり君が転生するっていうのは必要な処置なんだよねえ。世界を守る為みたいなの。これだけ聞いたらなんかヒーローみたいだよ。え。スーパーヒーロー伝説」

しかしイレギュラーか……

何というか、元々俺は世界にとって規格の外だったんだなあ。

いらぬ子じゃなくていらぬ子なら困る子。

世界規模で家無き子が……

「だから君の異常な力がある程度容認される世界に行く必要があるんだよねえ。」

そう意味では所謂王道転生物の異世界や超常現象満載な物語の世界はうってつけなんだよ。異常が正常な世界だと受け入れる世界の懐も大きいからねえ」

元々自分が不必要だと思えば、かつての世界への未練もなくなると言うものだ。

それでもこんな自分でも愛してくれた人達が居た世界から完全に去るのだから郷愁の念は消え去らない。

生前は実家に殆ど帰らなかつたけど、二度と帰れないと解ると急にホームシックになる。

母さんの手料理が食べたい。

父さんとお酒が飲みたい。

妹と対戦ゲームをしながら喧嘩したい。

飼い犬（名前ワツフル雑種ハオメス）と散歩に行きたい。

思いっきり未練たらたらじゃないか。

「まあ大体の君の疑問にも答えたいし、半端な呵責もどうでもよくな

ったことだし、最初の最初に戻ろうかな？

転生先に必要な能力を幾つか選んで、君の能力を制限しないとねえ」

あー、なんか座っているのも疲れた。寝転がってしまおう。

床が冷たく気持ちいいな。手でさすっても床の材質なんて解らないし何で出来ているんだろう。神様鉱物だろうか？

それにしても真っ白いと病院のリノウムを思い出す。

そういえば俺が急に辞めることになって夜勤のシフトの変更とか大変だったろうな。

つくづく迷惑かけっぱなしでいなくなるんだな俺は。

・・・そろそろ起きるか。いくら虚脱状態だったとは言え神様のまえで寝転がるなんて不遜極まる。

失礼にならないようにとか考えてた癖に随分な醜態を晒してしまっ

た。

丸椅子は転がし過ぎてちょっと離れたところにある。立ち上がって取りに行くのも億劫だし、反省の意を含め床に正座しよう。

神様をお待たせするのも申し訳ないし。

自分の能力も決めないといけないな。

最強もチートも俺の性格には合わないし、可もなく不可もないバランスのとれた能力にしよう。

すでにいくつか候補はあるし。

あとはそれに合わせて自分の能力を制限して・・・

えっ？

「思考の怠惰の海からお帰り。能力の候補もあるようだし、ちょっと決めてちゃっつちやと制限しようねえ」

「ちよっ！ちよちよちよつと待って下さいっ！！俺能力を貰えるんじゃないんですか！？しかも制限って！？」

俺の存在は規格外で魂だか何だかが爆弾らしいのだけれども、あくまで俺の身体や知識は一般人のそれでしかない。寧ろ運動音痴で体力もあまりない方だ。

こんな状態から更に制限がかかって超常世界に転生なんて無理ゲー過ぎる。

第二の人生が始まる前からバッドエンドだ。

制限プレイをするくらいなら最強チートの方がいい。

ものの数分で正座を解き神様に詰め寄った。

生まれ変わる前から命の危機だから仕方がないだろう。

「うーん、中途半端が君のキャラだっけ解ってはいるけども、理解力の中途半端さは結構面倒だねえ。

ま、誤解しやすい発言をした僕も悪いか。メンゴメンゴ。

もういい加減能力の話をしたいし巻いて説明するよ。巻き巻きで」

嘲りと心が籠もってない謝罪を言い、さも面倒だと言わんばかりに神様は右手をヒラヒラと降った。

瞬間、前傾気味に詰め寄っていた俺の身体は土台に立てられた細い鉄の棒を弾いた時のようにビーンと微かに震えて直立不動の状態になった。

指先一つ、口先すら動かない。

読心以外では初めてみた異能力だけど。

実際すごい力だけれども。

こうまでするくらい俺の対応は面倒なのか。

扱いが雑過ぎる。

「言いたいことは僕が言いたいことを言ってから言っただけだ。」

まあ聞き終わったら反論する気もないだろうし僕もまともに聞く気はないけど。

「まずは制限についてだけど、さっきも言ったように君はイレギュラーだよね。」

それは君の居た世界にとっても、今から転生する世界でも一緒だ。だってあちらは元々完成している世界だ。

居るはずのない登場人物はまさしくイレギュラーだろう？

君が行っても問題ないのは確かだけでも、それは空いた部屋に居候するようなものなんだよ。

要は『来てもいいけど迷惑かけんなよ？』ってこと。

「といつてもその辺は流石は物語。最初はその世界がちよこつと嫌がらせしてくるかもしれないけど、何年かすれば落ち着いてくるから世界も愛着湧いて『遠慮すんなよ。お前だって俺の家族さ』みたいな感じになるから。物語の世界はあっさり危機に陥る癖にいざという時は懐が大きくデンと構えてくれちゃうからねえ。」

話を戻すねえ。

居候先に行くには沢山荷物を持っていくと邪魔になるし迷惑になっちゃうよねえ？

君の場合はその溢れんばかりの無駄パワーが荷物なんだよ。

だから必要最低限の荷物を置いていく（制限）必要があるのさ。

解ったかな？

まあ確かに今まで平凡と言える日常を送ってきた君だから、使ったことのない能力を制限なんて言われたら焦るよねえ。

僕も配慮が足りないねえ。ごめんちゃい。

でもね、力を解放した君はとんでも野郎なんだよ？

今の君を1とするとあちらの世界じゃ100万なんてことなるんだよ。

あちらの世界の一般人も基本は君と変わらない普通の人。

あちらでは一万超えたら伝説クラス化け物だつて言ったら、僕の言ってる意味も理解出来てくるよねえ？

普通の居候先に宮殿持つて行くわけにはいかないよねえ。

回りくどいかな？ 気付いたけど僕も大概面倒なタイプだねえ。人のこと言えないね。ゴミンゴミン。

という訳で、君の力を最低でも百分の一まで制限するよ。

勿論ちゃんと能力は解放したげるから。

それじゃ・・うん終わり。解放して制限したよ。

その制限は僕しか解けないから実質永遠に解けない。

身体が動かないまだ実感ないだろうけど拘束が解けたら試してみたらいいよ。

自分にドン引きするから。

あとは使用する能力や身体能力について教えてあげないとねえ。

身体は基本的に頑丈、俊敏、怪力、反射や感覚機能なんかも超人扱いされるかな？

大丈夫。あちらの世界も大概超人だらけだから。

フルパワーでも出さない限りは大丈夫。

ん？フルパワーと通常と境界？

うーん・・あー・・面倒臭い。もうアレだ。界王拳で行こう。

フルパワーが界王拳20倍ね。上限だけ分かればいいでしょ？ あちらには気の問題があるから丁度いいや。いいじゃない。男の子の夢だよねえドラゴンボールは。

かめはめ波は使いたかったら自分で練習してねえ。

という訳で使用能力の一つは界王拳で決まり！

あーちよつと喉乾いたかな？ ずつと喋り通しだからねえ。

まあ僕は神様だから喉乾かないんですけど。ヨホヨホ！

えつと後は魔法関係かな？ あちらには魔法があるからねえ。

魔法使いになれるよ？ やつたねえ！ でも大っぴらには使えないからコッソリ使つてねえ？

あちらの魔法の知識とか技術いる？使ってみた魔法なんかがあるならそれでもいいよ？

でも君はあまりゲームとかの魔法知らないんだねえ。小難しい詠唱とか大変そうだしねえ。

アレ？でも君何気に十周くらいしてるゲームあるねえ？

『ファイナルファンタジータクティクス』か。いいねえ。僕もあのゲームは大好きだよ。

ただのファイナルファンタジーと違って詠唱文もあるじゃない。やっぱり魔法詠唱文は人類の夢だよねえ。

うん！魔法はそれで行こうか。

黒魔法、白魔法、時魔法、陰陽術。あと刀の引き出すもつけとこう。勿論刀もセットであげるよ。サービスじゃないよ？刀を生み出すのもまた君の力を使ったからねえ。

刀は痛い男子の夢だからねえ。ちゅーにちゅーに。ついでに聖剣技と暗剣技もつけておくねえ。拳術もあれば安心ですよ？

ん？心外だねえ、勝手に決めてないでしょ？

ちゃんと君の思いのままに選んでるんだから。

最強とかチートとか嫌いな癖に随分とまあいっぱい考えてたねえ。プププ。

『型月』を選ばない辺りに拘りかプライドがあるのかな？

別に怒っちゃいないよ？『さつきから笑い方とかが古臭いし鬱陶しい』って思ってることも気にしてないからねえ？

大体こんなものかな？あと何かいるのかな？

・・・うんうん。

流石に過去やら失敗を引き摺る男は違うねえ。

そっか本当は最初にコレを選ぶつもりだったんだ。

偽善的でいいんじゃないかな？

馬鹿にしてるわけじゃないよ？

今度は間違わないようにしたいもんねえ？

何事も正しい知識と正確な技術、そしてそれを扱う強い意志だからねえ。

君の場合は最後の力が足りないけど、そこまでは僕はしらない。自分で間違わないように使えるようにねえ。

ふうー終わった終わった。お疲れ様、僕。

君の為にこんなに頑張っちゃって好感度が鯉のぼりだねえ。

鯉が竜に変わるくらいののぼり具合だよ。

もうちょっとしたら身体の拘束が解けるから色々試してごらん？

僕は君の転生する世界を調整してくるから。

じゃあまた後でねえ」

俺が気が付いた時には真っ白な空間に独りきりだった……

第三話：規格外の能力（後書き）

ずっと神様のターンだぜっ！！

主人公はラカンさん方式でみると最強チートもいいところですが、力を扱う技術や知識がからきしです。子供先生と同じく経験を積んで強さを不動なものになるはずです。多分。

神様が扱いやすいのでつついっつい甘えてしまいます。いい加減転生させたいと思います。

ペットの犬の名前が主人公より先に登場する有り様。未だに名前も容姿さえ描写されないし。主人公エ・・・

第四話：人生再出発（前書き）

誤字脱字、おかしい点がありましたらご指摘のほどよろしくお願
い
します。

文量は少な目にまとめました。

適当な字数はどれくらいなのでしょう？

漸く此処まで・・・

第四話：人生再出発

神様の一方的なようで俺の意向や主張なんかも適度に加味された協議の末に得た能力は思いの外・

「は、恥ずかしいな・・詠唱や技の名前を口にするの」

二十代半ばの成人男性にはキツかった。

神様に放置されてから約十分後。

本来なら此処に来た直後に思うであろう感想を述べた後、とりあえず自分の能力について確認をする。

神様曰わく、溢れんばかりのパワーやら気やら魔力やらがあるらしいのだが、漫画やアニメのように身体からオーラが浮かぶことも無ければちよつと力んでみても身体がプルプル震えるだけで何も起こらなかった。

真っ白な空間で中腰でよくわからない俄か拳法の構えをした成人男性が、数分間プルプル震えながら力む姿はさぞかしシユールだっただろう。

気や魔力は後々練習するとして、身体能力がどれだけ向上したのか

を調べることに切り替える。

先ず腕力。何か持ち上げてみようと思ひ神様が座っていたソファ―に手をかける。

真つ白い空間に無駄な存在感をかもす、黒革張りの大人三人はゆったりと座れる高そうなソファ―。

横幅があるため、力自慢の人でもバランスが取りづらく浮かせるくらいが精々だろう。

前の俺なら引き摺るだけで精一杯だ。

先ほどの気や魔力の失敗もあり、何も起こらなくても恥ずかしくないように背もたれ側から底の部分に手を入れ「軽く」力を入れ持ち上げてみる。

「よっ・・・と?」

手のひらや腕にはそれなりに重みがある物を抱えている感覚がある。しかし自分が腕に込めている力は空のダンボールを持ち上げている程度しかない。

恐る恐る右手をソファ―の重心に当たるような場所へ滑らせ左手をゆっくり離す。

まあつまり、右手一本で成人男性では抱えられないソファ―を持ち上げているわけで・・・

そこからなんとなく指を一本ずつ浮かせていき・・・

最終的には人差し指だけで、イタリアンのシェフがピザ生地を浮かせ回すようにソファ―をクルクル回転させいる俺がいた。

「俺！自分が怖いっ！！」

「何だか自分に秘められた力に戸惑い、恐怖する主人公みたいな台詞だねえ」

いや、もう有り得ないくらいの身体能力だわ。

あの後も神様が戻ってくるまで自分の身体能力を確認してみたのだが、もう異常事態のオンパレードだった。

指先でソファアを回していたが、バランスが崩れ床に落としてしまった。

その時に「ズドン」と決して軽くない物体が落ちた音がするものだから流石に顔が引きつった。

腕力が上昇しているのだから脚力も同じように上昇しているわけで、爪先をソファアの下に引っかけてリフティング感覚で蹴り上げたら、10メートルくらい上までソファアは吹き飛び落下して大破。

壊れたソファアの残骸から握り拳大の破片を取り出し、遠く投げたソレを走って追いかけてたら、落下する前に悠々とキャッチ。

今度は思いつきり遠くへ投げてみたら弾丸のような速さで飛んでいき、またソレが数キロ先まで飛んでいつているのにすっかり視認出来ている事実。今度は顔が引きつるのではなく強張った。

意識しても表情筋が動かないこともあるのだと学んだ。

そして冒頭的一幕。

どうせ一人しかいないのだと開き直って思いつきり技名を叫んでみた結果……

「『かああいいおううけええんん！！』ってやってみたんだねえ」

「お願いだからっ言わないで下さいっ!!」

今度はしっかり発動し、強化された脚力で蹴っても傷付かなかった床が発動した瞬間ひび割れた。

更にはよくみたら薄赤い陽炎みたいなものが身体を覆っていた。

この状態で何かを試す勇氣はなかった……

「いくらなんでもびっくり超人過ぎますよっ!?!?こんな身体能力のキャラクター、ドラゴンボールの世界でしか適応出来ませんって!?!?よくある原作破壊なんてレベルじゃなくて漫画の世界そのものを破壊しちゃっしょっ!?!?!?」

転生主人公が「原作のキャラの百倍強く!」とか言ってたのを見たことあるけど、お前は馬鹿かと丸一日かけて説教してやりたい。

漫画のキャラクターを常識の枠組みで測っても無意味だとは解る。

だけでも、こんな不条理な人間が近くに居て巻き込まれたら絶対死人が出る。

今の俺が本気で街中を疾走したら戦車がF1並みのスピードで走り回ると変わらない。

これで本当に制限されているのだろうか……

「それは勿論。今の君は本来秘めていた力の百分の一以下。確実に弱っちくなっているよ。地球に来たばかりの頃のベジータより少し上程度だねえ」

つまり一人で地球を滅ぼせるくらいってことじゃないか。

日本沈没なんて片手間で出来そうだ。

地べたに座り頭を抱える。

死んでから俺は何回頭を抱えたんだろう。

最強チートはいらないって言ったじゃないか・

「力に自惚れられるのも頂けないけど、力で鬱病になられるのも困るねえ。

まあ心配しなくてもその内馴染んで上手くコントロール出来るはずだよ」

楽しそうに笑いをかみ殺しながら話す神様。

どうでもいいけど貴方ニヤニヤ笑いが標準装備じゃなかったのだから？

長々と独り語りしていた時もそうだったけど、この神様もキャラがブレてるように思える。

人としての軸がうどんかなんかで出来てそうな俺が言うのも何だげど。

「ところで、僕が戻ってきたということは転生の準備が終わったってことなんだよねえ。もういつでも行けるけど君は準備出来た？」

そういえば神様は何かしらの調整に行っていたのだったか。

正直、心の準備も身体の準備も万全とは言い難い。

魔法に至っては試してすらいない。

かと言って、時間をかけてもこれ以上どうにかなるとも思えない。

・なるようにしかなるまい。

立ち上がってズボンのお尻を手で払って神様の向かい合わせになる位置につく。

「不安はありますがけど、此処に居るのも落ち着かないし・・転生お願ひします」

真っ白な空間に長居するのは俺の薄弱な精神に良くない。

神様にも悪い・・・「そうだねえ。ソファーも壊されちゃったし」からね・・・

弁償しろとか言わないよな。死んでるから財布とかないよ俺。

「転生しちゃうと僕と会えないからねえ。聞きたいことがあるなら、これが本当に本当の最後だよ」

弁償は大丈夫かな。

どうせ考えが読まれるのだから心の中で謝っておく。

あと聞きたいことが・・・

「転生先は日本とか外国と違って分かります？最悪でも言葉くらいは通じて欲しいんで・・・

あと俺の他にも転生してくる人っていますか？」

「君の転生先は日本だよ。現代の日本語で問題なく通じるよ。

あと君の行く世界は君一人受け入れるだけでキャパがいっぱいだからねえ。これ以上の来客はお断りだってさ」

少しホツとした。神様相手だと言葉がなくてもコミュニケーションがとれるから安心していただけれど、生まれ変わった先で言葉が通じないのはかなり困るだろうから。

それに他の転生者がいないのも安心要因だ。

俺がしたいことは俺なんかとは違う格好いい原作主人公達の活躍を見たいだけ。

原作に介入したり破壊したりするのは御免だし、他の転生者に滅茶苦茶にされるのは困る。

かといって敵対なんかしたくないし、平和的に無難に過ごせるなら万々歳だ。

「有難う御座います。もう確認することありません。何だか色々ご迷惑かけてしまい申し訳ありません。これからは自分の力で頑張っていきます」

「・・・うん。どうぞ致しまして。今の言葉も本心からだねえ。自分で言うのも何だけど、神様なんて胡散臭い存在とまともに向き合ってくれた君にはそれなりの好意をもってたよ。暇を持て余した神様の遊びに付き合ってくれて有難うねえ」

「俺とは遊びだったんですか？」

互いに軽口を言い合い笑いあう。

俺の表面を無視して内面を散々荒らしてくれた存在だが、本心をさらけ出して会話したのは本当に久しぶりだった。

厳しいし容赦もないけど楽しかったと思うし嬉しかったとも思う。

だから自然と感謝することができて頭も下げられる。もし自分を変えることが出来たなら、本心を打ち明けられる友達を作ろう。

生前より少しでも真つ当な人間になれるように。

「じゃあ送るねえ。」

君の新たな人生に幸多からんことを。

前世の最後の友人として君に神の祝福を」

んなこと言うなよ・・・泣きそうになるだろうが。

ゆっくりと俺の足元から光に包まれていく。

では行ってきます神様。

「あー、最後に一つ訂正しておくねえ」

なんだろう？

今うつすらと涙目な上、思いの外光が眩しくて目がチカチカしてるんだけど。

「最初に見せたあの映像なんだけど。三時間半もないよ。精々二時間ちよい。

何でそんな風に思ったのかしらないけれど、君が時間が解るとかこんなおかしいことあるかーとか痛い勘違いしてたのが気になったねえ。

そこまで指摘するのも可哀想になって思って話を合わせて黙っていたんだけど、言わないままだと僕がスッキリしないから伝えとくねえ。

次の人生じゃそんな痛い思い込みや勘違いはしないように気をつけてねえ。

そんじゃねえ！バイビー！」

言いたいことは山ほどあるし、ツッコミたいことも腐る程ある。

強化された身体能力のフルパワーでぶん殴ってやりたい気持ちだつて溢れんばかりだ。

もう光が身体全体を覆い隠そうとしており、強い光で目を開けることも出来ない。

光の向こうにあのニヤケ面があるかも解らないし、俺自身がすでに消えている可能性もある。

それでも・・・

届かないとしても・・

伝えたいことが俺にだってあるんだ！

「お前の『ね』の時だけ語尾を伸ばす話し方だって十分痛々しいだろっがああっ！……！」

意識が薄れゆく中で俺、次の人生では『ちゃんとしたまともな友人を作ることを決意した。

第四話：人生再出発（後書き）

やっと転生です。

と言っても転生先についてすらいらないのですが……

主人公の身体能力は転生後一旦低下させます。

初っ端からアレでは流石に……

でも一般人と異能者の境目辺りにいる古とか頭一つ抜け出してる楓や刹那だつて無茶苦茶な身体能力ですよ。

強すぎないくらいってどれくらいの能力なんだろう。

主人公は最後まで名前も容姿も描写されなかつたなあ。

ちよつとくらい描写しようか迷つたんですけど、どうせ転生してからが本当のスタートなら今は要らないだろうと結論付けました。

無色透明な主人公と外見無しみたいな神様との絡みだけ。

自分でもラジオを聴いてるような文章だと思いました。

色々な意味で真っ白な世界です。

切実に文才が欲しいです……

11 / 22

主人公の能力に合わせてタグを少し追加しました。

第五話：もう挫折（前書き）

漸く、漸く物語に入ります。

今回は独自解釈、独自設定が入ります。
説明ばかりが続く文章量も多いです。

拳げ句、かなり展開が無茶苦茶です。

文才は・・・文才はどうしたら手に入るのですかっ!？

第五話：もう挫折

「蓮！蓮は何処におるかっ！！」

今日をなんと心得ておる！我らが大願成就の日ぞ！

己の役目もこなさずまた下らんことに時間を費やしておるに違いないわ！！

貴様等もぼさつとしとらんと、あの愚か者を儂の前まで引っ立てこんかっ！！」

「か、かが畏まりましたっ！」

長い白髪を後ろに流し、首の辺りで一本に纏めている強面の老人が烈火の如く怒鳴り散らし、床を踏み鳴らしながら力任せに襖をバンバンと開け放つていく。

いや俺の実の祖父なんだけどね。

女中さんや護衛の男性を射殺さんとはかりに睨み付け、怒声の勢いで『蓮』なる人物を探すようにあちらこちらへと遣わしている。

いやその蓮くんが俺なんだけどね。

神様と微妙な別れを終えて、眩い光の中で気を失い、次に目が覚めた時には此処『秋山家』の長男として生をうけていた。

自分が『秋山 蓮』として自覚したのは二歳を過ぎた辺りで、もしかして「転生」ではなく「憑意」してしまったのかと思い、えもい

われぬ不安に襲われたりもした。

幸いにも一歳頃の記憶が臍氣にあり、『秋山 蓮』という人物をのっつたのではないと分かって心底安心したものだ。

流石に元々いた人から居場所を奪う真似はしたくなかったし、転生早々新しい罪悪感を芽生えるのも勘弁してほしかった。

転生後、最初に行ったのは自分の姿を確認することだった。

日本人として生まれたのは理解出来たが、転生オプシオンなんかで銀髪だったりオッドアイだったりしたらその時点で引きこもり生活になっていただろう。

鏡に映る黒髪黒目の幼児の姿にこれまたほっとしたものだ。

因みに俺こと蓮くんは、利発そうで大層可愛らしい顔をしている。

自画自賛の幼児なんて気色悪いと自分でも解っているが、それなりに整った容姿に生まれたのは素直に嬉しいと思う。

容姿と言えば、最近は生前の自分の容姿や名前が思いだせず、どんな生活をしていたかもあやふやになってきている。

秋山蓮という存在が自分と重なり合っていく過程で薄らいでいったのかもしれない。

いずれは自分が転生者だという記憶もなくなり、この世界の一員として埋没していくのだろうか。

未だにこの世界では俺はイレギュラーだという考えが捨てきれないからこのような思いに囚われるのだと思う。

たかだか数年で馴染めというのが無理なのかもしれない。

とまれ色々と悩み事が絶えない秋山さん家の蓮くんだが、せつかくの新しい人生なのだから、明るく楽しく健やかに育っていこうと思っていた。

が、この秋山家。
実に厄介極まりない家柄だったのだ。

俺という自我が確立されてからは、自分がどんな世界で生きていてどんな人物なのかを把握する為の活動を始めた。
よちよち歩きで屋敷内を回り、書籍関連や郵便を盗み見したり、女中さんや側付きの護衛さんの話を盗み聞きして情報収集明け暮れた。そこで解ったことは、秋山家が関東でも有数の名家「だった」という事実。

・まあお察しの通り、秋山家はかつての隆盛の陰が無駄にでかいお屋敷の所々に見られるだけの没落華族でしかなかった。
別にそれだけならまだいい。

この平成の世に華族だ名家だなんて何の足しにもならないんだし、いづれ俺が家督を継いだ時にはこの無駄屋敷を売っぱらって適当なアパートに住むつもりでいるのだから。

大体この屋敷の維持費や人件費を想像するだけで頭が痛くなる。
貧乏性というなかれ。

小心者には居るだけで苦痛になる空間が多いのだ。

まあ没落華族云々はこれくらいにしておく。

問題なのは秋山家のもう一つの顔。
裏の顔こそが一番の大問題である。

それを初めて知ったのは俺の3歳の誕生日であり、俺『秋山蓮』の産みの親である母の命日にあたる日だった。

俺の母は病弱だったらしく元々出産に耐えられる身体ではなかったらしい。

母が自分を産んだせいで死んだというのはショックだった。

俺はこの世界でも人を殺してしまっていると知り、顔面蒼白になり膝から崩れ落ちた。

女中さんが呆然している俺に何やら話し掛けている中で、隣に立っていた俺の爺さんが「お前を産む役割を果たしたのだから元々用済みの女よ。お前も些事にとらわれず、その才能を余すことなく秋山の為に使えよ」という言葉と共に笑いながら去っていくのを見て我にかえった。

元々人間形成に問題のある俺だが、家族に負い目はあっても悪感情を抱いたことはなかった。

それは生前の家族が普通の人達であり、一般的な愛情を俺に与えてくれたからに他ならない。

少なくとも今時ドラマの題材にすらならないような名家にありがちな妄執に憑かれた老人やその犠牲になる人がいることと関わる人生ではなかった。

今生の俺の唯一の家族は俺以上に歪んでいた。

その事実もまた俺の心に暗い陰をさす要因になった。

唯一の家族と言ったことで、これまたお察しの通り、俺の父親も既に故人だ。

昔、何かで負った傷がもとで、母が逝ったあとで追うように他界したらしい。

通りで自我が形成された時に両親の記憶を探っても見つからないわけだ。

前世と今生を合わせどちらの両親にも何も報いることが出来ないらしい。

自分が関わっている人達が不幸になっていることが辛い。

自分が転生しなければ良かったんじゃないかと自問自答を繰り返すのがそれからの日課になった。

ああ・・思い出せば出すほど生きているのが辛くなる。

それでも嫌な思い出だけは鮮明に思い出せるのだから余計陰鬱な自分から抜け出せない。

母と衝撃的な初遭遇したその日の夜。

普段は俺と一緒に食事をとることすらない爺さんが、黒塗りの高級車に俺を乗せこれまた無駄に立派な料亭？でいいのかな。とりあえず皇族御用達みたいなところへ連れて行った。

都内に京都の観光名所みたいな手入れされた庭が見える座敷。

そんな庭の眺めながら長い廊下を歩き、案内役の女性からやけに静かな一室へと通される。

爺さんに続いて中へ入ると、左右対象に並べられた御膳と左右対象ではないものの明らかに一般人ではなさそうな人達が座して俺達を出迎えてくれた。

この時俺は「ああ、俺は没落華族の跡取りで裏家業を取り仕切る頭取みたいな人物の後がまでもあるのか」なんていよいよ困惑と嫌悪感の最高潮を迎え、自分の人生にいつ終止符をうつべきか本気で考えていた。

爺さんが上座中央に座りその隣に俺を座らせる。

まるで見せ物だ。爺さんもきつとそのつもりなのだろう。

周りからの視線を受ける俺を眺め、厳つい顔をさも自慢げに歪めていた。

俺の困惑も嫌悪感も知ろうともせず。

俺も俺で弱気なところを見せないように、無表情ながら視線は真正面を見据え、背筋をピンと伸ばした綺麗な正座を保ち続けた。

誤解のないように頼むけれども、決して爺さんの顔を立ててるわけじゃないのであしからずご了承の程を。

理不尽な爺さんに舐められない為の3歳児にできる精一杯の虚勢なのだ。

3歳児であっても外面を取り繕う技術は十全と言えよう。

流石は俺だ。こんな風にならないように転生したのに全く変わっていない。

神様に語ったあの時の思いが急速に褪せていくのを感じる。

外面とは裏腹に内面は絶賛闇へと沈下中。

左右に座す人達からも視線と共に「秋山の御子」とか「莫大なる魔力が・・・」とか「稀代の術士に・・・」とか胡散臭い言葉が途切れ途切れに聞こえてくる。

断片的な言葉からだけで推測しても、裏は裏でもオカルト的な裏家業だというのは間違いないだろう。

これで違ってたなら、ここに居るのはイイ年したオカルトマニア達で、この集まりは痛いマニア達のオフ会になる。

なんて嫌な空間だ。

神様空間より酷い。

陰鬱に暗澹とした気持ちも加わり、正座を保つのも限界近く、瞼も重くなってきた。

3歳児の身体では夜更かしが出来ないのだ。生理現象が大人より強く現るのを実感する。

別にそんな俺に気付いたわけではないだろうが、隣の爺さんが立ち

上がり、実際の年齢より張りのあるよく通る声を上げる。

「今宵の会合に集まってくれた皆に秋山家当主として感謝する。此処に居る者は皆一様に西洋に対し苦渋を飲まされておろつ。我らが国土に不相応にも居座り、我らが永きに渡り護り崇め奉ってきた神樹を掠めとるといふ暴挙ともいえぬ愚劣極まりない所業にまで及んでおる。

更には皆の記憶にも新しかろうかの大戦にて、我らが同胞、我らが家族、そして我らが名誉を汚し喪わせた。

儂の子も大戦に駆り出され、愚鈍な西洋の愚物に狗のように扱われその際の負傷がもとで命を失った。我が秋山の由緒正しき血脈を我が国の呪術の礎たる血脈の一つを絶たんとしたのだ。

儂は決してあの下衆共を許さぬ。

西洋の狗畜生共をこの国から追い出さねばならぬ。

それだけではない。

西洋に恭順し誇りを失い狗に尾を振る裏切り者共も排除すべきなのだ。

唾棄すべき塵共だ。

奴らに我らが味わつた屈辱を億倍にして返し、我らが流した血涙を毒と共にのませてやろつ。

雌伏の時はいずれ過ぎ去る。

何故ならば、秋山家開祖以来触れられる者の居なかつた『神殺しの神剣：天之尾羽張^{アメノオハハリ}』を手に取る者が現れたのだ。

それが我が孫である蓮よ。

秋山に御子が降りたのだ。

神代の頃より語り継がれる神剣と日本呪術の直系の一つである秋山の麒麟児が揃えば西洋の愚図共は木っ端の如く散らされよう。

皆よく聞け。我らは必ず西洋の魔法使い共を地獄に叩き落とすであらう。そしてその時はもう間もなく訪れよう。

皆その時を地に伏せ、陰に隠れて待つのだ。奴らを血祭りにあげる

その時まで。

皆の願いは儂の願い。

思いは同じぞ。

今宵交わした誓いは必ず果たそう。

儂と蓮は皆の変わらぬ忠誠を信じておる。

これからも我が秋山家共に守っていこう」

爺さんと集まった人達の「秋山家万歳」「関東呪術一派万歳」を俺は舟を漕ぎながら聞いていた。

そして夢現に一つの解答に辿りついていた。

「ああ、これ多分『ネギま』だと」

とまあ突っ込みどころ満載の「『関東』呪術一派」の皆さんとの会合の思い出を振り返っていたらドタドタと床を踏み鳴らす音が近づいてきたことに気付く。

俺の後ろの襖が外れるんじゃないかと思うくらいの音を立てて開き、

騒音の張本人が鼻息荒く俺の側までやってきた。

「運っ！！貴様という奴は今日が何の日か知っておるうがっ！！」

「御爺様、その様に怒鳴ってはお身体に障ります。お医者様からも血圧が高いことを指摘されておられましたでしょう？」

「そう言えば処方された薬をまた捨てられたそうですね？いけません御爺様。」

病気の再発や悪化の背景には薬の飲み忘れや服用の中断が理由であることが多いのです。お医者様を盲信せよとは申しませんが、素人判断で治療を中断せずお医者様と相談なさった方がよいかと思考する次第です。

ああ、なんでしたらセカンドオピニオンというのも・・・」

「喧しいわっ！下らぬことをべらべらと宣いおって！！」

そんな話をする為に来たのではないわ！

儂らにとって今日がどれほど大事な日か忘れたとは言わさんぞ！！」

「ええ、ええ。存じ上げておりますとも。」

しかし御爺様。御自身の健康の為の話を『下らぬこと』と言って捨ててはいけませんよ？

私のような若輩が御爺様のような方に苦言を呈するなど不遜な行いであると理解しております。

しかし私の親族は御爺様ただお一人。

御爺様の身に何か良くないことが起こり、私一人になってしまったらと思うと胸の内に不安が波のように押し寄せてくるのです。

御爺様、どうか愚かな孫の願いを聞き届け、治療に専念なさって下さいませ」

「そんな話はどうでもよいと言っておるのが解らぬかっ！！」

大体薬ならば我が配下の医療術士が用意した秋山家秘伝の妙薬があ

る！」

「ああ、御爺様それはいけません。代々家に伝わる秘伝の万能薬等というものは大半が怪しげで不確かな物が殆どなのです。」

滋養強壮、栄養補給といった類いの物ならまだ良し。

なかには荒唐無稽な代物が御座いまして、先日私が訪問したお宅の年配の男性は万病に効くと言ってなんと御婦人用の薬を常用なさっておられました。

微笑ましい話とも取れますが、裏を返せば正しい治療がなされておらず、知らず知らずに病を増悪させてしまう恐れがあるのです。

聡明な御爺様ですから私の申したいことなど既に把握しておられるでしょうが、敢えて進言させて頂きますと、そんな怪しげな薬ではなくお医者様のもと、適切な治療を受けるべきなのだと再度お勧め致します。

ああ、そうです。私が病院へ診察の予約をとって参りましょう。

『善は急げ』という先達の言葉もあることですし。

では私が病院へ電話をしている間に御爺様を外出用のお召し物にお着替え下さい。あと女中のお花さんにハイヤーを屋敷の前に回すようお願いしないといけませんね」

「その要らぬことしか言わぬ口を閉じんかつ！」

大体由緒正しき秋山の妙薬を怪しげとは何事かつ！！

今日は！今日こそは僕らが悲願を果たす為の大切な・・・」

「御爺様。今日が大切な日であることなど重々承知しておりますとも。」

だからこそ私はこの場に居るのですよ？」

「そ、そうなのか？分かっておるのだな！？それならば・・・」

「ええ、今日は『母の命日』で『私の十四歳の誕生日』ですよね御爺様」

それだけ伝えて仏壇への合掌を終え、隣りで呆けた顔の爺さんに微笑みかけながら耳元でボソボソと囁く。

病院へ電話を入れる為に退室し、爺さんが開けたままにしていた襖を通り後ろ手でびっちり閉める。

背後で『何か』が倒れるような音を確認して足早に立ち去る。

携帯を片手に屋根の天辺まで一足で飛び上がることで屋敷内の面倒事から逃げ出した。

はい、改めてまして自己紹介を。

秋山蓮、十四歳！

麻帆良学園男子中等部二年生！

クラスでは保健委員をやっています。部活動はせず、週に一、二度ボランティア活動に参加しています！

趣味は勉強。

将来の夢はお医者さんになることです！

内側と外側がちぐはぐでバラバラで。

心にもないことを心が動く前に口に出し。

相手が言いたいことをはぐらかし。
聞きたいことを煙に巻き。

かと言って相手を納得させることもしないし理解を得ようとしてもしない。

好かれようと明るく振る舞い、好かれても常に同一な態度と姿勢と表情で一定以上には近よらせない。

見掛けは全て誤魔化しで見せ掛け。

着飾っているのはずっと着続けて草臥れた嘘の自分。

そして心中は常に後悔と悲嘆と諦観で溢れ。

思考は常に後ろ向きで卑屈で逃げ腰で埋まっている。

そんな歪な存在に俺と私は成りました。

屋根の上で「御爺様が倒れて意識不明なんです！救急車をお願いします！と慌てふためく演技をしながら住所を伝えて電話を切る。

携帯電話を制服のスラックスのポケットにしまう為身を擦る。

その動作で生じる僅かな体重移動でも屋根の瓦がカタカタ鳴る。

4月初旬の今日は曇天で少し風があり肌寒く感じる。

制服のブレザーは部屋に掛けたままなので、カッターシャツ一枚では屋根の上はちょっと辛い。

「せめてセーターくらい着とけば良かった」

嘆息しつつ呟く。

ずっと前から独り言が癖になってしまった。

「神様。俺やつぱり駄目だったよ」

3歳時の御披露目の日から、俺は自分の修正が追い付かなくなっていった。

爺さんの秋山家の秋山家による秋山家の為の演説のあと、大人達が「蓮様！蓮様！」と殺到してきた。

眠くて仕方ないのに

「蓮様お菓子をどうぞ！」「蓮様ジュースをどうぞ！」「蓮様果物をどうぞ！」

と矢継ぎ早に差し出される食べ物で俺の御膳は滅茶苦茶になっていた。

配慮が足りないというか空気の読めない関東呪術一派という集団は、世界樹のある麻帆良を攻め落とし、西洋魔法使いを追い払い、再び自分達の手の世界樹と関東の魔法呪術関係の実権を取り戻すが目的らしい。

らしいというのは、関東呪術一派が『一派』と言うだけあって一派閥の弱小団体でしかなく関東呪術師全体の総意ではないからだ。関東にもそれなりの大きさの呪術関係の団体はある。

それでも関東一帯の魔法や呪術関係を仕切っているのは、麻帆良にある「関東魔法協会」であり、関東の数多の派閥、団体の大本である関東呪術協会もその傘下になっている。

傘下にいるとはいえ呪術協会も好き好んで従っているわけではない。

江戸幕府から明治、大正、昭和と国政の中心であり、国の象徴の住まう帝都でもあった関東一帯の呪術守護は重要な役割だった。本家京都の関西呪術協会とは仲良しこよしな関係ではなかったが、日本を守護するという役割を互いに理解し組織ぐるみで協力し合える間柄だった。

これは俺個人の解釈だが、呪術協会は関西がお兄ちゃんて関東が弟お兄ちゃんは長いこと仕事をしてきたから実績があつて本社の京都勤務。

弟は仕事始めは遅かつたけれども、一番大きな仕事を抱えており、社長（国政機関）や会長（天皇）の覚えもいい。同じ会社（日本）に勤めているから、業績で負けたくないけど敵ではないし、会社を守るなら力を合やすことも出来る。それなりの関係で上手くやってこれてはいたのだ。

その関係に亀裂をいれたり事態をややこしくしてくれたのが、西洋魔法使いを中心とする魔法協会。

日本有数の神霊地である世界樹を含む一帯を選挙されるわ、魔法世界の大战で召集令状よろしく呪術協会の面々も駆り出されボロボロにされるわで、呪術協会は疲弊しまくつたのだ。

特に魔法協会と距離的に近しかった関東呪術協会の有り様は酷かった。徴収された人員、物資は同じ量だったとしても関西とは組織の規模が違う。

組織の体裁をギリギリ保てるかどうかという力しか残ってなかった関東呪術協会が存続する為の選択支は少なかった。

関西に吸収されるか魔法協会に降るか。

関東から呪術協会がなくなれば、関東一円は魔法協会に独占される。魔法協会に従えば、それは事実上敗北宣言となる。

じゃあ魔法協会と戦うのかというと、魔法協会のバックにはメガロメセンブリアという魔法国家が存在しており、たかが一組織のかなり相手ではない。

困窮し疲弊しきつた関東呪術協会内では意見が割れに割れて、それを收拾できるような有能な人材を多数失ったこともあり、組織内の対立や派閥化が進行。

結果、関東呪術協会は瓦解する。

あとは分裂なり独立なりした各派閥や団体がそれぞれ独自で行動する。

吸収されたり、恭順したり、反抗したり。

で、今に至るわけである。

俺は御披露目後は呪術や魔法について大っぴらに触れられるようになり、秋山家にある術書や魔法書も読み放題になった。

そこで関東呪術協会の文献を見つけ、大まかな組織の変遷を知った時は、関東呪術協会の悲惨さに泣きそうになった。

関東魔法協会についての団体は、国内から白い目で見られ売国奴扱い。

関西呪術協会に庇護を求めた団体は、関西の下請けの下請けの更に更に下請けの町工場の従業員扱いの上、関東を守れなかった連中だ

と見做され肩身が狭い。

反抗なんかした団体は、その殆どが壊滅。
個々で活動する小規模団体の中には、汚い仕事を主とする半ば犯罪組織みたいなものに成り下がったものもある。
当然そんな輩は嫌われ者である。

そして俺はその嫌われ者と壊滅した組織の生き残りで構成された弱小派閥の代表候補。
俺涙目である。

更に付け加えるとその関東呪術一派は、時勢に乗り遅れた間抜けや偉い人に脳みそ預けっぱなしの馬鹿や古き慣習と家柄に縛られた阿呆ばかりで、もう終わっちゃってる人達の集まりなのだ。

そしてその残念一派は麻帆良、ひいては西洋魔法使い全体に対して抗争を仕掛けている。
この俺を旗頭にして。
俺号泣である。

転生補正というべきか、俺は生まれもった魔力がやはり桁違いらしい。
生まれた際にそれを感じとった爺さんは、出産後容態が悪化した俺の母親に目もくれず、俺を抱えて屋敷の最奥まで走っていったらしい。

そこに奉納されていた神剣『アメノオハハリ天之尾羽張』に新生児の俺が触れられたことに狂喜乱舞。

「秋山開祖の再来」と狂笑し続けたとか。

『天之尾羽張』は故事神話の世界の代物であり、実際に存在するものではない。

仮に京歩譲って本物が存在したとしても人に御せるモノではないのだ。

アレは神剣であり神の石柱。神殺しの刀で神殺しの神である。

そんなモノをたかが呪術師如きになんか出来る訳がない。

そういうわけで、秋山家開祖が何を思っただにそんな大層な銘をつけたのか知らないけれども、特定の人間以外は触れられない呪い付きのパチ物であることは間違いないだろう。

赤ん坊になんて物を触らせやがるんだ爺さん。

話がちょっと逸れたけど、凋落著しい秋山家と関西呪術一派にとって、俺という存在は状況を逆転させらせる鬼札と考えられている。幾ら魔力が高いからといって幼児を利用するなんて呆れた連中だ。

それからというもの、俺は爺さん達から歪んだ洗脳英才教育が行われた。

『西洋魔法使いは悪』という爺さん達の怨敵であるメガロメセンブリアの元老院も真つ青な視野狭窄の閉鎖環境に追い落とされたのである。自分が転生者でなく普通の幼児だったらどんな成長を遂げただろうと想像すると薄ら寒いものがある。

二次創作やなんかで子供先生の歪さや不自然さが強調されているが、自分が同じ立場になってみるとあの程度の歪み方なのがすごいくらいだと思える。

父親を追うという信念があるとはいえ、ひたむきさを失わず純粹さを忘れないのは驚異だ。

なんだかんだで流石は主人公。やはり俺みたいな奴とは違いすぎる。

また話が脱線してしまった。

ともあれ、俺の方は自分の歪みを矯正して真つ当な人生を送るどころか、俺以上にぶっ飛んだ大人と環境に囲まれ、見事更正に失敗したのだった。

爺さん達にとって都合のいい存在を演じながら、能力に磨きをかけ。爺さん達のご思想と思惑に乗った振りをしながら、自分が生き残る為の逃げ道を模索し。

爺さん達と秋山家の栄光を取り戻す夢を適当に語り誤魔化しながら、俺の人生の障害になりうるものを排除する為の準備を整えてきた。

そして去年、爺さんの命で敵である麻帆良学園に潜入するため男子中等部に入学させられ。

晴れて二年生になったこの日、俺の準備と関東呪術一派の準備が全て整った。

妄想と妄執を高らかに掲げ、猛然と猛悪に突き進む、盲目と盲信の天の下へと続く道。

正道を外ずれた者共が辿る道は、いつだって地の底にしか続いていない。

さあ滑稽な三文芝居に興じよう。

外道共よ。満願成就の時がきた。

「もしもし。ガンドルフイーニ先生ですか？

私です。男子中等部二年の秋山です。

お忙しいところ申し訳ありません。

お話ししたい事が御座いまして、お時間を頂きたいのですが今の時間は大丈夫でしょうか？

有難う御座います。

それでお話したいことの内容なのですが・

ええ、そうです。

お察しの通りです。

先生は若輩者の私のことなどお見通しなのですな。

ということは周囲の人払いもお済みで？

流石先生です。私などが気を回すまでも御座いませんね。

そんな、とんでも御座いません。私など未熟で浅薄な若僧でしかありません。

先生のお心遣いに深く感謝致します。

ああ、いけませんね・先生からの温かいご配慮に甘え、肝心の内容をお伝えすることを失念しかかりました。

自身の未熟さに辟易してしまいます。

では・・・

彼等は今宵、かねてよりの計画を実行にうつすようです。

学園の春休みに合わせ極力一般人を巻き込まないように考え、人払いの呪付も大量に用意はしているようですが。

そもそも、このような暴挙に出ること自体、他者の安寧を脅かすことになる何故気付くことが出来ないのでしょうか・・・すみません。自身の不甲斐なさが悔しく感じまして・・・

いえ、私も彼等の暴挙を止められなかったのです。同罪であると思うのです。

力がなかったことなど言い訳になりません。

私自身にもう少し力があれば、先生方のお手を煩わせることもなかったのにと。

悔やんでも悔やみきれません。

・・・今は嘆いている時ではありませんね。

彼等は日が落ちる頃には秋山の屋敷に集まる手筈となっています。

そこから麻帆良の結界を中から私が崩し侵入。

魔法先生、生徒を強襲し捕縛または暗殺しつつ主要施設を占拠。

彼等が狙うのは先ず学園長や先生などの戦力です。

本来の目的は世界樹だったのですが、今や妄執に取り憑かれた彼等は、西洋魔法使いへの直接的な報復を望んでいるようです。

恨む理由があつたかもしれませんが無かなことです・・・

彼等が麻帆良に辿り着く前に捕縛するべきなのでしょうが、秋山の屋敷は呪術で守護されており攻め入るのは危険ですし、もしもの時の逃走経路も御座います。

移動中に確保するのも何人が取り逃がす恐れがある以上やめておく方がよいでしょう。

ですので私が彼等を学園内に侵入させたところで彼等の周囲に捕縛用の呪を施します。

私程度でも数分は保たせられかと思えます。

先生方は離れた位置に潜み、私が合図をしてから駆けつけて頂きます。

す。

・・確かに私の身は危険に晒されます。

先生方が来られるまでに私の呪が破らないとも限りません。しかしこれは私の役目なのです。

彼等を諫めることが出来ず、愚かな行い起こさせる要因となった私の贖罪なのです。

事態が収束した後は私も彼等と共に裁きを受けるつもりです。

いえ・・いいのです。私も彼等の一派なのですから。

私は正義の協力者ではなく、ただの裏切り者なのです。

ですからガンドルフィーニ先生が私なんぞにお心を砕いて頂かなくてもよいのです。

そのお言葉だけで私は十分救われております。

どうか正義として正しいご裁量を為さって下さい。

どのような結果でも甘んじてお受けします。

学園長や他の先生方にもお伝え下さい。

侵入経路と場所、私と彼等の到達予測時間については、判明次第、式を飛ばし通達致します。

恐らく電話をすることは難しいでしょうから。

では夜にお会いしましょう。

失礼致します」

第五話：もう挫折（後書き）

原作キャラが名前だけです。初登場です！
やったー！！

そして主人公も名前が出ました。
容姿についてもちょっとだけ描写されました。
ちょっとだけだからキャラの輪郭が未だにふわふわしてますが、
内面もふわふわしてるし外見も適当でいいかなあと思ったり。

主人公は呪術関連を幼少時から叩き込まれ、普通の術士と同等程度の能力があります。
転生時に付与された能力については、適当に誤魔化しながら使っていくと思います。

主人公はなんか色々諦めちゃってるからおかしな技や術を使うことがバテても

「別にどう思われてもいいや、面倒臭い」
とその場をしのげたら良し。しのげなかったら諦めて流れに任せる
といった思考です。

最終的にキャラがどこに着陸するのか私にも不明です。

第六話：後の祭り（前書き）

とりあえず投稿できるうちに、バンバン出していきます。

「ネギまー！」「って可愛い女の子がいっぱいで話じゃなかったっけ？

第六話：後の祭り

懐かしい独特の空気感と匂い。

ある種の隔絶とされた世界。

この住人であることを示すような統一された服装の人と、外界から入ってくる一般的な洋服の人とが互いを意識しながらも注視しないことが暗黙の了解であるかのようにすれ違う。

見ることが失礼。

意識することが無礼。

何に対する引け目かはわからない。

潜在的な忌避。

一般人であった自分が一般的に振る舞う術を奪われたかのような住人達。

淡い色合いの壁と床。

決して清潔になんかならないのに、狂ったかのように環境を清潔にすることに拘る空間。

安全と安心と安楽を提供する癒やしの場。

不安と不自由と不吉を突き付けられる生死の境界。

俺が人の全てを犯し奪い踏みにじった罪悪の現場。

実態を知らない人から天使扱いされる白衣の職員に目的の部屋を確認し、妙に粘つくような気分がする廊下を歩く。

部屋の番号とネームプレートに表示された名前に間違いがないことを確認して数回ノックする。

向こうからの返事がないが「失礼します」と入室する旨を伝えドアノブを捻り扉と身体を一緒に前に押し出す。

入室する際に少し下げている頭をあげると、丁度中に居た人物と目が合い思わず笑みを浮かべてしまった。

「お身体の調子は如何ですか御爺様？」

看護師さんから伺ったのですが、お目覚めになられてから何やら妙なことを言っておられるとか？

『呪術』とか『魔法』とか。

ああ、ご安心下さい。

『祖父は迷信深く、生粋のオカルトファン』だと説明しておきましたので。

あとこの雑誌を床頭台に置いて頂けますか？

これで看護師さんも納得してくださると思います」

顔面どころか全身も真っ赤になるんじゃないかと思うくらいに怒りのオーラを噴出する爺さんに、俺はそっとお見舞いの品として『ムー』を差し出した。

昨夜の関東呪術一派の計画筒抜けの復讐劇は、ものの十数分で俺

を含め関係者全員が確保された。

何年も前から今日という日を妄想してきた呪術一派の連中は、あまりと言えばあまりの結果に顔色を赤白青と実に多彩な変化を見せていた。

そこから俺のとつた行動への罵声に怒声に悲鳴が飛び交い、様々な悪口雑言も加わり聞いているのに疲弊し俯いている俺の肩にガンドルフィーニ先生の大きな手が置かれた。

顔を上げるとガンドルフィーニ先生の精悍な顔が俺の数倍は辛そうで、それでも俺のことを労るように真摯な眼差しで見つめていた。

俺は心配はいらないとばかりに弱々しく笑みを浮かべると、『自身の良心に従い、多く人々の悲劇を食い止める為に自らを過酷な状況に置いた少年』を装う。

そんな俺を見て苦渋の表情をより強くするガンドルフィーニ先生を眺めながら

『なんでこんな良い人が二次創作では割を食うことが多いのだろう？』
なんて考えていた。

関東呪術一派の連中は、俺を利用しようとしただけでなく、復讐の為の資金集めと称し、拉致や誘拐、傷害や殺人まで行っていた。事件の背景にどれだけの悲劇があるうとも、人として越えてはいけ

ないラインを軽々と踏み越えてしまっている連中には同情する気にはならない。
ましてや復讐の理由に利権や打算まで絡んでいるのだから尚更だ。
連行される彼等にはしつかりと罰を与えてほしい。

しかし、かく言う俺もそんな輩と大してかわらないのだ。
犯罪行為で得られた金銭は、活動資金だけでなく、秋山の無駄屋敷の維持費はその血にまみれた金でまかなわれていた。

没落華族に権威も資産もなく、薄汚い虚栄心は更に汚れた利己主義で支える。

不快極まりないが、俺が生きて成長する為の糧はそれによって提供され、俺はそれを知りながら

『今の自分にはどうすることも出来ない。だから嫌々だけど我慢して受け入れる必要がある。でも本心は違うんだ』

と自己弁護して、犯罪行為を諫めることも非難もせず唯々諾々と爺さんや一派の連中に従い続けていた。

結局今回の一件は、俺の良心に基づいた正義の行いなんてものじやなく、爺さん達への悪意と意趣返しであり、犯罪に荷担していたんじゃないという言い訳と、そんな状況にいることへの後ろめたさと後悔から逃げ出したかったのが理由なのだ。

その為にガンドルフィーニ先生の良心と正義感を利用して、保身の為に身内を売ったという凡そ正義の主人公から程遠い行為だったわけだ。

「つくづく自分が嫌いになるよ」

事件の詳しい経緯の調書をとったり証拠関係の提出などがある為、重要参考人として俺は先生方に促されるまま、星の光も街灯の灯りも乏しい、闇色に染まった木々の間をトボトボと歩き続けた。

side 学園長

「学園長！秋山君に対する寛大なる処置をお願いします！
彼は善良で誠実な少年です。」

今回の一件も彼が私達に情報を提供し、自身が矢面に立ってくれた
からこそ、被害も出さず解決出来たんですよ！？」

「わかっておるよ、ガンドルフィーニ君。」

秋山少年の協力がなければ相応の被害があつたであろうことも、彼
が提出してくれた証拠がなければ呪術一派や関連組織の犯罪行為の
立証も叶わんだこともな」

「でしたらっ!?!？」

「それでも、彼を何事もなく無罪放免にすることは簡単にはいかん
のじゃよ・・・」

全くもってままならぬことじゃな。

何度目かの溜め息をつきつつ椅子の背にもたれかかる。

しずな君が気を利かせて入れてくれたお茶も手付かずのうちにス
ツカリ冷めてしもた。

今夜の一件。不遇な立場に追い込まれておった関東由来の呪術系派閥の暴走は、その境遇を鑑みればわからんでもない。彼等にも言い分はあろう。

じゃが、その為の手段として他者を害し殺めようとするなど言語道断。

更には秋山少年の提出した資料を流し読みしただけでも、儂の年齢を上回る程の犯罪履歴がある。

半ば強制的に傘下に入ったため、御しきれておらんかった関東の呪術一門じゃが、儂らの膝元でこつも狼藉三昧を繰り返しておったとは。

各組織への訓告だけでなく査察や直接的な指導も行わなければなるまい。

・・こりやしばらく忙しくなるのう。

頭を抱えたくなるが、先生方の前で最高責任者がそんな態度をとるわけにもいかん。

変わりに伸ばし放題になつとる眉毛を撫でつけとくか。

さしあたっては先ず件の秋山少年のことじゃな。

昨年男子中等部に入學した時から話題にはあがつとつた。

『関東呪術の名家、秋山家の秘蔵っ子』

『莫大な魔力をもつ麒麟児』

他にも色々と異名をもつておつたが、外部に姿を見せたことは数えるほどしかなく。

屋敷から殆ど出ることのない正に『秘蔵』された存在じゃつた。そんな子じゃからな、そうなる理由もわかる。

儂らとて、木乃香が生まれてからしばらくは徹底的に守護し、外部との接触は極力避けておつたからのう。

莫大な魔力をもつ名家の幼子なぞ、欲や悪意に満ちた輩からすれば利用価値に溢れた宝物に映るじやろ。名家という立場も敵に事欠かんしろう。

そんな少年がいきなり麻帆良に入学してきたのじゃ。

そりゃあ結構な騒ぎになっとったわい。

好意的に見てくれればよいが、奇異の視線や品定め、中には呪術協会の刺客という者もおったのう。

当たらずも遠からずじゃったがの。

秋山少年は木乃香と違い、幼い頃より呪術を学んでおった。

魔法関係者として入学することになるので、秘匿の説明を名目に儂が対面することにした。

関東秋山の秘蔵っ子にも興味があったからの。

実際会ってみるとなかなか面白い少年じゃった。

折り目正しく礼節を弁えておるし、物腰も柔らかい。

細面で丁寧に切り揃えられた髪から覗く目も切れ長で鼻筋も通っておるが、年相応の幼さの残る面差しが愛らしさを感じさせた。同年代の子と身長は大して変わらぬが、鍛えておるのだらう、細身ながら引き締まった体格をしておった。

「こりゃ成長すればさぞかし良い男になるわい」と感嘆したもんじや。

魔力は制御しておるのかパツと見ではわからぬが、内包しておる力は確かに強大だと感じた。

そのことを聞いたら

「恥ずかしながら制御は苦手です、家中にあった呪具と家の者に呪印を施してもらって制御しているのです。」

無闇に力をみせないように祖父に厳命されておりすし」と困っているような笑みを浮かべておった。

思った以上にしっかりしており、力の有用性と危険性も把握しておる。

孫の木乃香とそんなに年が離れておらんのに大したもんじゃ。

秘匿についても十分に理解しておったが「刑に服すのは嫌ですが、オコジョになるといっつのはちょっと興味がありますね」と思案しておる様は、まだ少年の粋を出していないのだと感じさせ微笑ましかつたのう。

入学以降は勉強も生活態度も真面目で好感を持てる他、他の先生方からも聞いており、申し訳ないと思いつつも監視をつけていたが不審な行動はないと報告された。

高畑君にも接触してもらったが、「彼自身はこちらに害を及ぼすことはないでしょう。生まれ育ちを抜きにすれば普通の生徒ですよ」とのことじゃった。

秋山少年自身はシロ。ただし背後関係は灰色というのが僕の結論であつた。魔法関係者である為、何人かの魔法先生を紹介したが、背後関係が不透明な以上、こちらに関わらせるには訳にいかず、彼も学外の秋山家から通学しておつた為、不要な接触は避けるように通達しておいた。

じゃから彼が入学をして何事もなく一年が過ぎようとした先月。秋山少年自身からもたらされた『秋山家とその一門による犯行計画』

は寝耳に水もいとこじゃったわい。

ガンドルフイーニ君なんかは、すぐさま秋山家を糾弾しに行こうとしておったが、事を起こしとらん状況で追求してもかわされるだけじゃ。

また衰退したとはいえ関東呪術協会の名門だった秋山家を一方的に責めようもんなら、他の呪術団体や組織がどんな反応を起こすかもわからん。

それに秋山少年から情報が漏れたと知れたら、彼の身が危険に晒され恐れもある。決して迂闊な真似は出来ん。

かといって放置出来る問題ではない為、早急に対策を練らねばならなかった。

情報が欲しい。そう思った時、秋山少年が計画実行までの情報提供と、秋山家と呪術一派の不正や犯罪の証拠を収集する為の全面的な協力を申し出た。

有り難い話ではあったが、彼が其処まで協力する理由がわからなかった。

善良な少年じゃと思つとつたが、身内を糾弾出来るような信念や覚悟をもつような人間には見えなかったからのう。

じゃが『何故君は其処までするんじゃ?』と問うたことは不覚じやった。

秋山少年の口から語られたのは、祖父や一派による幼少時からの過酷な修行。

悪意と憎悪と妄執による西洋魔法使いへの排除を抱かせる為の洗脳染みた教育。

寝物語のように聞かされる関東呪術一派の悲惨で無惨で哀れな境遇。

そして何より、自身の周囲の人間が犯罪行為を平然と行っている事実。

まだ少年の域を出ておらん彼に話させるにはあまりに酷い内容じやった。

一緒に聞いておったガンドルフィーニ君は全身から怒りを滲ませ、高畑君も不快感に顔をしかめており、しずな先生は沈痛な面持ちで秋山少年を労っておった。

儂は木乃香と秋山少年はよう似た環境で、魔法を知っておるかそうでないかの違いしかないと思っておった。
事實は違う。違い過ぎる

木乃香は皆に愛され庇護されておる。

秋山少年は誰からも愛されず道具として扱われておる。

入学して間もない時に対面した際も、人伝に聞く彼の様子も、いつも礼儀正しい年相応の少年だと思えんかったのに。

今ここにおける彼は、大人へと成長していく過程を飛ばして作り上げられた歪な青年のように映る。

何故気付かんかったんじやろう。

この少年は、立ち振る舞いも、語る言葉も、在り方も、その全てが何一つ『普通』ではないのだと。

「学園長っ！！聞いておられるのですかっ!?!?」

「フオッ!?!?う、うむ。ちゃんと聞いとるぞい、ガンドルフィーニ

君」

いかんいかん。ちと以前のことを思い出しておったら、目の前の問題のことを忘れておったわい。

こんな姿を見せとつたら呆け老人扱いされかねんのう。

「ガンドルフィー二君。先程も言ったがあの少年の処遇は簡単に済ませられる問題ではないのじゃよ」

「だから何故なんですかつ！

その理由をお聞かせ下さいっ！！」

「彼の出自と立場じゃよ・・・

没落したとはいえ、彼は関東の呪術の名家秋山家の次期当主じゃ。

今回の一件では儂らに協力してくれたが、彼の所属はあくまで呪術一派であり関東魔法協会の所属ではない。

しかも奴らの計画遂行の為の最も重要な役割をもった中心人物なのが彼じゃ。

彼自身に罪はなくとも、儂らが彼を庇うことは対外的は難しいのう・・・」

更には強大なあの魔力じゃ。

秋山家は今回の一件で今度こそ完全に潰れる。

そうなれば、行き場を失った秋山少年を抱き込もうとする組織や団体はあの手この手で接触してくるじゃろう。

それを儂らが保護すれば「関東魔法協会に呪術の名門の子を奪われた」と反感や怨恨を抱かせることになる。

それは関東魔法協会と関東の呪術団体との溝を更に深めるだけでなく、新たな騒乱の火種となるのは間違いなからう。

そこまで言って冷たくなつたお茶を一口啜る。
茶の味がやたらと苦く感じるわい。

ガンドルフィーニ君も事情を理解したのか声を荒げることはないが、「しかしそれではあまりに・・・」と渋面で苦々しそくに唸っておる。

「学園長。魔法協会で彼を保護出来ないのであれば、関西呪術協会に保護をお願いするのはどうでしょうか？」

ガンドルフィーニ君が言葉に窮しておるかわりに、静かに控えていた葛葉くんが話を繋ぐ。

「それも厳しいのう。」

確かに魔法協会よりは対外的にマシじやろつが、関西呪術協会にも関東の流れを汲む呪術師が多い。

向こうで大人しくしておる奴らを刺激しかねん。

それに関西の長である婿殿は近衛の一員じゃ。

魔法協会でなく『近衛に秋山の子を奪われた』という風に受け取られ方が変わるだけじゃよ」

葛葉くんも元々無理だと思つておつたのか「そうですね・・・」とだけ言つて引き下がった。

他の先生方の表情は冴えない。

秋山少年を取り巻く環境の不遇さを哀れと思つておるが、如何ともし難い状況を理解し何も言えないようじゃ。

無力感は儂も一緒じゃよ。

「あのう・・・学園長」

ガンドルフィーニ君の後ろから、瀬流彦君がおずおずと顔を出した。

「ちよつと話が逸れるのですが、今夜捕縛した呪術一派の中にもう一人の重要人物である秋山家の現当主の姿が見当たらなかったんですけど」

「それについては秋山少年から聞き及んでおる。

秋山の当主は今朝方に倒れて入院中らしいのじゃ。

入院先の病院にも確認して所在はこちらでも掴んでおるから心配いらん。

それにの・・・」

秋山少年が儼然に協力する為に、彼が唯一提示した条件。

穏やかな少年の瞳に映った、彼の他者に見せないようにしていた暗い闇色の情念。

歪んでいる彼の本質の一端。

「『祖父のことは自分で決着をつける』」

それが秋山少年の望みじゃった。

「・・・という訳で秋山家並びに関東呪術一派の長年の悲願は、一夜の夢の如くさりと過ぎ去り終焉を迎えたので御座います。今朝までお眠りであった御爺様に、夢から覚めたというのは言い得て妙で御座いましょう」

入室するなり激昂して俺を出迎えた爺さんに、昨夜の顛末を俺の暗躍もネタバレしながら説明する。

爺さんはもう浮き出た血管が切れて血が噴出しそうなくらい喚き散らす。

血圧高いんだから興奮し過ぎると冗談抜きで脳卒中になりかねない。

ここは病院だからすぐに診てもらえるだろうし、元々そんなこと心配はしてないけど。

「御爺様。人払いは済んでおりますが、ここは病院です。大声をあげるとは他の患者様のご迷惑になりますのでお控え下さい」

「ふざけるなっ！！」

誰のせいでもうなつたと思っておるかっ！？

よもや儂らの悲願をよりにもよって貴様に阻まれるとは！

魔法協会に尻尾を振り、関東呪術を裏切るなどこの恥さらしがっ！！貴様に名門秋山の誇りはないのかっ！？」

そんなもの。

そんな糞みたいなもの。

そんな毒みたいなもの。

「俺は欠片も持ち合わせちゃいねえよ。

なあ、爺さんは俺の何を見てきた？

秋山の為に身も心も尽くすように見えたか？

あんたの有益な道具として生きていることを享受しているように見えたか？

見えてなかっただろうな。

今の俺の姿を見てそんな顔してんだもんな。

秋山蓮という存在をその力以外で見たことなんかなかったもんな
！！

しつかり見るよ？これがあんたが見てこなかったモノだ！

あんたが俺を、俺の本質をちゃんと見ていりゃこんなことにならない
かったんだ！！

くだらない悲願が失敗したの俺のせいだよ。

そしてあんたのせいだ。

あの下衆一派の連中にも謝っとけよ？

『耄碌した儂の濁り腐った目と生塵みたいな妄想のせいで散々迷惑
かけてごめんなさい』

つてなあっ！！」

神様のところに居たとき以来だ。

こんなに感情に身を任せたのは。

爺さんの呆気にとられて口をパクパクしている滑稽な姿を見て、
不愉快だけどころと爽快な気分になった。

「では御爺様。私は先に屋敷に戻っております。

お帰りの際は、先程お渡しした雑誌に長距離用の転移符が挟んでありますので、そちらをお使いになって下さい。

残念なことに御爺様は現在犯罪集団の長として厳重に監視されております。

そのまま外へ出られますとあつという間に捕縛されてしまいます。

祖父の身を案じるものとして愚考いたしました結果、この方法が最善であると判断致しました。

では屋敷でまたお会いしましょう。

ああ、一応確認しておきますが、

『逃げるなよ糞爺。あんたの大事な腐臭のする誇りにかけて俺を殺しに来い』

、で御座います。

ではこれにて失礼致します」

未だに自らの身に起きた事態に混乱している爺さんに恭しく一礼して、扉に貼った人払いの呪符を剥がして病室を出る。

人払いの呪符がなくなると急に人の気配が濃くなるので、いきなり沢山の人に囲まれたようで気分が悪くなる。

爺さんの病室を教えてくれた看護師とすれ違ったので、改めてお礼を言うついでに「想像していた以上に祖父の様子が変でした。話しがちぐはぐで私のことを化け物扱いしたりと要領が得ません。考えたくはないのですが痴呆が始まっているのかもしれない」と困惑した表情で伝えておく。

看護師から「入院したことで一時的に混乱されているのかもしれない

ません。気を落とさないで下さい」と優しい笑顔で励まされる。正直ちよつと惚れかけた。

本来なら事件の重要参考人である俺が外出することは難しいかと思っていたのだけれども、学園長も他の先生も割とあっさり許可してくれた。

俺の人柄を信用されているらしい。やはり普段の行いがいざという時ものを言う。

俺が言った条件のこともあり、爺さんと俺、互いに何をするか心配もあるのだろう。

離れたところで監視させてほしいと言われ、別に困ることではないので了承しておいた。

秋山の屋敷に着いてから、衣服や最低限の生活用品、両親の位牌をバッグに入れて、多分大丈夫だと思うが盗まれないように認識阻害の呪符を貼り付けて外に隠す。

十数年住み、良い思い出など数える必要もない無駄に大きな屋敷を一眺めして、屋敷の最奥へと歩み進める。

屋敷に罪はないけれども、どうせ誰もいないのだし勢い任せに襖を蹴り破つたり、障子に穴を空けたりと、はっちゃけながら進み、途中で自分のやってることの阿呆っぷりに酷く落ち込んだ。

でもまあこれくらいいいだろう？

ぜひせ今日でこの場所も無くなるのだから。

第六話：後の祭り（後書き）

平均年齢の高いキャラしかまだ登場しないという。

学園長に視姦される主人公。

「学園長は舐め回すかのように彼の頭上から足先を眺めていた」としずな先生が第三者視点で見ていたとかいないとか。

容姿は当初平凡か美形か迷いましたが、せつかく漫画の世界に来たのだから格好良く描いてあげようと、良く解らない理由で決めました。

主人公やその周りが格好悪いかわりに、原作の方々には格好良く素敵な人物にしたいです。

次回初戦闘。

戦闘描写も駄目っぽい。

何なら書けるんだ・・

『文才買います。金額要相談』

第七話：後の始末（前書き）

なんとか投稿。

想像以上に難しかったです。

こんな拙い文でも読んでくださる方がいることが本当に嬉しいです。

未熟者以下の微熟者ですが、今後ともよろしく願います。

第七話：後の始末

一歩踏み出す度にギシギシと軋む階段を降りて行く。

申し訳程度の照明は足元まで照らすには頼りない。

普通の階段の幅よりも狭く段差も低い為、一段降りる事に度に現れる、何とも言えない違和感が気色悪い。

ひんやりと冷たい土壁に左手をつきながら慎重に階段を降りるのと数分。

観音開きの赤黒い扉が見えた。

黒い鉄製の輪っか型のとつてを左右両方片手づつ掴み引く。

何十年、何百年と変わらず此処に在り続けた為か、扉と壁枠が歪んでいてガリガリと床を削りながら開いていく。

扉の向こうから寒々しい空気が流れ足元を冷やす。閉めきつた空間でありながら黴臭さや埃の混じった感じもなく、むしろ冬山の山頂のようなピンと張り詰めた澄んだ気配がする。

中は真つ暗だが転生して強化された視力のお陰で大まかな広さは把握出来る。

神様空間のように無限の広さがあるわけではなく、小さな市民体育館程度くらいかなって適当に目星をつけ、中へと歩み出す。

中央に淡い輝きを放つ『モノ』があり、恐らくあれが秋山家の神宝である『天之尾羽張（仮）』なのだあたりをつけた。

胡散臭い眉唾ものだと思っていたが、想像を遥かに超える重圧を感じる。

刃渡りは100センチ程で柄尻までの長さを加えると150センチ近くはありそうだ。

片刃だが反りはなく、西洋刀のようにも見える。日本刀のよう丸鍔がなく、刃先から柄尻まで一つの金属で拵えてあるようだ。

神剣と称されるのは伊達ではなく、眺めているだけで肅々とした気分になる。

木製の台座に鞘もなく抜き身で横置きにされているが、かつて赤ん坊だった自分が触ったことを思い出し、手を怪我したらどうするんだと爺さんへの怒りがまた一つ増えた。

その神剣の前に黒い狩衣姿の老人が座しており、スツと立ち上がり右手を払う動作で、神剣の四方にあった燭台に火が灯る。

火に照らされた老人の表情は厳しく、背にする神剣のように抜き身の刀剣のような伶俐さがある。

真っ直ぐに背筋を伸ばし、幾年も鍛え上げた体軀は僅かの揺らぎもない。

俺の数十倍もの修行と経験によって裏付けされた一流の術師の姿。

関東秋山家の現当主である俺の祖父の姿がそこにあった。

張り詰めた空気の中、真一文字に閉じられていた爺さんの口が開く。

「……随分と遅かったな」

『お先に屋敷でお待ちしております』

屋敷の最奥の場所を知らなかった俺は、迷い迷って逆に爺さんを待たせてしまった。

ちょっと申し訳なかった。

まあ、仕方ないと思うんだ。

俺はこの場所に一度も来たことなかったし、それどころか屋敷内に入ったことのある部屋の方が少なかったのだから。

荷物を外に置いてから格好つけて屋敷に入り直したまではよかったが、屋敷内のありとあらゆる部屋を片っ端から探しまわり（住み込みの女中さんの部屋に入る時は少し躊躇った）、もしかしたら地下室かと考え畳をひっくり返すこと数時間。

全く見当たらず、一度外に出て屋敷の裏手に回ったら小さな蔵があった。

そこに先程降りてきた階段があり今に至るといふ訳だ。

屋敷の最奥だと言ってたのに、屋敷の敷地内の奥というのは酷いと思う。

地下で独りきりの爺さんを想像するとかかなり寂しいものがある。

「『逃げるな』と言っておきながら、貴様の方が臆病風に吹かれたのかと思っただが、儂を焦らせて油断させるつもりだったのか？」

「いえ・・・この場所が解らず、屋敷の畳をひっくり返してありました」

「・・・そうか」

何という、いたたまれない空気だ。

爺さんの顔が引きつっている。

「えっと・・・まずは参上が遅れまして申し訳ありません御爺様。全て私の不徳の致すところ。謹んでお詫びを申し上げます」

「今更取り繕くろわんでもよいわ。

あの病室で見たアレが貴様の正体であろう。

慇懃な所作が今となっては薄気味悪いわ」

「いえ、あの時は『これが俺の本質』だと申しましたが、表面的で仮初めで白々しい私もまた私なのです。

十数年御爺様の前でこれで通しておりましたから、この所作を変えるのも今更で御座いましょう」

爺さんはフンと鼻を鳴らし、狩衣の袖から呪符を数枚取り出し俺へと翳す。

「昔から賢しい子供だと思っていたが、よもや外と内を使い分けておったか。

まるで弧狸の類いのようじゃ。

呪術の名門が妖しを産んだとはとんだ笑い種よな」

「妖しは祓わねばな」と翳していた呪符を俺との丁度真ん中あたりに放つ。
床に着くやいなや呪符が輝き梵字が浮かび、その光が円を描くように広がる。
爺さんの姿を遮るように身の丈3メートルはありそんな武者鎧を纏った鬼の群れが現れる。

「式神……」

現れた異形の存在に気圧される。

「そうだ。貴様が扱う小鳥の式とは別格のな。」

秋は『悪鬼』

山は『夜魔』

闇に住まう妖魔を統べる者こそ、関東呪術の名門秋山の力よ！」

現実には有り得ない怪物。

幼い頃から修行の為に式を放たれることはあった。

その式達はどこか愛嬌があり、俺に冗談を言いながら修行をつけてくれていた。

しかし今、目の前に居るヤツらは別格だ。

鈍く光る爪や牙。

俺の胴体の倍くらい太い手足。

ギョロリとした目には俺を殺すという明確な殺意がある。

コイツ等は俺を引き裂き、噛みちぎり、叩き潰すことを躊躇わな
いだらう。

「（怖い）」

握り締めた手が震え、足が膝から崩れ落ちそうになる。口が閉じられず、呼吸が正常に行われていないように胸が痛む。生まれて初めて受ける圧倒的な殺意。

「（殺される）」

死ぬことを怖いと思ったことはない。

痛いとか苦しいとかは嫌だが、死んでしまうことに特別な意味を感じることがなかった。

病院で患者の死を看取った時も、友人の突然の訃報を聞いた時も、優しかった祖母が亡くなった時も。

表面的には悲しみを演じながら『ああ、居なくなるんだ』と淡々と自己処理をしてきた。

そして自身の死も受け入れていたつもりだった。

自分は消えた方がいい、消えた方が楽だと。

それは死を受け入れたわけではなく逃避。

しかし平和な世界に生き、貧困な想像力しかない俺が死の恐怖を知ることなどなかった。

でもこんな死を想像したことなんてない。

圧倒的な暴力で耐え難い恐怖と苦痛の中で自分が惨殺される最期など想像出来る筈もない。

濃厚な死のイメージが今なら出来る。

今更になって出来た。

「（動けよ！？戦いの準備をしなれば！）」

そう思っても凍りついたように身体が動かない。
爺さんが何か話しているがちつとも耳に入らない。
俺は何をしに来た？

爺さんと茶でもって酌み交わしにきたつもりだったのか？
爺さんは俺を殺しに来てるのにな？
爺さんに殺しに来いと言ったのは自分なのにな？

「（主人公だ！何が戦う姿を見てみたいだ！！）」

俺はこんな世界で生きていける筈がない。

覚悟もない。

理解もしてない。

自分の力を過信して溺れていた。

自分の現実を見ずに自惚れていた。

鬼が一步踏み出したのを見て、俺は弾かれたように後ろへと駆け出した。

「無理だ！無理だ！無理だ！こんな無理に決まってる！！」

歩法も何もあつたものじゃない。

修行の成果は何一つ現れず、ただ逃げ出す為の無様な走り。

圧倒的な脚力で扉まで辿り着き、壊さんばかりに体当たりするがビクともしない。

「何でっ！？俺は強いんだろ！？」

すごい力で転生したんじゃないのかよっ！？」

その気になれば厚さ30センチの鉄板だった貫ける俺の拳でも、

ただの鉄製の扉は凹みもしない。
それでもがむしゃらに叩き続ける。
手の皮が破れ血が滲んでもひたすらに。

「嫌だ・・・こんな嫌だっ！！こんな望んじやいないんだ！！」

誰でも良かった。

助けてほしい。

悪い現実から助けてほしい。

夢の中に沈めてほしい。

「儂がただ貴様を待っていたと思うか？
愚直なまでにただ座していたと思うか？」

爺さんの嘲るような声が耳朶をうつ。

「この神剣の霊力を使い貴様の力に干渉させ、神剣が貴様を封じ込める呪を施してある。

例え儂が神剣を振るえなくとも、その力を引き出す方法がないと何故言える？」

爺さんの言葉をただ聞くだけで理解なんて全く出来ない。
狂ったように扉を叩きつけることしか考えられない。

「魔の力が高い。

気の力が高い。

身体能力が高い。

・・・だがそれだけだ。」

「力があるだけで扱う才能がない。

戦うこと、傷つけること、奪うということが解っていない。
覚悟も責任も理由も目的も何もない」

「『秋山の麒麟児』と自惚れた未熟者。
無様で無力で無自覚な餓鬼」

「『俺を見ていない』だと？
当たり前だ。」

ただ力が強いだけの小僧なんぞに儂が目を向けるものか」

「貴様如き、最初から儂等の為のただの飾り者よ」

「大人しく飾られておればよかつたのだ」

爺さんから言葉が一言放たれる度に、一歩、また一歩と俺の側へと近づいてくる。

強化された聴覚が爺さんの位置を正確に把握する。

「・・・死にたくない！
死にたくないっ！！」

浅ましく意地汚く、死から逃れる為のすべを探す。

「貴様なんぞ失望するにも値せん。
秋山の歴史から永遠に消え失せろ」

風を叩き切るような轟音が頭に響いた瞬間、鬼が振り払った巨大な金棒の一撃が俺の身体を吹き飛ばしていた。

秋山君の屋敷の下から魔力の波動を感じ、続いて大きな地響きが起こった。

「っ！？まさか戦闘が起きたのか!？」

学園長から秋山家当主の病院へ向かう秋山君の監視を命じられ、彼が屋敷に戻るまでずっと尾行を続けていた。

病院内で戦闘行為を起さないだろうと思ったけど、当主が秋山君に危害を与える可能性がある以上無視出来なかった。

何より秋山君自身が自分を苦しめ続けた祖父に対し、何かしないかという不安が拭い去れなかった。

彼が真帆良学園に入学した当初、僕は学園長から彼に接触するように指示されていた。

真帆良と・・関東魔法協会と関東の呪術組織との関係は悪いといった方がいい。

元々、関東も関西も呪術協会とは冷戦状態が続いていて、一部の呪術師による魔法協会への執拗な攻撃は今も絶えない。

僕も警備に立つことがあり、呪術師と戦闘を行ったことが何度もある。

世界樹を求める者や学園長のお孫さんで詠春さんの娘である木乃香君を狙う者。

傭兵まがいの雇われ術師やぐれ呪術師等もいる。

そして中には強烈な印象を植え付けられる者たちがいる。

それが復讐者達。

魔法使いとの間に生まれた悲劇に裏付けられた憎悪に燃える者達。彼等は力の強弱に関係なく命をとって目的を果たそうとする。

撃退し、捕縛しようとしてもそれは叶わない。

そついった者は一人残らず死んでいく。

言葉も思いも届かず、捕縛しようとしても最期に呪詛のような憎悪を吐いて自決する。

そんな呪術師がいることを知っている僕としては、秋山君がどのような人間なのかを把握しておきたかった。

真帆^{マホ}良には守るべきモノが、守りたいモノが沢山あるのだから。

彼を最初に見掛けた時、近くで喧嘩騒ぎが起きていた。

この学園の生徒はみんな活気があり元気があって良いんだけど、羽目を外し過ぎることが多々ある。

そういう揉め事を収めるのも広域指導員である僕の仕事。

この時も数人のやんちゃな男子生徒にガツンと指導してあげた。

お仕置きが終わっ後、彼の姿を探すと面白い物を見たように笑みを浮かべたっけ。

「何か面白いことでもあつたかな？」

と彼に話し掛けると、自分が声を掛けられると思ってなかつのか目を大きく開いて驚いていた。

我ながらちよつと強引な接触だったと思うけどね。

彼は「申し訳ありません。お仕事をなさっておられるのに笑うなど、大変失礼を致しました。真帆良に来てまだ日が浅いのですが、毎日色々な出来事があり、その一つ一つがとても興味深いものでして。

今日は学友の噂に上がるほど有名な高畑先生にお目にかかることができ、少々浮かれ気味だったようです。

生まれてこの方、こんなに賑やか毎日を送ることが初めてで、つい好奇心で覗いてしまいました」

と、深々と謝罪するものだから、今度は僕の方が呆気に取られ、加えていた煙草を落としかけるところだった。

秋山君は小学校に通っていなかったという。

家の方針とはいえ横暴が過ぎるなど内心憤ったけど、隣で街中の全てが興味津々といった様子の秋山君を見ると、これからの学園生活は楽しくやってもらえそうかな、と笑みがこぼれた。

さっきの仕事のことや彼の学友が話していたという噂について説明し苦笑してたら、

「高畑先生は損な役回りをされているのですね。大変なお仕事です」と彼まで苦笑していた。

それからも彼と会う度に世間話をしながら様子を探っていたが、一生徒として真面目に過ごしながら、学園生活を楽しむ普通の少年としか映らなかった。

何度目かの会話時に、僕も魔法関係者だと伝え、何か困ったことがあったらいつでも相談にのると肩を叩く。

秋山君は最初は驚いていたが、次には頭を下げて「私の方こそ、ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」と謝っていた。

自身の入学がどのような意味を持つものか理解していたのだろう。本当に申し訳なさそうな顔が印象に残った。

今思えば、祖父の命を受けて真帆良学園にすることが苦痛だったんじゃないかと思える。何もかもが初めてで楽しいということは、何もかもを与えられていなかったということだ。

中等部一年のおわりに彼が語った秋山家の計画や彼の境遇を聞いた時は、話す内容への驚愕と彼の置かれていた状況を解ってあげられなかった自分の不甲斐なさに憤りを感じた。

そして表面上で普通を必死で演じている彼が哀れだと思つ反面、薄ら寒く感じられた。学園長も同じように感じたのだろう。

彼は・・秋山君は、その在り方が危うい。些細な道の踏み外しを取り返しのつかない致命的なものなる程に。

それは憎悪に満ちたあの呪術師達と同じ、他者も自分も破滅へと導く道に繋がっているような気がしてならなかった。

屋敷の中へ飛び込み彼を探す。

屋敷の床まで荒らされているのが少し気になった。

さっきの感覚だと彼は地下にいるはず。

屋敷の中で人の気配を探すが感じられない。そこに再び地響きが鳴り、外で爆発音が響く。

「くそつ、屋敷の外だったか！」

手入れされた庭を突っ切り音のした方角へと向かう。

目の前に小さな土蔵を見つけたと同時に、土蔵の中から慌てふためきながら老人が走ってきた。

見覚えのあるその顔は秋山君の祖父で間違いなかったが、汗や涙などぐちゃぐちゃにしながらで酷いことになっている。

その様子もおかしく、木々のざわめきや屋敷の影、果ては自分が走りながら蹴った小石のぶつかる音にまで怯えている。

完全に恐慌状態だ。

僕が近づくとそれに気づいて、一際大きな叫び声を上げて白目を剥いて気を失ってしまった。

何がどうなったらこんな状態になるのか・

とりあえず秋山翁を捕縛しようとして近づいた時、また大きな地響きが起こり、僕の背後で地面がズズッと崩れ、振り向くとまるでB級映画のようなチープさで屋敷が地面に沈んでいた。

木材が折れる音や瓦が屋根から落ちて割れる音が響く中、血で制服を汚した秋山君が土蔵から出てくるのを見つけた。
彼の表情を見た時に解ってしまった。

僕は間に合わなかったのだと。

左半身を暴風のような衝撃が襲い、勢いそのままに全身を壁にぶつけた俺は、何というか・・その、頭の中がすっかり冷めきっていた。

常人ならば確実に死んでいるであろう一撃に『あ、俺、絶対死んだ』と先程まで散々死にたくないと喚いてたのが嘘のようにあっさり死を受け入れてしまい、『死んだらまた神様のところに行くのかな？』とか考えながら壁に突っ込んでいった。

神剣の霊力補正で頑丈になっているのか壁に傷はなく、転生補正で頑丈になっている俺は左腕の骨折と全身打撲、頭部からの出血、あと擦過傷がちらほら。

この程度で済んで良かったと思えばいいのだろうけれども痛いもんは痛い。

『この程度大した怪我じゃねえ』なんて漫画の台詞なんか言えそうにないし、こんな状態になることで『原作キャラってスゴいなあ』と認識を新たにした。

痛みは生きている証拠らしいが、こんなに痛いのなら死んだ方がマシだと言いたくなる。

死にたくないを連呼していた俺が言うと言得力は皆無だが。

あんまりな自分の醜態を思い出すと、無様過ぎてやっぱり死にたくなるのでこれまた実にシユール。
もう何も考えない方が良さそうだ。

頭部の出血止まらずが目に入りそうなので右手で拭おうとするが、その僅かな動作が痛みを激増させ、全身が硬直してしまう。

これは傷を治さない限りと動くこともままならない。

爺さんが、俺が身じろぎしているのに驚いているようだ。今は無視。まずは怪我の状態をなるべく正確に把握する。

骨折部位は左上腕骨のみ。外部への開放なし。

金棒の突起が当たった場所からの出血はあるが、神経や動静脈を傷付けた兆候はなし。

打撲や擦過傷は確認するだけ無意味。

頭部は壁にぶつかった際に左前額部を裂傷。

流石に頭痛はするが、目眩、嘔気、視界の変化もなく、意識も清明。頭部の外傷は後から症状が出るから油断は出来ないけど。

・・・

「ん・・・なんか思ったより大丈夫そうだ」

「生きておるだけでも奇跡的なのに『大丈夫そう』とは、いよいよ妖し染みてきたな」

驚愕の色を更に濃くした顔の爺さんが再度俺に鬼を向ける。

独り言が窮地を招いた。

「何言」も口に出すには注意が必要である。

「丈夫な身体に産んでくれた母には常日頃から感謝しているよ・・・」

今生では逢うことさえ叶わなかった産みの親。

親を産むことで死なせてしまったという罪悪感は、今もなおつきまとう。

亡き両親がもし生きていたとしたら俺は変わっていただろうか・・・

「『清らかなる生命の風よ、天空に舞い邪悪なる傷を癒せ！
ケアルラ！』」

淡い緑色の輝きが全身を包む。

傷が癒え、痛みが消える。

何となく爽快な気分になってくる。

「な、なんだそれはっ！？」

西洋魔法か！？

そんな魔法、見たことも聞いたことない！！

一体何をした、運っ！！」

今日は朝から驚きっぱなしだな爺さん。

さぞかし心臓に悪い一日だろう。

「はつきりと見せたのは初めてだな。

この世界の魔法、呪術のどれにも属さない異端の証明。

これが俺の『魔法』だ！！」

「異端の力だと・・・」

身体をペタペタ触り傷が残ってないかを確かめる。

関節の動きや四肢の神経伝達の異常の有無も問題無し。

改めて異常な力だと実感する。

「そう、異端の力。
きつと理解は出来ないだろうから、『不思議パワー』くらいに思っ
たらいいさ」

そついやいつの間にか爺さんに対する口調が変わってるな？
感情がたかぶったり状況が逼迫するところなるみたいだ。

「残念だけど爺さん。

俺は今から、爺さんの長年の経験と実績と成果を台無しにする。
研鑽の果てに辿り着いた一つの境地を無碍にする。
精々、困惑して諦観して絶望してくれ」

そつ言い放ち、両脚を開き腰を落とす。
半身を開き、爺さんに向け右手を腰ために構える。俄か拳法の構え
だがこの方が気合いが入る。

先程俺を吹き飛ばした大鬼が再び俺に向かってくる。
今も怖い。俺の血がついた金棒を見るだけで身が竦む。
怖い輩は近づけないに限る。
嫌なものは遠ざける。

右の拳に力を込め身体を土台に右手を大砲に準える。
重心を落とし地を割る勢いで踏みつける。
腰、肩、腕を引き絞り・撃ち抜く！

「『渦巻く怒りが熱くする！これが放吼の臨界！波動撃！』」

突き出した拳から放たれる気の弾頭が大鬼の鳩尾を打ち抜き、俺
がそつなったように背後から壁に激突。
部屋を揺らすほどの衝撃と轟音を響かせる。

うつ伏せに倒れ込む大鬼が地面につく前に光となって霧散する。

「馬鹿な・・・」

爺さんが茫然として背後に気をとられている隙をつく。

攻撃魔法の威力がどれくらいか解らない以上、地下では無闇に使えない。

ならば気の力で、拳の術をもって打ち倒す。

「『界王拳つ！！』」

体内で気を爆発させ全身の能力を一気に向上させる。

地を蹴り抜き、今の俺の最速をもって鬼共を討つ。

接近すればまた恐怖に身体が強張るかもしれない。

だから近寄らない。一定の距離を保ち最速で動き続けのを絞らせない。

そして奴らの射程外から・・・

「『波動撃！』」

確実な一撃を放つ。

強化された五感が相手の動きを捉える。

高速移動中であつても十分に狙い撃てる。

鬼共の数なんて数える余裕はない。

心臓がバクバクし、今この瞬間も怖くて足が止まりそうになる。

闘争本能と逃亡願望。

冷静にがむしゃらに。

自分以外に動くものを全滅させるまで機械作業を繰り返す。

牙を剥き出しにした鬼の顔面に気弾がぶつかる。

衝撃でへし折れた牙が地面に落ちる頃には鬼の姿は消え去っていた。漸く最後の鬼を倒し足を止める。

途端に脱力感が押し寄せ、膝をつきたくなるのを腿を叩いて堪える。吹き出る汗が乾いた血のあとを再び湿らせ、薄赤い水滴になって滴り落ちる。

無我夢中だったので爺さんのことを忘れていたが、神剣の台座によろよるとふらつきながらもたれかかっていた。

顔を筋肉の緊張を無くしだらりとした覇気のない表情をし、随分と草臥れてしまった狩衣を纏う身体は活力を削ぎ落とされ年齢以上の老け込み方をみせる。

「何故だ・・・有り得ぬ・・・秋山の秘術がこうも容易く・・・」

「御爺・・・爺さん。」

もう終わりだ。秋山もあんだも。全て何もかもが・・・」

俺の言葉に反応し顔をあげ、血走った目で睨みつけながら身体を左右に揺らし俺へと近づいてくる。

「終わらぬっ！秋山の歴史はっ、俺の悲願は決して終わりはせんっ！！」

そうだ・・・蓮、お前のその力があれば必ず叶えられる・・・

ふふ、まったく何で今まで黙っておった、ふふ、まったく・・・

なあ、蓮よ、俺と秋山を盛り立てよう？

お前さえおればそれでよい、なあ蓮、蓮よ、俺に力を貸しておくれ・・・」

さながら幽鬼のように俺に縋り、力無い嗄れた声を漏らす。節くれだつた指が俺の顔を撫でる。

そう言えば爺さんが俺に修行以外で触れるのはこれが初めてかもしれない。

腹ただしいのに。

恨み辛みは数えきれないほどにあるのに。

俺の心の中は悲しくてしかたなかった。

爺さんをこんな風にしたのは俺だ。

俺が力をもって生まれたから、諦めかけていた野望と復讐心に火が灯った。

俺がいなければ、爺さんが暴走じみた行いをしなかったかもしれない。

俺がいなければ、爺さんは偏屈な人間でしかなかったかもしれない。

そう思うと酷く悲しい。

「なあ、爺さん。昨日の朝、仏壇の前で俺と話しをしていた時のこと覚えてる？」

俺の頬に触れる爺さんの手に俺の右手を重ねる。

そうしながら左手で制服のブレザーから呪符を一枚取り出し爺さんにみせる。

「あの時さ、これと同じようなやつを使ったんだ。

『夢邪睡符』っていう、人を昏倒させる俺の呪符」

何かを察した爺さんが俺から離れようとするが、頬を撫でていた腕を掴み逃がさない。

「なあ、爺さん・俺さ、思うんだよ。強い力なんて持たない方が良かったんだって。力なんて求めない方が良かったんだって。」

爺さんは臆病な人間であれば良かったんだよ。失ったモノを奪い返すんじゃなく、今あるモノ、残ったモノを大切に守れば良かったんだよ」

俺を振り払おうと爺さんは抵抗を続ける。

握りしめられた拳で先程まで撫でられていた俺の頬を打ちすえる。

「ごめんな、爺さん。」

でもこうしないと、爺さんはまた誰かを憎んで恨んで傷つけようとするから。

だから・怖いものから逃げられるようにする。

自分を守る為に力を持つんじゃなく、ただひたすらに逃げ続けてほしい。

惨めで弱い臆病な人間になってくれ・・・」

左手に握る呪符に力を込める。

呪符が輝いて、中心に臆病者を表す鶏の絵が浮かびあがる。必死に懇願し罵倒し殴打する爺さんに翳す。

「『小さき者、弱き者、死に急ぐ者、身を守る術を思い出せ・・・弧
鶏鼠！』」

術の発動により呪符が白く輝き、そして消える。

眩しさに目を閉じていた爺さんが再び見開いた途端、俺の姿に怯えて尻餅をつく。

「ひ、ひいいいつ！！？た、助け、助けてくれえ！！」

自分を害するもの、恐怖心を駆り立てるもの、微かな変化にすら怯え震える。

心の強さを奪い取り、立ち向かうことなくただ逃げる臆病者。

『弧鷄鼠』の術により最早爺さんが何かを成すことはない。出来はしない。

まるで大鬼から逃げていた俺のように、爺さんは扉へと一直線に駆けていった。

爺さんの術が切れたのか、鉄の扉はあっさり開き、身体を壁や階段にぶつけながら去っていく。

「ごめん・・・」

やるせない気持ちが消えない。

あんなに憎らしかった爺さんなのに、罪悪感と後悔が波のように押し寄せて、何を許してほしいのか解らないまま謝罪の言葉が口をつく。

秋山家は終わった。もう爺さんに縛られることはない。

呪術一派についても学園長や先生方が後処理をしてくれるはずだ。

俺のすべきことはもうない。

後は好きに生きていけばいい。

なのに少しも心が晴れない。

真帆良学園にいけば、あの煩くも楽しい場所で生活すれば変わるだろうか。

強く優しい生活方と過ごせば、また憧れの中で生きることが出来る

だろうか。

「帰りたいな・・・」

あの優しい人達のところに・・・
温かく明るいあの場所に・・・
憧れの舞台に・・・

戻れないと解つていても・・・

「っ！なんでだよ、ちくしょうっ！

ちくしょうっ！

ちくしょうっ！

ちくしょうおおっ！！！！」

神剣を掴み力任せに台座へ振り下ろす。

台座を壊して壊して壊しつくして、神剣を叩きつけるように床に突き刺す。

荒れた息を落ち着かせたあと、少しでも気分を変えたくて地上へ戻るために扉まで進んだ。

帰り際の階段で、ふと、この最奥の位置が屋敷の真下になることを思い当たり、扉へと向き直る。

元々そのつもりだったのだから、この空間を利用するのが手っ取り早いだろう。

両手を斜め上の天井へと翳し、むしゃくしゃする気持ちのまま、乱暴に魔力を込める。

「『地の底に眠る星の火よ、古の眠り覚し、裁きの手をかざせ！』」

「何もかも全部吹っ飛んじまえっ!!」

「ファイガアアアっ!!!!!!」

天井に向かって放った巨大な火球が爆散する。

最奥の天井だけでなく、床も壁も飲み込まんとする破壊の奔流から俺は死に物狂いで逃げ出した。

宣言通り、むしゃくしゃしてやった。

後悔も反省もしている。

第七話：後の始末（後書き）

初戦闘の回でしたが、描写が薄いですねえ……
界王拳がムリヤリ過ぎたなあ。

相手と接近してないせいか、書いているうちに敵が居なくなるとか
・
これも主人公が躁鬱気質でへたれなせいだと責任転嫁をしておきま
す。

タクテイクスの魔法や術の効果や威力については少々独自解釈が入
っています。

次回、展開次第で女子生徒が勢いで、もしかしたら、何かの弾みで
登場するかもしれません。

第八話：後は野となれ山となれ（前書き）

今回もなんとかかんとか投稿完了。

物語の導入部に一応の区切りがついた形です。

当初の予定とは異なりましたが、一応女子生徒が初登場の回です。

第八話：後は野となれ山となれ

side蓮

「決着をつけるとは言うとつたが・・また派手にやったのう、秋山君」

「・・その件に関しましては深く反省をしております。私の短慮な行動により多大なご迷惑をお掛けしてしまいました。

学園長をはじめ関東魔法協会の方々には、事後の処理や関係各位への情報統制など全面的に取り仕切って頂き、心から感謝とお詫びを致します」

「うむ。反省しておるのなら、これ以上儂から言う必要もあるまい。あとで尽力してくれた方々に礼を言っておきなさい」

「はい・・本当に申し訳ありませんでした」

「しかしのう・・」

「こ度の一件で関東の名門秋山家は完全に潰れるとは思ったが・・」

まさか、

物理的な意味で『家』が潰れることになるとは流石に想像出来なんだわい」

昨日、俺が積もりに積もった鬱憤やもやもやした感情を晴らすべくぶっ放した魔法により、秋山の屋敷は地下の最奥の空間へと沈下していった。

元々爺さんと決着をつけたら、家を丸ごと壊してやるつもりだったので丁度いいと思っていたのだが。

当然の事ながら、でかい屋敷がいきなり地面に沈んでことで、その後警察やら消防やらが大挙してやってきたのである。

我ながら考えが足りなかったというか、無茶し過ぎだった。

土蔵からボロボロになって這い上がってきた時、険しい表情の高畑先生と顔中を自身から出た水分で酷いことになってる爺さんを見つけた。

敷地内に人払いの呪符を貼っていなかったので野次馬やらサイレンの音やら賑やかしくなり、「とりあえず学園に戻ろう」と言う高畑先生の指示に従い脱出。

道中、地下での出来事を聞かれ、大まかな争いの流れだけ（特に俺の醜態はしつかり省いて）を説明した。

爺さんと屋敷の沈没について問われた際、自家製の強力な術による精神操作と大火力の魔法を放ってしまったと言ってしまった、「えっ？秋山君は呪術だけじゃなく魔法も使えるのかい！？」と、うっかりバラしてしまった。

前々日から休息無しで呪術一派の大捕物に参加したり、昨日は昨

日で人生初の殺し合いを行ったりと、精神的に一杯一杯だったのだ。失言の一つや百つくらいは見逃して頂きたい。

真帆良に着くと、高畑先生は爺さんを担いで学園長や魔法先生のもとへ、俺はというと、「詳しいことは後でいいから君は少し休むんだ」と高畑先生からの計らいで職員寮の先生の部屋で仮眠をとらせて頂いた。

高畑先生のお心遣いは大変嬉しかったのだが、先生の部屋はお世辞にも綺麗とは言い難く、30分程片付けをしていたのは余談である。

もう一つ余談を加えさせてもらうと、気絶から復活した爺さんは拘束後学園長が尋問する予定だったのだが、学園長を見るなり「妖怪変化じゃー!!」と叫び再び失神したらしい。

俺のせいとはいえ・爺さん、キャラ崩壊し過ぎである。

仮眠を取った後、現状が気になり誰かに確認したかったのだが、時間も深夜で一応学生の俺が出歩く訳にも行かず、結局朝まで悶々と過ごす羽目になった。

そして朝方になって帰って来た高畑先生と共に学園長室まで行き、先程の平謝りな展開に繋がるという訳なのだ。

俺も疲弊しているが、先生方もほぼ連日徹夜していることになる為、申し訳ないこと極まりない。

「昨夜の一件は一旦置いて、秋山君。君に伝えなければならぬことがある」

学園長が佇まいを直し、心なしか空気が重くなる。

何の話かはなんてなく想像がつく。

「儂としても心苦しいのじゃが、君をこのまま真帆良に在籍させること難しいのじゃよ」

やっぱりそうだったか・・覚悟はしていたが正直辛い。

学園長も好き好んでこんな宣告したくないのだろう。

声音に苦渋の決断をせざるを得なかった思いが含まれている。

「・・・それは承知しておりました。

私の立場や状況からすれば、学園長がそう判断されるのも当然のことです。

私の存在は関東・・いや関西においても何かしらの火種になる可能性があります。

寧ろ、今回の事件が発覚した時点で私は退学すべきだったのでしよう」

事実、退学届けを用意していた。

それを提示しなかったのは・・もしかしたら真帆良にまだ居られるようになるかもしれない、と微かな希望も持っていたから。

だが現実はそのなかに優しくはない。
今回のことで俺は十分身にしみた。

「・・・そうか、そこまで考えておったとはのう。

君は本当に優秀な子じゃよ。

その年齢からすれば悲しい程に・・

秋山君・・儂は君に辛いことを聞く。

君を傷つける可能性があるかと知ってなおの。

僕は君の中に暗い情念が渦巻いているのを感じておる。
君が必死に隠し続けくすぶらせているものを。君はそれを露呈させることに恐怖しているのじゃろう」

学園長から発せられた言葉に思わず息を飲む。

それは俺の表面上を取り繕った姿を見透かしているということに他ならない。

俺の歪んだ本心を感じとられている。

無意識に握った手の中が汗で濡れている。

何か話さなくてはならないのに、口がまるで接着剤で固められたかのように開かない。

本当の自分を知られるのが怖い。

俺に優しくしてくれている真帆良の人達に疎まれたり軽蔑されるのが怖い。

「私は・・・私です。」

今ここにいる私が全てです・・・」

絞り出すようにそう答えるのがやっとだった。

外側がひび割れそうなのを必死に取り繕う。

僅かな歪みも繕い修正する。

弱さや汚さ、卑屈で臆病な卑怯者。

こんな姿を見せてはいけない。見られたくない。

しかし学園長の長い眉毛に隠れた双眸は、俺の姿を真実を見透かしていく。

口にした言葉ではなく俺の心の中の言葉に添うように話を続ける。

「・・・のう、秋山君。」

君は決して恵まれた人生を送ってきた訳ではない。

過酷で残酷で本来なら君のような若者が受けてはならない生き方しかしておらなんだ。

じゃがの、君はまだ中学生じゃ。

今の自分を変える時間も、自分の殻を破る為の時間もまだまだ沢山あるのじゃよ？

今はまだ諦めなくともよい。

もう少しいろいろいな人と触れ合って。

もう少しだけ自分の幸せを考えてくれればよいのじゃ」

学園長の言葉が耳に痛い。

傍目には優しく諭そうとする言葉には、他者と本気で向き合うようにと、自分に諦めずに生きるようにと、俺を叱咤する意味合いが含まれている。

自分を駄目だと決めつけるのは実に楽な生き方だ。

失敗することも、逃げ出すことも、自分なんかじゃ仕方ないと簡単に言い訳出来るから。

「秋山君。俺も自分の不甲斐なさや無力感に苛まれる。

君を真帆良で守ってあげられなかったこともそうじゃ。

諦めたくもなるし面倒事から逃げ出すこともしょっちゅうじゃ。

それに他者を欺くことなんぞ、君の何十倍もしてきておる。伊達に妖怪爺や狸爺なんて呼ばれとらんわい」

そう言っつて学園長は自分の頭を撫でつけながら「フオフオ」とそ

んな人の汚れや弱さを当然のことだと笑う。

ああ、この人達はどこまでも優しい。

たかが一学生の俺の為に心を配り心を砕く・

学園長も高畑先生も他の先生方も。

俺は自分のことだけで精一杯なのに、俺が沈みかけた時には手を差し伸べてくれる。

俺を許してくれる。

俺は助けられてばかりだ。

迷惑をなんかかけたくない。いい年して甘えたくない。

なのに・・・

「俺・・・本当はここにいたかったです・・・

毎日毎日むちゃくちゃなことばかりで、騒々しくて疲れることばかりで・・・

でも本当に楽しくて・・・俺の憧れの世界だったんです。

でも諦めるしかなくて・・・

俺は普通じゃないから・・・

歪んだ人間だから、ちゃんとしてないとみんなから嫌われて愛想つかさせれるかもしれないから・・・

だからずっと逃げなてきて・・・」

我が儘を言ってしまう。

みんなの負担になることがわかってるのに・・・

俺自身、自分を把握出来ずに本当の自分を模索してばかりだけど。

誰かにそんな自分を少しでも受け入れて貰えることが。

少しでも知って貰えることが。

少しでも解って貰えることが。

只ただ、嬉しくて、知らないうちに涙が零れ落ちていた。

そんな俺を、学園長は静かに見守っていてくれた。

side 高畑

秋山君と学園長との話が終わるまで僕は部屋の外で待っていた。

秋山君が退室してきた際の彼の目は少し赤くなった。

恥ずかしそうにしながらはにかむ彼の表情は、今まで見てきた中で一番穏やかだった。

昨日、秋山の屋敷で彼の表情をみた時、僕は正直ぞっとした。

深く暗い地の底を思わせる闇色の瞳。

かろつじて命を繋いでいるような生気のないその眼は。

かつて他者を呪い、憎悪し、復讐の為に自らの命を易々と差し出した呪術師達と同じ眼。

ただその渦巻く負の情念を、秋山君は自身に向けている。

どんな生き方をしてこれば、どんな思いを抱えれば、罪悪と自責の塊のようになってしまうのか。

僕にも胸の内に潜む後悔や罪悪感と似たものがないとは言えない。それは時々僕を苛むことがある。

でも僕には成すべきこと守ると誓ったものがあり、その為には軽々と命を量りにかけたりはしない。

崩れゆく屋敷の前で秋山君が僕に気付いた時には、直ぐにいつも彼に戻っていた。

表情や態度を瞬きする間に変化させることもまた異質。

脳裏に浮かぶ今まで学園で見てきた彼の姿がぼやけていく気がした。

一瞬だけ。本当に僅かな一瞬だけ。

僕は彼を危険な存在として排除するべきなのではないかという考えが浮かんでしまった。

それだけに学園長との話のあとの彼かの表情を見た時、あの暗い陰りが薄らいでいるのを感じホッとした思いだった。

今はまだ不安定な彼だが、きっと光の世界で生きていられるはずだ。

一人では道を見失い立てなくなることもあるだろう。

しかし支えてくれる仲間や友人が出来たらきっと変わっていけるはず。

彼の為に、その日が早く訪れることを願わずにいられなかった。

「昨日も丸一日働き通しじゃったのに、わざわざ、すまんのう高畑君」

「はは、大丈夫ですよ。学園長。
これでも身体のタフさだけは自信がありますから。
それで僕にご用件とは？」

秋山君と入れ違うように今度は僕が部屋の中へと入った。
学園長にはああ言ったものの、流石に2日以上休まずに動きっぱなしはちよつと堪えるかな。
子供達の無尽蔵の元気さをみると僕も年かなって感じるな。

「話というより頼み事かの？
君は秋山君を連れてイギリスのウェールズまで行ってほしい」

「ウェールズ・・・まさかメルディアナ魔法学校ですか？
では秋山君は・・・」

「うむ、そこへ海外留学・・・というより転入じゃな。
彼にはそこで魔法使いになるべく勉強してもらおう」

海外留学という手は確かに有効かもしれない・・・
日本国内では東西問わず彼を確保しようとする動きが既に始まっているらしい。
関西呪術協会の方は、干渉し過ぎないように詠春さんが抑えてくれるらしいけど。

呪術協会側の所属であり強大な魔力をもつ木乃香くと秋山君のことは、2人共関東にすることで前々からよく糾弾されるお題目になっていた。

そこに秋山君がフリーになると知るやいなや騒ぎ出す連中が東西問わず多かった。
彼がどこに所属するにしても、何かしら騒動の刺激になってしまう

だろう。

その点、彼が海外に出れば、協会や組織もおいそれと手を出すことは難しくなると思うけど……

「頼みとおっしゃるからには、このことは彼にはもう説明済みなんですネ。」

別にウェールズじゃなくても、他にも選択肢がないわけじゃないでしょうに……

それにメルディアナですか？

一応、呪術協会所属の彼を、魔法学校に留学させると反発が起きるかもしれないよ？

「まさかとは思いますが、学園長の強権で無理矢理……なんてしていませんよね？」

学園長には恩義もあるし、尊敬もしているけど、時々突拍子もないことをする時があるからなあ。

釘をさすことも必要だ。

「手厳しいの……
じゃが大丈夫じゃよ。」

メルディアナの校長とは友人じゃからのう。多少無茶なお願いでも融通してくれるじやろう。

それに魔法学校に行くことも大した問題になるまいよ。
高畑君も聞いたんじやろ？彼が魔法を使ったと」

「それは確かに……まあ実際に見てはいないんですけどね。
でも嘘をついているようには見えませんでしたし、調査した現場からも彼の魔力の残滓を確認出来たそうですから」

元来、魔力と気を併用することは困難だ。外界から取り入れる魔力と体内から発する気は反発しあう。

両方を同時に発動させることは不可能だが、カン卦法のように融合させる技法もあるし、別々に使い分けたりすることも不可能ではない。

どちらにせよ生半可なことでは習得も実行も出来ない。

秋山君の話では、気を使う時は外界からのエネルギー供給を抑え、魔法を使う時は気を極力小さくしているらしい。

制御が苦手って言ってたらしいけど、相当緻密なコントロールをしてるように思えるんだけど・・・

『魔法使いのおちこぼれ』の僕としては、羨望にも似た気持ちになるよ。

僕のそんな考えを察した学園長は、「彼の才能云々はまた後で話すとして」、と一つ咳払いをして話を続ける。

僕もそれにならない思考を切り替えた。

「無論、彼の立場も考慮せねばならん。

彼の処罰については、関東呪術一派に属しており今回の騒動の中心であったが、事件解決の協力とその立役者という面、更には学生ということと彼が虐待を受けてきた背景もあり、関東魔法協会の関係者その他の呪術団体の合意で、二週間の自宅謹慎のみとなった。

というか、そうせんと儂がガンドルフィー二君にまた責められるわい・・・

謹慎と言っても、彼の家はべちゃんこになってしまたから暫くホテル住まいになるがの。

そして海外留学についてじゃが、これはちょっと秋山君と相談して言い訳・・・じゃなかった、誤魔化し・・・でもなくて・・・みんなが

納得出来そうな理由をかんがえての」

そこまで話してから学園長は、A4サイズの用紙を取り出し読み上げ始めた。

「ええっと・・・コホン。

『秋山少年は幼い頃から修行の傍ら、西洋と東洋の魔法や呪術の違いについて興味を持って色々調べておった。

そこで魔法協会と呪術協会との不和とその背景を知り心を痛め、この対立をどうにか改善したいと常々考えていた。

しかし祖父を始め大抵の呪術関係者は西洋憎しという思いから歩み寄る考えがない。

西洋魔法使いも呪術関係者を下に見て不当に扱う者もいる。擦れ違えばかりの両者に秋山少年は悩み苦しんだ。

そこに転機が訪れる。

祖父の命で真帆良学園に入学することが出来たのだ。

秋山少年は其処で、呪術師の生まれながら西洋魔法使いとして魔法協会の理事を勤める近衛近右衛門と出会う。

近右衛門との出会いで秋山少年は一つの光明を見出す。

近衛近右衛門の在り方は両者の関係の改善の一つの方法ではと。

そして秋山少年は自身の成すべきことが何なのか、神からの天啓を受けたかのように悟った。

「近右衛門さんは魔法協会と呪術協会との融和を望んでいるが、彼は関東魔法協会の責任者という立場があり、全ての人間の意見を聞くことも出来ず、細かいところや下部組織のことまで目が届かない。ならば自分が近右衛門さんの出来ないことを補う立場になればいい。」

西洋魔法使いと東洋呪術師の間に立ち、中立的な立場で意見を取りまとめ、互いの不平等や不満を埋め、真に協力し合える関係を築けるようにすればいい。

自分はそのためにここにきたのだ」

秋山少年は自らの理念と使命に燃え、その手を力強く握りしめた。だがそのためには呪術だけでなく魔法についても詳しく学ぶ必要がある。

秋山少年は周囲の引き止める声に背を向け、愛する友や仲間と別れ、自分の成すべき未来の為に、尊き理想の為に、涙をこらえ遠い異国の地へと旅立っていった』

・・次回に続くじゃ」

僕は学園長が読み上げた何枚にもなるA4用紙を受け取り、中身を再確認した。

そこには、先程の内容が書かれた文章だけのものと、簡単に書かれた人物や吹き出し、挙げ句にはところどころに『このシーンは見開きで』とか『背景は夕陽の丘で』とか『読者が好きになるヒロインの追加』とか・・・

所謂、漫画のネームというものが描いてあった。

『ご丁寧なことに、『コノレン。』と題名と『近衛・A・蓮右衛門』という作者名まで書いてある。

引きつった顔で学園長を見ると、腰に手をあて「どうだ」と言わんばかりの態度をしていた。

成る程成る程。

僕が部屋の外で、今後の呪術団体への対応についてや秋山君の様子に気を病みながら待っていた30分あまりの時間。

2人はこんなことに時間を費やしていたわけだ。
その時の2人が、まるで古狸と子狐の悪巧みをしている様な姿で想像出来る。

別れ際の秋山君の穏やかな顔が、悪戯をやり遂げた悪ガキの顔へと変わっていく。

一瞬だけ。本当に僅かな一瞬だけ。

僕は彼等2人に本気で居合い拳を叩き込みたいと思った。

side 蓮

学園長室からの帰る途中、一瞬自分の命が危険に晒された気分がして身震いした。
気のせいだと思いたい。

老朽化が著しい男子中等部の校舎に比べ、お洒落で豪華で綺麗な女子中等部の校舎にあからさまな待遇の差を感じざるを得ない。

これが学園長の部屋がある為だからか、はたまた女尊男卑の風潮でもあるためなのかは、一年通学しても解らなかつた。

古い西洋風の建物が多い真帆良学園だが、女子中等部は取り分け意匠を凝らした造りになっていると思う。

階段や柱の一本に至るまでモダンで洒落とおり、ちよつと外国の歴史建造物を観光している気になる。

「まさかイギリス留学とは・・・
流石にその発想はなかったな」

学園長から伝えられた今後の俺の処遇だが、自分では北海道か沖縄にでも住めばいいかと考えていただけに、前世でも行ったことのない海外（この場合留学だが）に行くことになるのは予想の遙か真上をいつていた。

前世でも看護大に入る為に英語が必須であり、勉強しまくった成果もあって英語の成績自体はかなり良い。

「ちよつと、そのあなた！お待ちなさい！」

しかし悲しいかな、日本の一般的な授業で習う英語では英会話をするには不十分なのだ。

単語や文章を読めてもヒアリングが出来ないパターンがそれで、俺もそのタイプである。

「待ちなさいと言っているでしょう！
止まりなさい！！」

とりあえず、出国は俺の謹慎が解ける二週間後なので、学園長に頼み、その間英会話術獲得の為に専属講師をつけてもらうことにした。

あとは十代前半の脳の学習能力に期待するしかない。

「無視するとはいい度胸ですわね・・・

女子中等部の校舎に男子生徒が堂々と侵入し、あまつさえ私の言葉をまるで聞こうとはしないその態度・・・

不審者としてそれ相応の対応をとらせて頂きます！！」

ぼんやりと考え事をしながら歩いていたせいか、右手首をガシッと掴まれるまで気付いていなかったが・・・

朝の光に照らされて薄く輝く金髪が美しい綺麗な顔立ちの女生徒の姿がそこにあった。

ついでに言うと、俺のことをめっちゃ睨んでいた・・・

「勘違いとはいえ、とんだ失礼をしてしまいました。
謹んで謝罪をいたしますわ。」

「・・・でもあなたの方もちょっとは悪いと思いますわよ。
私が声をかけているの無視なさるのですから・・・」

「確かに俺の方も気付かなかったとはいえ、無視するような態度を
とってしまいましたからね。」

お互い様ということにしておしまいにしましょう」

頬を撫でながら俺は彼女に笑いかける。

自分が悪いと反省しながらも、ちょっと拗ねたように口を尖らす
彼女は、大人びた外見なのに仕草が子供っぽくて可愛らしかった。

彼女・・・高音さんに不審者と断定されて連行されそうになった俺
は、事情を説明しようとしたのだが、今度は彼女の方が話を聞いて
くれず、引き止めようと彼女の手を握った途端、「な、何をするん
ですのっ!?!この痴漢っ!?!」、と痛烈なビンタを頂いた。

騒ぎを聞いて駆けつけてくれた高畑先生が仲裁と説明をしてくれ
なかつたら、もう二、三十発もらっていたかもしれない。

（俺の惨状を見た高畑先生が『いい気味だ』という笑みを浮かべて
いたのは俺の気のせいかな？）

彼女は原作でも、生真面目というか、潔癖過ぎというか、融通が
きかないというか、脱げやすいというか、何だか扱いの難しそうな
女の子だったけど。

何というか、やっぱり昔からこんな性格だったんだなあ、と彼女の

その在り方のらしさに内心苦笑してしまう。

俺は俺で、自分の在り方や方向性が狂った方位磁石のようにグルグル回りっぱなしなので、首尾一貫してる高音さんが羨ましく思えてしまう。

「それで秋山さんでしたかしら？」

制服を着ていらっしやらないようですけど、私と同じ中等部なのですよね？

もう間もなく登校時間が過ぎてしまつのですけど大丈夫なのですか？」

「遅刻してしまいますわよ」と眉を顰める高音さん。

昨日着ていた制服は、爺さんとの戦いで、血と汗と涙で汚れボロボロになってしまった為、現在の俺の格好は運動用に購入した黒いジャージ姿である。

早朝に学園長に呼ばれ話しをしている間に登校時間になっていたらしい。

ついでに言えば、春休みも終わり昨日から学校が始まっていたこともすっかり忘れていた。

二年生初日の始業式から休んでいる俺は、クラスでどんな扱いになっているのだろうか。

しかしまあ、先程の発言といい、随分早くから登校していたことといい、高音さんはやはり真面目な女の子のようだ。
感心なことだ。

「あの・・・その・・・えつと・・・ど、どうかなさいました？
わ、私の顔に何か・・・？」

ふと気付くと、何やら狼狽している高音さんがいた。
知らず知らずに高音さんの顔を凝視していたようだ。

女の子の顔を不躰に凝視するなんて失礼極まりない真似をしてしま
った。

しかし初対面でも思ったが綺麗な娘だと思つ。

陽に透けて煌めく細いく艶やかな金髪。

少しつり目がちただけど綺麗な瞳は強い意思と知性を感じさせ自分に
自信を持っているのが解る。

小さめで薄い色の唇も弾力がありそうで魅力的だし、肌も染み一つ
なく白くて綺麗な。

ファミリーネームがグッドマンっていうのだから、やっぱりハーフ
なのかな？

小顔だから等身も高くて、スタイルも良くスラッとしている。

ずっと女つ気のない生活をしてきたから、こんな美人な女の子を見
ると眼が覚めるといふものだ。

・・・あれ？

高音さん？真つ赤になってない？

口を開いて何やら狼狽を通り越して大混乱といった風情なんだけど。

「・・・秋山君。

僕は若者の男女交際を頭から不純というつもりはないんだ。
節度ある健全なお付き合いなら見ていて微笑ましいからね。

・・・でもね。初対面の女の子の容姿を公衆の面前で事細かに褒め称えたりするのは流石にどうかと思うよ?」

これまたいつの間にか後ろにいた高畑先生が俺の肩に手を置く。なんか先程のことと言い、最近思考に没頭すると周りが見えなくなつてないか俺? っていうか今なんて言った?

「あの・・・もしかしなくてもなんですが・・・俺、今のこと口に出してましたか・・・?」

「・・・つ!!!?」
わわわ私は、ここで、しし、失礼いたしますわっ!!!!」

真っ赤な顔でプリンターもかくやの速さで高音さんは走り去つていった。

「ねえねえ!今のつて二年の高音さんだよね!」
「あの男の子つて誰かな?もしかして彼氏!」
「スゴクカッコ良くない?高音さんも美人だしお似合いかも!」
「ていうかワタシらみんなの前であんなこと言っちゃうなんてスゴくない!」

・・・確かに俺には独り言を言う癖がある。

うっかり人前で漏らしてからかわれたこともある。

高音さんも言ってたよなあ。

もうすぐ登校時間が過ぎるって。

歩きながら話していたから周りあまり気にならなかったけど、ここ女子中なんだよなあ。

そりゃ登校してくる女生徒も増えるわな。

でもなあ・・・

「思考がだだ漏れする独り言をしたことも!!」

こんな漫画みたいな状況でしたこともなかったよ!!」

キヤイキヤイと騒ぐ女生徒達と面白がるように笑う高畑先生を置き去りにし、摩擦で燃え尽きてしまいたいと願いながら猛ダッシュで逃げ去った。

高音さんがクラスでからかわれたりしてたら、今度は百発くらいビンタされるかもしれない。

百発ですまないかもしれない・・・

・・・時は過ぎ、俺は現在ロンドンのヒースロー空港にいる。

俺の人生の黒歴史にランクインした『高音さんをみんなの前で口説き事件』の後は、二週間ホテルに缶詰め状態であった。

頭の中から消し去る為に最低限の生活行動以外は全て英会話習得に費やした。

その甲斐あって、英会話の小冊子をチラ見しながらなら日常会話はなんとかなる程度まで持ってこれた。

まあ、寝る前や入浴時に思い出して「あーあー」呻きながら頭を壁に打ちつけたりはしたのだが。

出国の前日、学園長の計らいで男子中等部の俺のクラスに顔を出すことができ、突然の留学（家庭の事情でイギリスの親戚のもとに行くという理由になったらしい）に学友達から、『もっと早くに言えよ』なんて叩かれたがらもみんな別れを惜しんでくれた。

ベタだが、クラス全員で書いてくれた色紙を貰った時は涙腺が緩んでしまった。

最近よく涙腺が緩みやすい。

年は・・・まだ若いのだが、前世の分も合わせれば精神年齢は高いので、精神に肉体が引つ張られているのだろうか？

普通こういう場合、精神が肉体に・・・というものだと思うのだが。情緒不安定なのは前世からだし、やっぱり精神が関与しているのかもしれない。

今度、医学の論文でも調べてみよう。

涙腺の老化とかだったりしたら違う意味で泣ける。

お世話になった方々にも出来るだけ挨拶してまわった。自分作りの一貫で行っていたボランティア活動だが、一緒に参加していた人達に何度もお礼を言われ心苦しくなった。

神様が言っていた『善行も偽善もやるなら徹底的に』という言葉が今になって耳に痛い。

中途半端がアイデンティティの一つである俺にはなかなか改善できそうにない。不善のままだ。

学園長にもお会いしてお世話になった挨拶と事後処理のお願いを頼んだ。

関東呪術一派の構成員の殆どが、経歴と呼ぶより犯罪履歴といった方がいくらい真っ黒な連中なので、辿る末路も真っ暗闇だろう。

俺の爺さんかというと、当初に比べたら幾分落ち着いたらしいが、臆病者な状態は変わりないらしい。

一度だけ面会したが、「ごめんなさい！許して下さい！」と、俺に復讐されることに怯え会話にならなかった。多分もう会うことはないだろう。

一人の人間の精神状態を狂わせしまった事実には、俺はまた罪悪感に苛まれた。

また、倒壊（沈下）した秋山の屋敷だが、貴重な呪術書や魔法具など秋山秘伝の品々があるらしいので、呪術団体が主導で必死の発掘作業が行われている。

俺がほつたらかした神剣『天之尾羽張（仮）』も埋まっている筈だけど、結構洒落にならない神霊力があつたことだし、学園長に注意を促しておいた。

『そういうことは早く言わんかい！！』と素で叱られた。

そのせいではないと思うけれど、去り際に『中等部の高音くんに逢いにいかんでよいのかの?』とニヤニヤと笑いながらからかわれた。

きつと高畑先生が話したのだろう。

以前より高畑先生との仲が良くなったと思うが、俺に対する接し方に含みがある気がする。

何故なんだ。

その高音さんには幸いにしてあれ以降会うことはなかった。

謝りたい気持ちはあるのだけれども、またピンタをされるかもしれないので、遠くから謝罪の念を送っておくに留まった。

ガンドルフイーニ先生にも会えなかった。

善意を利用したこともあり、直接お話ししたい気持ちはあったのだが、先生にも仕事や用事もあり予定が合わなかった。

せめてもお礼とお詫びにゼリーの詰め合わせを送っておいた。

小さいお子さんがいたはずだし、あの先生のことだから、お子さんが喜ぶ物の方が有り難いだろう。

さて、最近の悪癖である思考の没頭から復活すると高畑先生の苦笑する顔が目に入った。

何だか高畑先生にこんな顔をさせることが多いなあ。

自分の荷物を受け取って高畑先生の後ろについて歩いていく。

生まれて（死ぬ前から）初めての海外渡航である俺は完全にあのぼりさん状態で、時差ボケもなんのそのであちこちキョロキョロ眺めていた。

周りの人が外国人ばかりで英語が飛び交い、まるで映画の中にあるような錯覚に陥る。本当にこれからここで生活するだろうか。今一実感が湧かない。

「タカミチー!!!」

子供特有の甲高い声がして、聞こえた方向に目を向ける。

5、6才くらいの赤毛の可愛らしい男の子が、行き交う人々の隙間をぬいながら小さな手を振って走り寄ってきた。

喜色满面といった風情で高畑先生に抱きつく。先生の方も男の子に会えたのが嬉しいのだろう。男の子の柔らかそうな髪を撫でながら笑みを浮かべている。

「久し振りだね。タカミチ！ 今日ここに来るって聞いたから、ネカネお姉ちゃんにお願いして連れてきてもらっちゃった！」

紅潮した顔で高畑先生の手を掴んでピョンピョン跳ねている。全身を使って嬉しさを表現しているのが何とも微笑ましい。

飛び跳ねる男の子を宥めながら高畑先生も少年の頭に手を置いて微笑む。

「元気そうで何よりだよ。本当に久し振りだね。」

『ネギ君』

第八話：後は野となれ山となれ（後書き）

本作初登場の女子生徒は脱げ女さんになりました。

何故彼女が・・・

しかも全然予定になかった妙なフラグまで立つ始末。
ヒロインの予定なんか全くないんですけど・・・

彼女の容姿になんですが、カラー絵の彼女がなかった気がして、
「ハーフっぱいから金髪だろ」と安易に考えてこのようになりました。
た。

中等部にいたのも独自解釈です。

魔法学校にも通っていたとは思っていますが、その辺の詳しい説明もなかったし、彼女の相方の愛衣ちゃんもジョンソン魔法学校に行つてたらしいけど原作時に麻帆良にいるし。

「きつと魔法学校に通つてた子は、小卒くらいで麻帆良にくるんだ
！」
と無理矢理そういう風にしました。

じゃあ子供先生の場合は？

と聞かれたら、飛び級したし、元々麻帆良にいるのも修行のためだし・・・とフワフワした感じになります。

一番フワフワしてるのは私の頭の中なんですが。

ここまでが第一部と考えています。

メルディアナが第二部何でしょうけど、事件を起こしようがないので多分短いです。

今回は主人公がいなくなった麻帆良の人々でも、チラッと描いてみます。

短い番外編みたいな感じですよ。

このような駄文を読んで下さるだけでなく、お気に入り登録して下さる方がおられることに感謝に絶えません。

少しでもご期待に添えるようこれからも精進していきます！

番外編：4月下旬の麻帆良の人達（前書き）

予定の通り、ちょっとだけの番外編を投稿します。

思いのほか、あっさり出来ました。

きつと面倒な主人公がいないからだと思います。

今回はキャラ崩壊が著しいです。

番外編：4月下旬の麻帆良の人達

sideガンドルフィーニ

秋山君がイギリスへと旅立ってから、もう十日が過ぎた。

学園長から彼のこれからの処遇を聞いた時、やはり麻帆良には居られないのだと思いとても寂しく思った。

彼はとても優秀で真面目な生徒だった。

彼が入学すると知った当初は呪術団体所属と聞いて、学園長に危険なのではと再三取り止めるべきではと進言し、入学後も暫くは呪術団体側の刺客という疑念が消えずにいた。

しかし彼と接していく中で私のそんな思いは徐々に薄れていく。

私は生徒達から厳しい先生だと思われており、私自身もそれを分かっている。

若さは時には無鉄砲で暴走してしまうことがある。

私だって若い頃は無茶もしたものだ。

だからこそ大人として、教師として、若者の行き過ぎた行動を諫める義務が私達にはある。

だが生徒達はなかなかそうは思わないものだ。

厳しさを疎ましく感じ、忠告に反発することも多々ある。

若者を導くということを考えるのは困難で難解だ。

そんな中で秋山君は手のかからない生徒であるだけでなく、私達

教師の立場まで考慮し、配慮をしてくれる稀有な存在だった。

「ガンドルフィーニ先生の言葉を私達生徒は必ずいつか思い出しませよ。」

厳しい言葉が優しさから、叱責や忠告が心配から伝えられていたのだと。

私達がそんな大きな心で見守られていたと気付くのは、失敗したり、もっと成長しないと解らないのが歯痒いところですからねども」

そんな風に言うものだから、驚くやら照れくさいやらで言葉に窮してしまっただ。

大人びた少年だと苦笑せざるを得ない。

彼の今まで人生を考えれば、早熟なのも仕方のないことだと言うの容易い。

しかしそう考えることは、彼の過酷な人生を認めてしまうようで我慢ならない。

彼の少年らしくない振る舞いや善良さが苦しみによってもたらされたのであれば、神の不平等さや残酷な仕打ちを糾弾したくなる。

私がまだ学生だった頃から使っている父から譲り受けたアンティークの机の引き出しから、まだ真新しい便箋を取り出す。

秋山君がイギリスに発つ前に残した私宛の手紙。

彼らしい丁寧な文面には、直接礼が言えなかったことと、自身の目的の為に私の善意を利用してしたことへの謝罪が綴られていた。

手紙の謝罪の部分をそつと撫でる。

同時にパタパタと足音が部屋の外から聞こえ、扉が開き小さな顔が

中へ覗きこんできた。

「パパあ、ゴハンできたから、よびにきたよあ」

「そうかい、ありがとう。もう少ししたら行くなってママに伝えておくれ」

「すぐいくのー！」

今年保育園に入ったばかりの娘が私の手を引いてせつつく。

仕事柄、娘に接する時間が少ないせいで、こうした休みの日は常に私の側にくっついてくる。

嬉しくもあり、普段構ってあげられないことが申し訳ないとも思う。

娘に言うようにしようとした小さな体を抱きかかえると、娘が私の手の中の手紙に興味を示した。

「これパパのおてがみい？」

「そうだよ。この前ゼリーが沢山入った箱があっただろう？
そのゼリーをくれたお兄ちゃんからの手紙だよ」

「ゼリーのおにいちゃんのおてがみ？」

手紙と一緒に届いた箱詰めの手紙に娘は大喜びで、口の周りを

ベタベタにしながら食べていた。

その時の様子を思い出し笑みがこぼれる。

私に娘がいるのを考えて秋山君はそれを選んだのだろう。

その気の回し方が実に彼らしい。

「そう、ゼリーのお兄ちゃん。

美味しいのが沢山あっただろう？

いつかちゃんとお礼を言わないとな」

「ゼリーのおにいちゃんにアリガトウする！

またゼリーほしいもん！」

娘の言葉に苦笑いしつつ、抱っこをするため手紙を机の上に置く娘を抱えたまま食事のために部屋を後にする。

彼にお礼をする日が来るには、あと数年はかかるだろう。

その頃には、流石にゼリーのお兄ちゃんのこと覚えてしまい。

それでも一度会わせてあげたいと思う。

一緒に食事をするのもいいかもしれない。

私と家族達と彼を交えた食事風景。

戸惑いながらも優しく娘の相手をする彼の姿が浮かぶ。

「（秋山君。君は善人の振りをして私を欺いていたと言っているけどそうではない。」

君は間違いなく善良な人間だ。

私だって長年教師をやってきたんだ。

それなりに人を見る目はあるんだよ」

右腕に娘を腰掛けさせるように抱え、娘が開け放した扉を空いた左手で閉めながら部屋を出る。

娘にゼリーのお兄ちゃんのことを話しながら。

少しでも娘が覚えていられるようにと。

いつかまた会える日を、一緒に楽しみにしながら待つことが出来るように願いながら。

side 高音

「ねえねえ、教えてよ、高音さん！

例の男の子、秋山くんだったっけ？

その秋山くんとの関係ってどうなの？

やっぱり彼氏とかじゃないの？

あ、でもでも、あの時は彼がコクってただけなのかな？

てことは彼氏じゃなくて彼氏候補？」

「っ！もう！何度も言っているじゃありませんか！！
秋山さんとはあの日たまたま偶然出会って話をしていただけです！！
何の関係もございませんっ！！」

「それってつまりは運命の出会いってヤツじゃん！？
彼ってかなりカッコよかったじゃん！

あゝいいなあゝ高音さんは。美人でスタイルもいいし、ステキな男
の子と運命の出会いもあるし」

「だから！そんな相手ではないと何度も・・・！」

「でも高音さんだってまんざら嫌じゃないんでしょ？」

「な、ななな何を言っているんですか、あなたはっ！？」

んもっつ！最近毎日こんな質問されてばかり！

クラスメイトで報道部の彼女にあの日のことを見られてから、休
み時間が全く休めなくなってしまうましたね。

あれは運命の出会いというより、私の勘違いと彼の説明不足によ
るコメディのようなものなのに。

始業式の翌日のあの日、二年生になりこれから入学してくる新
一年生の模範となるべく、早めの登校をしたことが始まりでした。

4月の朝はまだ少し肌に寒く、人気の少ない校舎の雰囲気と窓か
らの柔らかな陽射しとも相まって、私はどこか不思議な世界を歩い
ているような気分になっていました。

魔法使いの私が不思議とかいうのもなんですけど。

そんな風に考えていたせいか、前を歩く彼の姿を見つけたときは、思わず息を吞んでしまい、その姿に目を奪われていました。

背は私より少し高いくらいでしたが、細身で凜とした佇まい美しく、窓枠に彫られた細工を指でなぞる仕草が朝の光に照らされて、神秘的な一枚絵を眺めている錯覚に陥ってしまいました。
我ながらなんとという乙女な思考。

とはいえ此処は女子中等部の校舎。

先生方以外の男性が許可なく入り込むことは違反行為。

あまり男性とお話しをした経験がないので、少し声をかけるのに抵抗がありました。

しかし悪に対して毅然とした態度で立ち向かってこそ、正義の魔法使いたる資格があるのです！

勇気を振り絞って頑張りましたとも。

まあ・・・散々無視されて、彼に掴みかかった上、男性に手を握られたことに動揺し、平手打ちまでしたのは本当に申し訳なかったと思っと思っています・・・

私としたことがとんだ醜態を晒してしまっただけです。

高畑先生がとりなして下さらなかつたら、秋山さんをあと4、50回は叩いていたかもしれませぬね。

だって秋山さんの手が温かくて力強くて、なのに私を労るように加減して握っていたのですから。

私だって女の子なんですから少しくらいドキドキします！

それからまた他の人に誤解をされないように校舎の玄関まで一緒に付き添って行ったのですが、それが運の尽き。

秋山さんが私の顔を真剣な眼差しで見ていたので再び動揺してしまいました。

いくらなんでも私男性への耐性が無さ過ぎですね。

いえ！違います！

あれは秋山さんのせいです！

私のことを綺麗だのなんだのこと細かにつらつらと口にして！自分だって端正な顔立ちをしている癖に！

特にあの少し切れ長で吸い込まれそうな妖艶な黒い眼！

見つめられただけで胸が高鳴るったらもう！

って、もうってなにがですか！！

あんな状況を沢山の人に見られるし、本当に恥ずかしくて頭がどろろになっちゃってしまいました。

ああもう！秋山さんを思い出すだけで顔が紅く・・・じゃなくて！

あんな状況を思い出すだけで怒りと恥ずかしさで顔が紅くなっちゃってしまっただけで。

今度秋山さんに会ったらもう一度お説教ですね、全く！

「あの・・・高音さん？」

そろそろ帰ってきてくれないかなあ・・・」

「えっ！？はい！何ですか？私は秋山さんのことなんか考えていませんよ！？」

「あゝ、うん。大丈夫大丈夫。ちゃんと分かってるから。」

高音さんが本気で何か参っちゃってることくらいは「

「全然っ！分かってないでしょう！？」

あなたはとんでもない誤解をしています！！」

本当にもうこの人ときたら・・・

噂によると初等部にも噂や謎を追い掛け回すハタ迷惑な女の子がいるらしいですけど、この人が影響しているような気がするわ。

いい加減次の授業が始まる時間になるし、さっきの授業教科書をしまつて準備を・・・

「って！私の教科書が穴だらけに！
な、なんでこんな有り様に・・・」

そこには何か尖った物で何度も突き刺したような、小さな穴のだらけでボロボロの私の数学の教科書があった。

え？え？なんで？

私の知らない間に誰かがやったの？

もしかしてイジメなの？私嫌われてたの？

「あのさ〜高音さん・・
さつきまで紅い顔してたら、今度は蒼い顔になったり。
いつも冷静で大人っぽい高音さんのそんな姿は新鮮だし、新しい
魅力を絶賛開拓中で可愛いんだけどさあ。
それやったの高音さんだからね？」

「へっ？」

我ながら間抜けな返事をしてしまった。
ていうかなんていいました、あなた？

「うん。そのキョトンとした顔もヒジョ〜に可愛くていいんだけど
さ。

無意識にしてたから覚えてないだろ〜しね。
意識が戻ってくるまでさ。

なんか虚空を見つめてウツトリしてたり、手をニギニギしてニマニ
マと笑ったり、ほっぺに手を当ててイヤンイヤンしちゃったり、真
っ赤になってその右手にもったシャーペンで教科書をグサグサしな
がらジタバタしたり凄かったよ。
私も少し引くくらい」

な、何ですか、その擬音ばかりなのに、かえってその場面を想
像し易い乙女チックな行動の数々は！？

思わず右手を見ると、ちっちゃい子供が初めてスプーンを握った

ような持ち方で、しっかりとシャーペンを握り締めていた。心なしか芯が出る部分が折れ曲がっているような。

ま、まさか・・・

この私がまたまたそんな醜態を・・・？

そこで私はまたハツとして、立ち上がり周囲を見渡す。

勢いがつきすぎて、椅子の背が後ろの席の机にぶつかるが気にしている場合じゃない。

そこには、優しげな・・・というより生温かい目で私を見守っているクラスメートのみんながいた。

よろよると机に手をついて、卒倒しそうな自分を支える。

落ち着け。落ち着くのよ高音。ていうかお願いだから落ち着いて。

頭の中がグルグル回って自分がどんな人間なのか定まらない何故か分からないけど今の私は秋山さんっぽい気がする。

「ねえ、高音さん。

私はね、真実を追求する者として一つの言葉が真実であったことを知ったよ」

散々私を追い詰めてくれた報道部の彼女が肩に手をおき、スゴくシブい表情でポツリと漏らす。

「な、なに……」

聞かない方がいいと私の中の何かが警告を鳴らす。

「（お願いだから言わないで！）」

と念じる。でも彼女に通じることはなかった。

「人間、『恋』をすると変わるって本当だったんだね」

「いやあああああっ!!！」

私の今までのイメージがもう完全に崩れてしまった。

クラスメートの私に対する接し方も変わることだろう。

これからもずっと弄られ続けるのは間違いない。

だって中学二年生の女の子だもの。

女の子はこんな話しが好きだもの。

でもでもでも！

これは何もかも秋山さんのせいだ。

彼と出会ったことで私はこんな辱めを受けているんだ。

（今度あつたら説教じゃなく絶対お仕置きします！

だから……はう……せつ……）

『責任取ってください』

『いっ！！』

番外編：4月下旬の麻帆良の人達（後書き）

書いていて楽しかったのもあり、スイスイ書けたのはいいのですが・・・

わざわざフラグを強化してどうする！！

まあ脱げ女さんも中学二年生なら乙女チックだったり、恋に憧れたりもしたんじゃないかと妄想。

原作でも子供先生に惚れてる（？）ような描写があったので、男慣れしていないから憧れやちょっとしたトキメキなんかでコロツといきそうかなって・・・

あと彼女の思考や口調は難しいです。
うっかりすると、いいんちよみたくなってしまう、砕けすぎない上品さのバランスが大変です。

ガンドル先生の娘との会話は完全に妄想で趣味です。
でもあれくらいの子供の親って激甘になると思いませんか？

主人公に好意的で内面をちゃんと見て認めてくれるガンドル先生は書いていて珍しいなと思いました。

私の描く彼は正義至上主義というより、自己の信念に貫くという

感じかなと考えてます。

魔法先生側の鬼の新田さんが私のガンドル先生のイメージです。

とりあえず逃げ女さんの対策を考えながら、次話の制作していきます。

本当にマジでプロットが崩れそうだけど・・・

第九話：魔法使いの卵達（前書き）

キャラが増え始めると書いていて楽しくなります。
処理しきれなくもなりますが。

メルディアナ逆輸入編開始します。

第九話：魔法使いの卵達

舗装されているというよりも、とりあえず均しておいたという程度の山道。

時折ガタガタと揺れて、その度に車のシート越しに微かな振動が伝わる。

いい加減お尻が痛くなってきた。

ネギ先生（予定）がウエールズの山奥出身とはよく言ったものでロンドンのような歴史情緒を感じさせながらも都会的な街並みどころか、人為的な構造物も人気もない森を長時間ひた走り続けている。

俺の右隣にいる高畑先生は平然とした顔で座っている。

仕事で紛争地帯に出向くことも多いからだろう、この程度のことは悪条件ですらないようだ。

チラリと俺の背後に目を向ける。車の最後部のシートには、クセのない長いストレートの金髪で俺より少し年上の女性と、その女性に膝枕をされる濃い赤茶色の髪を頭のやや後ろで二つに括った幼い女の子がいる。

金髪の女性、ネカネさんは悪路の振動に流石に少し疲れを感じさせているが、柔和な表情を崩すもことなく、長距離の移動で完全にグロッキーな幼い女の子、アーニヤちゃんの額に手を当て優しく撫でている。

そうして、もう一人。

高畑先生を挟んでもう一つ右隣にいるネギ・スプリングフィール

ド君はというと、疲れた様子を微塵も感じさせずに、身振り手振りをしながら大きな声で楽しそうにずっと高畑先生に話をしている。

元気なのはよいことなのだけれども、ネギ君のキャツキャツとした声が響く度に、アーニヤちゃんのおもしろい顔がしかめられていくので、彼に自重を促したいところである。

俺自身も多少辟易している。

木漏れ日がやわらかな雰囲気彩る森を抜けると、風景が開けた平原へと変わる。

小高い丘の斜面を車はゆっくり登っていき、視界の先に久しぶりに人工の建造物が見え始めた。

まるでその場所だけ中世の時代から切り取ってきたかのようなファンタジーな街並み。

そこに住む人達はよりファンタジーな魔法使い。

偶然だともうけれども、鳴り響いた鐘の音が異国の来訪者を歓迎してくれているように感じながら。

俺はここ、メルディアナの地に足を踏み入れた。

時を遡ること、ン時間も前。

空港にてネギ君一行に出迎えられていた時の出来事。

俺は転生する前に神様に語った一番の目的を果たすことが叶った。

この物語の主人公である英雄の遺児ネギ・スプリングフィールド。いずれこの世界を救うために、沢山の仲間達と共に立ち上がるであろう未来の英雄。

俺が憧れてやまない存在との邂逅である。

しかしその未来の英雄は、高畑先生にご執心で、後ろに控える俺には一瞥もくれないどころか空気並みの扱いだった。物語の主人公が早速俺を爪弾きにしてくれた。

ネギ君の後を追いかけてきた大小二つの人影が近づいてきた頃、ネギ君は漸く俺に気付いてキョトンとした顔で首を傾げる。

仕草や表情が一々可愛らしくて、狙ってやっているのではないかと訝しんだほどだ。

流星は未来の天然プレイボーイ。

この年にしてその片鱗を見せるとは。

なんて愚にもつかない思考を中断し、腰を屈めてネギ君と視線を合わせる。

初対面の人間に緊張気味の彼を安心させられるように、笑みを浮かべながら右手を差し出す。

「初めまして、こんにちは。

俺の名前は秋山蓮。こっちだとレン・アキヤマかな。

君が高畑先生の言っていた小さな友人のネギ君だね。

これから一緒に勉強していくことになるから、どうぞよろしくね」

ネギ君は俺の拙い英語を理解し、コクコクと頷いて小さな手を差し出し握手をしてくれる。

柔らかく温かい手に握られるのが何ともくすぐつたい。

「あ、あの！初めまして！

ネギ・スプリングフィールドです！

えと、こちらこそどうぞよろしく願います！」

未だに緊張は解けきっていない様子のネギ君だけど、精一杯頑張った挨拶とはにかんだ顔に好感が持てる。

ていうかめっちゃ可愛い。

安心させるつもりで作っていた笑顔だったのだが、彼のあまりの愛らしさにニヤケていくのが抑えられない。

屈んだ俺の真上からくぐもった忍び笑いが聞こえる。高畑先生がそんな俺の様子に笑いを堪えているようだ。そんなにおかしいか畜生。

「もう、ネギったら急に走ったりしたら危ないでしょ！

ネギがご迷惑をかけてすみません、タカミチさん。

そしてお久しぶりです」

「ほんとよ、いつまで経つてもバカネギなんだから！

心配かけてばかりだと、またネカネさん倒れちゃうわよ！

と、タカミチさんも久しぶりです！

お元気そうで良かったです！」

と駆け寄ってきた二人からも声がかかる。
心配混じりの優しい声と、勝ち気で強い口調の幼い声。
そのどちらにもネギ君を思う気持ちが含まれていて温かい。

「ネカネくんもアーニヤくんも本当に久しぶりだね。
二人とも相変わらず元気そうで何よりだよ。
あと今日は僕じゃなくて彼が主役だからね」

そう言っつて高畑先生は俺に目配せをする。
屈んでいた体制を起こし、ネギ君の後ろにいる二人に向き直す。

「初めまして。
今日から学校で御一緒させて頂く、レン・アキヤマと言います。
海外での生活は初めてなので、至らぬことも多いかと思いますが、
どうぞよろしくお願いします」

そう挨拶とお辞儀をしてネカネさんとアーニヤちゃんとも握手。
ネカネさんは微笑みながら応じてくれたが、アーニヤちゃんはおず
おずといった感じで手を伸ばしていた。
アーニヤちゃんにもネギ君の時と同じように屈んで「よろしくね」
と笑いかけたが、ネカネさんのスカートを手で掴んでおっかなびっ
くりの様子に内心で苦笑いしてしまった。

一通りの挨拶を終えてから、5人で空港の外に手配してあった車

に乗り込み、一路メルディアナ魔法学校へと相成ったのだが……

正直俺はもの凄くガツカリしていた。

イギリスと言えばファンタジーの本場。

あちこちに目を引く観光どころがあるにも関わらず、それらを全て素通りである。

ベタな観光名所ではビッグベンやロンドン橋、大英博物館に英国美術館。

マニアなどところではシャーロック・ホームズの事務所を模した展示館に、アーサー王の伝説縁り地など、数え切れなくらいみたい物があったのに！

未練たらしく車窓に張り付いていた俺をアーニヤちゃんが変なものを見る目でみていたのが、ちよつと心に痛かった。

広い高原とまばらに生い茂る木々に囲まれたメルディアナの街並みは、都会の喧騒から程遠いゆつたりとした空気が流れている。

行き交う人たちの中には、黒や茶色などの厚手のローブやマントを羽織り、如何にも魔法使いといった姿も見える。

ネギ君やアーニヤちゃん達も車内から降り際にフード付きのローブを羽織り、幻想的な街並みに違和感なく溶け込んでいた。

ネカネさんは細かい刺繍入りの白い襟や袖口が特徴的な紺色のワ

ンピースに、白いローブを羽織りネギ君達に並ぶように歩いている。こちらでも違和感が全くない。

更に言えば、ネカネさんの長く綺麗な金髪がその服装に良く映えて、髪の毛や服の裾が揺れる度にキラキラとした粒子が舞うかのよう輝いている。

彼女の描写には、俺のトキメキ妄想補正が加味されてはいるが。

可愛らしい子供達や綺麗な女性の姿についてはこれくらいにして、違和感バリバリの男二人はというと。

ダンディズムを体現したかのような大人の男性である高畑先生は、いつものスーツ姿に濃い茶色のスーツコートを羽織って、これまたいつものように煙草を加えている。

流石のダンディ眼鏡さんもこの街では浮いている。

そして俺だが、まさか麻帆良の制服やジャージで来るわけに行かず、渡航前日に仕立てたダークブルーのスーツを着込んでいる。

中学生にしては背が高くなったと思うのだが、まだスーツの似合う体格とは言えず、俺は街からも服装からも浮いてしまう。

そしてもう一つ。

はつきり言っただけかなり寒い。

イギリスの気候を舐めていた。

俺を抜かしてみんな上に何か羽織っているのに俺だけスーツ一丁である。

というか高畑先生は自分はいっさりコートを持ってきているのに、俺に忠告の一つもしなかったのはどういう訳か。

高畑先生に対する俺への嫌がらせ疑惑を密かに抱きつつ、メルデアアナの街並みの中でも一際目立つ大きな建物へと向かうみんなの後についていった。

麻帆良学園もそうだったが、西洋魔法使いの学校はそれ自体が一つの世界遺産に認定されそうなものばかりである。

メルディアナ魔法学校に至ってはさながら神殿や教会のようで、柱や壁にあるレリーフ一つ取っても、テレビや図鑑で見た世界の寺院や教会と比べてなんら遜色がない。

特に外の通路から見える雄大な自然が建物と調和した風景が秀逸で、自分が下界を離れて天上にきたような錯覚すら覚える。

場の空気に飲まれて知らず知らずに顔が緊張で強張ってしまうが、そんな俺を察してか「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」とネカさんが優しく微笑みかけてくる。

貴女、どれだけ俺をときめかせるんですか。

しばらくすると枠縁に金細工が施された立派な扉が見え、みんなを代表してネカネさんがノックをする。

「どうぞ入りなさい」という声の中から聞こえ、一呼吸置いてからネカネさんが扉を開いた。

室内に入ると、大きなステンドグラスの窓から差し込む光を背にして、薄い橙色のローブを着込み長い白髪と髭をたくわえた体格の良い老人が、左手に大きな木の杖を持って立っていた。

「出迎え御苦労だったのう。

ネカネくん、アーニヤくん、ネギ君。

タカミチ君も久方振りじゃな。

そして・・・君がアキヤマ君じゃな？

遠路遙々大変だったのう。

メルディアナ魔法学校の校長として、君を歓迎するよ」

高齢でありながらも精悍な顔つきに好々爺然とした表情を浮かべて、メルディアナの校長は俺を迎え入れた。

sideネギ

「・・・で、ここがみんなでご飯を食べたり、お茶したりする場所です。

お部屋とかお家で食べる人もいるんですけど・・・あ、あとパーティーとかもしたりするんですよ！

みなんでお料理とかお菓子とかを作ったりして」

「そっか、それは楽しそうだね。

俺も一度参加してみたいな」

アキヤマさんが小さな本を片手に持って、言葉を探しながら僕に返事を返してくれる。

僕は今、アキヤマさんと2人で学校の中を案内している。

アキヤマさんがおじいちゃんから入学の説明を聞いている途中で、ネカネお姉ちゃんが僕に耳打ちして、後で学校の中を案内してあげ

てっぺお願いされた。

お姉ちゃんとアーニャはアキヤマさんの歓迎会の準備をするみたいだし、タカミチはおじいちゃんとか何かお話しがあるからって。

僕一人でちゃんと案内が出来るか心配だったけど、お願いされたからには頑張らなくちゃ。

お話しの後、アキヤマさんに僕が学校の案内をしますって言うのと、「嬉しいけど、ネギ君もずっと移動ばかりだったから疲れてない？」って逆に気を遣われちゃった。

日本人って、周りの人のことを良く気にかけるって聞いてたけど本当だったんだなあ。

遠慮がちなアキヤマさんの手を引いて色々を見て回った。

授業をする教室や魔法の練習場。

式典とかをするホールじゃ、アキヤマさんがすごく驚いていて「カメラを持ってこれば良かった」って笑っていた。

アキヤマさんが喜んでくれたり、驚いてくれたりするのが嬉しくて、張り切って説明していたら、「ちょ、ちょっと待って」と僕の説明を手で制して、急いで本を捲ってた。

お話しするのに集中し過ぎて、アキヤマさんがまだ英語が苦手だっことを忘れてた。

僕が謝ると「俺が勉強不足なだけだからネギ君が謝ることないよ、一生懸命聞くから他のことも教えてくれるかな」って屈んで僕の頭に手を置いた。

空港で挨拶をしてくれた時もそうだったけど、アキヤマさんはすごく相手に気を遣う人みたい。

日本人ってみんなこうなのかな？

でもちっとも嫌じゃないし、何だかくすぐったい気持ちになった。

おじいちゃんからタカミチがくるって聞いた時からスッゴク楽しみだった。

タカミチは僕にいろんなことを教えてくれる。

楽しいことや世界の珍しい話やタカミチの学校のこと。

そして、お父さんのこと……

僕はお父さんの話を聞くのが一番の楽しみだ。

強くてカッコ良くて立派な魔法使い。

あの雪の夜に助けてくれたお父さん。

憧れのお父さんみたいになりたい。

お父さんにまた会いたい。

お父さんのように強くなりたい。

そうすれば……

そうすれば、なんなんだろう……

深く考えるとスゴク嫌な気持ちになる……

暗いところに沈んでいくような……

認めてしまうのが……怖い。

何かに打ち込んでいるとそんな気持ちなくなる。

だから一生懸命魔法の勉強をする。

立派な魔法使いになれば、きっと何かこんな気持ちもなくなると思うから。

でも今日だけは勉強はお休み。

無理を言ってタカミチのお迎えに行けるようにしてもらったし、やっぱりお父さんの話が聞きけるのは嬉しい。

空港でタカミチに会えた時は嬉し過ぎて気持ちが爆発しちゃった。新しく入学する人のこともすっかりわすれちゃってたし。これはアキヤマさんには内緒にしとかないと。

初めて会ったアキヤマさんは、何というかその・・・男の人にうのは変だと思うけど、綺麗な人だなあって思った。

見た目がってわけじゃなくて、いや見た目もカッコいいんだけど・・・何だろう・・・？

仕草とか言葉遣いとか態度とか、そんなところに何気ない優しさを感ずる。

アキヤマさんが見せている部分の綺麗なモノのその更に奥にもっと綺麗なモノがある感じ。

うーん、上手く表現できない。

僕がもつと勉強して大人になったら解るのかな？

「あら？ネギにアキヤマさんも。

ネギったらアキヤマさんをここに連れて来ちゃったの？」

「あ、ネカネお姉ちゃん」

あう・・・そうだった・・・

お姉ちゃん達はアキヤマさんの歓迎会の準備のために食堂に来てるんだった。

アキヤマさんを驚かせるために内緒にしなきゃいけなかったのに・・・
失敗しちゃったよ・・・

僕が自分の失敗に落ち込んでいたら、アキヤマさんが僕の手を引

いて入って来たところへ戻ろうとする。
顔を見上げると、アキヤマさんは考え込むような表情をしていた。

「ネギ君と一緒に色々を見て回るのが楽しくて考えていなかったよ。
魔法の学校だから入ったらいけないところとか、決まった時間しか
使えないところもあるよね。」

ねえ、ネギ君？

今、他に見れる場所はあるかな？」

「あ、はい！あります！」

えっと、図書館とか他にもまだまだ見るところがいっぱいあります
！」

「じゃあ、そこに案内してもらってもいいかな？
本は好きだし図書館に行ってみたいな」

そう言っアキヤマさんは僕と手を繋いで食堂を出て行きます。

・・・バレなかったのかな？

でも僕の方が誤魔化されたような？

「メルディアナ魔法学校へようこそ!!
みんな貴方を歓迎します! レン・アキヤマさん!!」

ネギ君と学校見学をして、ひとしきり時間を潰してから再び食堂へ。

学校全体をあげて・・・という訳ではなさそうだが、ネギ君達以外にも沢山の子供や先生方も参加してくれている。
有り難いと思うのだけれども、こそばゆい気持ちになる。

俺がちやんと驚いていたのを見て、ネギ君も安心したことだろう。
流石にあんな幼いけな少年を気落ちさせては心が痛む。

不自然じゃない程度に驚く演技が出来たのも、今まで培った嘘、誤魔化し、取り繕いの人生の賜物だと言えよう。
皮肉も嫌みも効き過ぎていて乾いた笑いも出てこない。

しかしまあ小さな子供の多いこと。
それでも小学校低学年くらいから中学一年生くらいまでといったところだが。
実に賑やかで魔法学校の生徒とはいえ、その辺はやっぱり子供ということか。

メルディアナの通常のカリキュラムは7年。
入学する年齢はまちまちなので、普通の子供なら大体12〜15歳で卒業と言うことだろう。

四歳過ぎくらいに入学して飛び級して5年で、しかも主席で卒業

したネギ君の才能の凄まじさには恐れ入る。
そういえばアーニヤちゃんも同じか。

前世知識の補正ありで天才扱いだった俺とは異なり、本物の天才少年少女たちという訳だ。

自分の狡さや卑怯さが申し訳ない。

それはさて置き、入国してからまだ一日目だというのに早速問題が発生してしまった。

所謂、言葉の壁というヤツである。

この学校で日本語を話せるのは教師陣だけ。しかも一部の人間のみ。

これは僅かながらも期待していた希望的観測が外れたことになる。
日本人が一人もいないとは・・・

魔法学校は数は少なくとも世界中にあるのだから、よっぽどの思い入れがない限り、好き好んで遠方の学校に通う人間はいないだろう。

メルディアナの校長と麻帆良の学園長が懇意でなければ、俺も別の国の学校に行っていたかもしれないわけだし。

とりあえず当面は魔法の勉強の前に語学の勉強が最優先である。
先が思いやられるとはこのことが。

「大丈夫ですか、アキヤマさん？
お疲れの様子ですけど？」

グレープジュースを片手に嘆息していたのをネカネさんに見られていた。

端正な顔が心配気にひそめられている。

「目まぐるしい一日でしたからね。

多少の疲れはありますが大丈夫です。

ネカネさんこそ大丈夫ですか？

俺を迎えに来て頂いた上にこの会場の準備も手伝っておられたのでしよう？」

「私はこういうことには慣れてますから大丈夫ですよ。

というか、やっぱりお気付きだったんですね。この歓迎会のこと」

「ネギのために気を遣わせてしまいすみません」と困ったように微笑むネカネさん。

「やっぱり無理がありましたかね」

「食堂に入っただけとはいけないというのは流石にないですよ。

ネギは気づいてないでしょうけど。

本当にネギったらもう・・・」

頬に手をあて小さく息をつく仕草や薄く笑む表情が儂げで絵になる。

この学校には写真に収めたい風景がやたらと多いな。

「ネギ君はとても丁寧に案内や説明をしてくれましたよ。礼儀も正しいし、あの年齢であれだけ出来ることに感心したくらいです」

「まだまだ子供ですから。昔から無茶ばかりして、いつも心配させられて困っています。

それに・・・ご存知ですか？あの子の親のこと・・・」

親というのは父親のことだろう・・・

『千の呪文の男』サブセントマスター ナギ・スプリングフィールド。

最強の魔法使いで、今もなお語り継がれ偉大な英雄。

その遺児であるネギ君には常に危険がつきまとう。

英雄の息子という存在を、その才能を危険視し害をなそうとする輩がいる。

実際に彼は住んでいた村を襲われ命を奪われかけている。

また本人が望もうが望ままいが周囲は期待をかける。

それが本人の重圧やや苦痛となり、歪ませていく可能性があるとも知らずに。

ネギ君が純粹で素直だからこそ、より危険な道に陥りやすくなる。ネカネさんがどこまで考えて心配しているのかは解らない。ただ・・・

「ネギ君の出自や立場についてある程度は理解しています。でもネギ君なら大丈夫ですよ」

「そんな！だってあの子、本当に危ない目に遭って！」

声を荒げるネカネさんを苦笑しながら手で制す。

そりゃ会ったばかりの他人が、無責任にこんな適当なことを言えば腹も立つだろう。

「会ったばかりの俺でも解りますよ。

ネギ君は大切に守られているって。

彼の周りの人達を見ればね。

みんな、彼を見守り真剣に導こうとする人ばかりです。

それに彼もその大切な人達を守る為に頑張っている。

幼いから失敗もするし無茶もする。

だけど絶対にネギ君は失敗したまま、間違っただままにはならない。

本人がそうしないだろうし、周りの人達もそうさせない。

だから大丈夫です」

メルディアナに来て安心したこと。

それはネギ君の周りには、彼を洗脳するような人間がないこと。

来英初日に見ただけで絶対にそうだとは言いきれないが、ネカネさんに、アーニヤちゃんに、メルディアナの校長に、この人達について歪ませたままになんか出来るものか。

俺達とは離れた席でアーニヤちゃんに怒られて慌てているネギ君。

それを周りの子供や大人達が楽しそうに見ている。

その姿を眺め俺も一緒になって笑う。

「まあ、ネカネさんは今まで通り心配してあげて下さい。
心配してくれる人がいることで、ネギ君のブレーキにもなるはずで
すから」

「ネカネさんは大変だと思いますけどね」と締めてジューズを飲
み干す。

というか、我ながら知ったような口をきいてしまった。

逃げるようで悪いけれど、ジューズのお代わりを取りに行くフリ
をしてネカネさんから離れよう。

「あの一！」

「は、はい？なんでしょうか？」

逃げようとしたことがバレたのか、ネカネさんに呼び止められた。
先程までの冗長な喋りをしていた口はどこへ行ったやら。
あからさまにどもってしまった。

美人の叱責なら甘んじて受けようと観念して、恐る恐るネカネさ
んへと振り返る。

「あの一・アキヤマさんもネギを見守ってくださいますか？」

振り返った先には胸の前で両手の指を重ね合わせて、上目遣いの
ネカネさんが不安そうにこちらを見ていた。

「一・なんだそんなことか。そんなの・」

「勿論ですよ。」

だって俺、今日一日でネギ君のことが大好きになりましたから」

俺の言葉を聞いてからネカネさんが見せてくれた笑顔は、花も霞むくらい綺麗だった。

さっきの仕草といい、本当に貴女、俺をどうしたいんですか。

これで終われば、さぞかし良かったのだけれども……

「あ、アキヤマさーん！」

姿が見えないなあと思って思ったんですけど、ここにいたんですか？」

「ん？どうしたいんだいネギ君？」

そんな立派な杖なんか持って」

「エへへ、これ僕の宝物なんです！」

アキヤマさんにも見て貰いたくて持ってきたんです！」

両手で少し重そうに杖を抱えたネギ君がニコニコ顔で近寄ってきた。

まだ小さな体が杖に振り回されよちよちしている。

君といい、君の従姉といいなんなのかね。

そんなに俺にどうにかなってほしいのだろうか。

でも大事の宝物を見せてくれるくらいに俺を信頼してくれたのは嬉しい。

その杖を使い活躍する前の、これから成長していく姿を見ていくのもきつと楽しいだろう。

でも流石にパーティー会場に杖を持ち込むのは駄目なのだろう。

ネカネさんが『空気を読まない子に私ちよつと怒ってます』的な感じで、頬を膨らませてネギ君のそばに立っている。

「ダメでしょネギ！」

アキヤマさんは私とお話し中なんだからあとにしないで！」

「えっ？う、うん、ごめんなさい？」

怒られる方向性が違ったせいか、ネギ君は謝りながらも困惑中だ。俺も意外な叱責に驚いてはいる。

あとネギ君。

怒られるとわかって持ってきたのなら、ネカネさんに見つからないようにしないと意味ないだろう。

なんだかワタワタと混乱中のネギ君に苦笑しつつ、そろそろ助け舟を出そうかと思ったその時。

「ハ・・・ハ・・・」

ハックションー！」

くしゃみと共に前髪が逆立つような突風が吹いた。

つら若き乙女の尊厳が著しく損なわれた瞬間を目撃しながら俺は、ネギ君とネカネさんのどちらに感謝するべきなのかを考えていた。

第九話：魔法使いの卵達（後書き）

調子良く文章を書けるといふことと、調子に乗って文章を書くといふことは違うと知りました。

主人公はあれですかね。年上の金髪美女と絡むとおかしくなるんですかね？

ついでにシヨタっぽくなってしまうとは……

ハーレムは他の作品では全然オツケー！ばっちこいです！

・・・だが主人公。

テメーは駄目だ！！

とりあえず連続投稿は一旦終了。

明日からちよつと京都に旅行に行ってきます！

まだ見ぬ修学旅行編の取材もついでにしておきます！

第十話：魔法使いの異文化交流（前書き）

少々間が空いてしまいました。が次話を投稿します。

相変わらず物語は進んでおりません。

鬱々とほのぼのとした日々をお送りしております。

ではごきげん。

第十話：魔法使いの異文化交流

「『プラクテ・ビギ・ナル、火よ、灯れ！』」

力ある言葉を唱え両手で握り締めた小さな杖の先端部に魔力を流す。

イメージの中の魔力はガソリン。

それを自分というタンクに供給し、指先から杖というエンジンへと送る。

体内の内燃機関を詠唱という始動キーでふかし、蓄えられた魔力を爆発させエネルギーを生む。

そのエネルギーを詠唱にある、小さな火へと変換させ、具現化し現象として発動させる。

それこそが魔法。

そして今、俺の唱えた魔法が・・・

「あ、今ちよつとだけ光った気がしますよ、アキヤマさん！多分、なんとなくですけど！

その・・・きつと・・・えつと・・・」

「・・・ネギ君。

俺のことは大丈夫だから無理しなくていいよ・・・」

「・・・スミマセン」

「いや、謝られると余計いたたまれないのだけれど・・・」

もう何時間もこうしているような気になる。

初心者用の杖を握る両手にかく汗は緊張からだろうか焦りからだろうか。

額に浮かぶ汗は集中による疲労からだろうか気まずさからだろうか。

俺の隣りに座るネギ君は逆にこちらが謝りたいくらい必死に励ましてくれる。

というか最早、神に成功を祈っているような面持ちである。残念だがネギ君。俺の知っている神様は、人間が祈ろうが祈るまいが全く関心がないのだよ。

人間の生み出したサブカルチャーには関心はあるみたいだけれども。

「保持する魔力量はデタラメ。

見た目には魔力の循環や供給も申し分ないんだけど・・・」

アーニヤちゃんが可哀想な人を見るような目で俺の様子を観察しながら呟く。

「なのに魔力の制御と詠唱の発音が全く出来てないせいで、初歩中の初歩の魔法でさえ発動しないんだから、滑稽を通り越していつそ哀れよね」

実際に可哀想な人だと思われていた。

思い返すこと十日前。
色んな意味で忘れられなくなった、俺のメルディアナ入学の歓迎会の夜。

ネギ君は原作時よりも早く、俺に夢と希望と罪悪感を与えてくれた。

ネギ君の魔力の暴発により、ネカネさんはその素晴らしいボディラインを惜しげもなく晒すことになった。

ネカネさんの美しい裸体は、それこそ微に入り細に入り説明したいところではあるのだけれども、それで解るのは俺の変態性のみである為詳細は割愛する。

パーティーの最中で起きた事件の為、他にも目撃者はいたのだが、幼い子供達は何が起きたのか分かっておらず、妙齢の男性陣は事態を把握した時点で目を逸らしていた。

流石は英国紳士。

女性への気遣いを如何なる時も忘れていない。

かく言う俺も、呆気にとられたものなるべく見ないようにスーツのジャケットをネカネさんに渡して後ろを向いた。この『なるべく』というところが彼等と俺の最たる違いであろう。

よくしてくれている女性に対して、配慮が足りていないことは自覚している。
それ故の罪悪感である。

もう一人の当事者であるネギ君は、比喻ではなくまさしく矢の如く飛んできたアーニヤちゃんの飛び蹴りで強制退場とあいなった。ネカネさん涙目、ネギ君弱り目、アーニヤちゃん怒り目、俺は眼福ともあれ、これからのメルディアナでの生活が、一波乱も百波乱もあることを予感をさせてくれる一夜であった。

そのメルディアナ魔法学校での俺の立場なのだが、校長と高畑先生との話し合いで、三年間という期間限定の留学に決まったらしい。畑違いとは言え東洋の魔法を修行し、独自解釈、開発つくりだしているで西洋の魔法も学習しているので、一から学ぶ必要がないという結論になったと、高畑先生が別れ際にそう説明してくれた。

三年というと原作でのネギ君の卒業時期と重なっていることになる。

これが誰かの陰謀かはたまた天の配剤によるものかは知る由もない。校長も学園長もネギ君の卒業を勝手に調整したりする人間に見えないので、偶然だとは思っただけれども。

すっかり忘れさられていた高畑先生だけど、今回は俺を送り届けることが仕事であった為、到着した翌日に即帰国というハードな日程をこなしている。
あの人自身が望んでしている活動とはいえ過酷すぎる仕事である。
真似出来ないし真似したくもない。

だが信念と覚悟を持って物事に従事出来ることに憧れや尊敬を抱かずにはいられない。

触れ合う人、一人一人が魅力に溢れているこの世界は、自分の矮小さや卑屈さを常に意識させられて息苦しくもある。俺なんか共に並び立つことなど無理な話であろう。

俺に出来ることなんぞ、地道に勉強をしながらそういった人達を眺めていくのが関の山であり、原作介入なんて以ての外、邪魔にならないように隅っこで大人しくすべきなのだ。

しかし生きていく上で問題というのは尽きないもので、俺は今非常に重要な選択を迫られていた。

その選択というのが、実はネギ君の魔法の暴発事故に繋がるのだ。

ネギ君がくしゃみで起こす魔法の暴発というのは、これからの彼の人生に深く関わる重要なファクターなのである。

ネギ君は順当に行けば、三年後の卒業で課せられ最終課題により、日本で教職に就くことになる。そこで出会う人達と友情や絆を結び、共に戦いへと赴くのだが、その為にはこのくしゃみに依る魔法の暴発で魔法バレが起こる、又はその切欠となることが必要不可欠なのである。露骨に意地悪な言い方をすれば、魔法の暴発で女性を剥いたりしないといけないのだ。

悪意がないとはいえ何という女性泣かせな現象だろうか。

つまり、魔法の暴発が起こらないと従者が出来なくなる可能性があり又、勝てる筈の戦いに負ける恐れもあるというわけである。

これには冗談抜きでネギ君の生死、そして世界の命運が掛かっている。

ではそのまま放っておけばいいかと言うと、それはそれで困ると

いつか、見ていて気の毒になるといつか・・・

実際に目の前で衣服が消えた時のネカネさんの様子を見てしまうと、『これからの為に必要なので我慢して下さい』なんて、簡単に割り切れるほど俺は外道ではない。

思春期の女子にアレはキツイ。下手すればトラウマになって登校拒否にもなりかねないだろう。

この魔法の暴発という現象が何故起こり得るのか。そのおおよその検討はついている。

俺自身も体験し今も直面している問題だからだ。

簡単に言えば、自身の魔力容量に対して、魔力の運用や制御の効率が悪い、不十分ということなのである。

本来、魔法の発動に必要な魔力量は一定であり、過剰に供給しても無駄に消費されてしまう。その為に制御する方法や効率良く使用する術を習得するのだが、魔力容量の高い人間はその制御等にも非常に繊細かつ綿密な作業を要する。

例えるなら、魔力容量が貯水タンク、制御方法をバルブや蛇口とする。

規格外の大きさのタンクに普通のバルブや蛇口を取り付けても、タンク内に溜まった水の圧力で蛇口は壊れたり外れたりする。

仮に専用の特設バルブなりなんなりを取り付けても、専門の資格者が圧力計算を行い、微調整をしながら出ないと危なっかしくて触れられやしない。

更に些細な衝撃（この場合、感情の昂りやくしゃみ等）でタンクは水漏れ事故を起こすのだから堪らない。

要は魔力容量が大きい人間には、それ専用の制御方法が必要にな

るということである。

ネギ君にしる俺にしる、この魔力容量の大きさがネックとなつて、通常の魔法使いの方法では十分な制御を行うことが出来ないのだ。

そこで俺がとっている方法が、以前に学園長に語つた魔力制御用の呪印を自らに施す方法と魔力制御の魔力具の使用である。

高畑先生も勘違いしていたらしいのだけれども、俺は謙遜や嘘偽りなく魔力や気の制御が下手くそなのだ。

オールオアナッシングとまでは言わないが、細かい調整は全部呪印や魔法具任せで、俺は魔力を使うか気を使うかと力を沢山籠めるか少ないかだけ考えて行っているに過ぎない。ガツカリキャラにも程がある。

長々と説明を続けてしまったが、俺の制御方法を用いればネギ君も魔法の暴発を防ぐことが可能なのである。

つまり俺が関わることで、ネギ君やその仲間達の未来が本当に変わってしまうことになるのだ。

ただでさえ、今自分がこの世界に存在することで物語にどんな影響が現れるか解らないのに、そこに直接的な関わりが加わつたらなんて恐ろしくて考えたくもない。

にも係わらず、女性達が可哀想なんて中途半端な同情心や罪悪感で頭を悩ませているのだから始末に負えない。

この世界で生きていながらも、俺は未だに傍観者気取りでいたいのだ。

ネギ君達の未来がどうかでなく、結局帰結するのは自己の保身と安全となる。いい加減にしると誰かに殴りつけてほしいと思うのだが、それすらも我が身の可愛さで責任を他者に押し付けているのだから、心底自分自身が嫌になる。

そして無責任と覚悟の無さの果てに選んだ答えが、冒頭での初歩魔法の練習風景である。

魔力の制御がままならない姿をネギ君に見せることで、自身の失敗やその原因にネギ君自ら気付ける可能性を残すという、何も伝えないうで成り行きに任せると言うやり方。

消極的だとも言わない、完全に問題からの逃避である。

みっともないことこの上ない。

何とも俺らしい方法だと思わないか。

しかし・・・

「西洋魔法の正しい発音すらままならないのは、流石に予想外過ぎたよ・・・」

s i d e
ネギ

アキヤマさんから西洋魔法の練習を見てほしいってお願いされてから大分時間が経った。

西洋魔法を勉強する為にメルディアナにまで留学するんだから、ア

キヤマさんはすごく勉強熱心な人だと思う。

今もずつと杖を握り締め、魔法のイメージを続けて始動キーを唱えている。

流れている汗もそのまま真剣そのものといった感じ。

魔法の練習場は学校の外にあるから時々風が吹いてちよつと寒い。部屋の中で魔法の練習をすると危ないからだけど、ここがもうちよつと暖かければと思ったりする。ピューっとまた風が吹いて大きな上着を掴んで体が思わず丸まる。

外は寒いからってアキヤマさんが掛けてくれた上着。

僕が羽織るとブカブカで膝下まで上着の裾がくるから、まるでコートを着ているみたいになる。

僕の手の先からたらんと垂れた上着の袖口を見ると、何だか面白くてウキウキするような気持ちになる。

隣りで一生懸命なアキヤマさんには悪いけれど、こうしていると心がポカポカして顔が笑っちゃう。

アキヤマさんは優しくてカッコいい。まだ出会って十日だけど、毎日僕とお話ししてくれるし、珍しい魔法も見せてくれた。

この前は、紙をハサミで切って動物の形にしたものをまるで生きているみたいに動かして見せてくれた。

犬とか猫とか沢山。アーニヤはウサギがお気に入り、「私にもオリエンタルマジックを教えて！」って、アキヤマさんにせがんでたっけ。

「これは魔力じゃなくて『気』というものを使うから、ちよつと教えるのは難しいかな」って困りながら笑うアキヤマさんにつられて笑ったら、僕だけアーニヤに頭を叩かれちゃった。

『理不尽』っていろいろの身を持って実感したよ。

タカミチはお話しする時間もないまま帰っちゃってすごく残念だったけど、かわりにアキヤマさんが僕にいろいろ楽しいことを教えてくれる。

学校にも男の人は沢山いるけど、アキヤマさんくらいの年の人はあんまりいないから、なんだかお兄ちゃんができたみたいで嬉しい。アキヤマさんにそう言ったら「ネギ君が弟にだったらみんなに自慢出来るよ」って僕の頭を撫でながら笑ってくれた。

僕はまた嬉しくなって、それからはアキヤマさんと毎日一緒に勉強したり、ご飯を食べたりするようになった。

さっきも言ったけどアキヤマさんはとても勉強家で、前は英会話帳を見ながらみんなとお話ししていたんだけど、一週間くらいしたらそれを見ないで普通にお話しが出来るようになっていた。

毎日、寝る間も惜しんで英会話を勉強してたみたいで、僕は単純にスゴいって思ったんだけど、ネカネお姉ちゃんからは「夜はちゃんと寝なさい！」って怒られてた。

ちよつとシユンとしたアキヤマさんが面白かったなあ。

でも側で笑ってたら「ネギだつて夜遅くまで勉強してるでしょ！」って僕まで怒られちゃった。

『とぼつちり』というものを身を持って体験したよ。

「やっぱり駄目みたいだ。自己流で魔法を使う癖でもついちゃったのかもしれないね。

ネギ君を長い時間つき合わせちゃったのにゴメンね？

あとは俺一人でやってみるから、ネギ君は先に戻った方がいいよ。風邪を引いてしまったら大変だ」

「僕は大丈夫だから気にしないでください。それに戻るならアキヤ

マさんも一緒に帰らないと。
アキヤマさんの方こそ風邪を引いちゃいます」

申し訳なさそうなアキヤマさんの言葉を遮り、立ち上がってアキヤマさんの手を引く。

上着を僕に渡して薄着になっているし、汗も掻いているからこのままだと本当に風邪を引いちゃうかもしれない。

「さあ行きましょうアキヤマさん！」

おフロに入って体を温めないと！」

「お風呂に入るのならネギ君もじゃないかな？
随分と手も冷えてるようだし」

「ぼ、僕はいいんですよ！い、今はアキヤマさんのことが最優先で・・・」

「本当にお風呂が嫌いなんだね・・・」

アキヤマさんが僕の手を両手で挟んで温めながら苦笑いしている。
うつつ、だっておフロに入るの苦手なんだもん・・・

頭も洗えないし・・・アキヤマさんはおフロが好きなんだよなあ。日本人はおフロ好きが多いって教えてくれたけど、朝も夜も入るのは異常だよ・・・

「俺も戻ることにするから。」

なんなら一緒にお風呂に入ろう？」

「うつつ、でも・・・やっぱり・・・」

「お風呂から上がったらまた珍しい東洋の魔法を見せてあげるからね？」

「えーっ！東洋の魔法ですかー！？
うっ、でもおフロはやっぱり・・・」

「だあー！どーでもいいーから二人ともさっさと戻るわよ！
私が寒いよ！あと私にも珍しい魔法を見せなさい！！」

僕達の押し問答をアーニヤが怒鳴り声を上げて遮る。

僕達のあとからアーニヤもアキヤマさんの練習を見に来ていたんだ
っけ。

すっかり忘れちゃったよ。

アーニヤが僕とアキヤマさんの間に入って、僕達の手を引っ張り
ながら学校の中に進んでいく。

ズンズンといった感じで足を進めるアーニヤを見て、アキヤマさん
と一緒に笑う。

アーニヤも口では厳しく言ったりするけど、本当はアキヤマさんの
ことを結構好きなんだと僕は知ってる。

三人で一緒に勉強したり、ネカネお姉ちゃんも一緒にご飯を食べた
り。

僕の毎日はちょっとずつ変わっていく。それはとても温かく心地良
いもので、きつと掛け替えのない大切なものになっていると感じる。

僕はこの大切な毎日をずっと守りたい。魔法の勉強をする新しい目標を胸に抱きながら、僕の大切な人達と帰り道を歩いていった。

side???

「・・・では、秋山の小倅はイギリスに行ったという情報に間違いはないと?」

「ええ、ええ、その通りで御座います。全くもって残念無念で御座います。」

かの神童をわたくし達の元に呼び寄せられれば、さぞかし計画の進行も早くなつた筈ですのに。

ああ、ああ、真に残念。念が残つて仕方ありません」

「近衛の庇護があつたのでは手出しも叶うまい。

あの忌々しい裏切り者めっ!

どこにいつても我等の邪魔をするか!」

「いえ、いえ、近衛翁も守りきれなかつたからこそその海外への留学に御座いましょう。」

手元に置けず、さりとて国内にも置けずの八方塞がり。

残された術は問題先送りの後回し。

ああ、ああ、遠き地で独り異教の魔術に我が身を晒すかの神童のことを想いますと、わたくし胸が張り裂けそうに御座います。

あの闇色の瞳と髪を今一度愛でとう御座います。

ああ、ああ、口惜しい口惜しい。」

「ふん！だがいずれは帰ってこよう。

その時に我等の計画に間に合えば引き寄せるもよし。

間に合わねば捨て置けばよい。

今暫くは我等も目立った動きはとれぬ。準備が整うまでは貴様も大人しくしておれよ？」

「ええ、ええ、承知も承知。一切承知の上で御座います。

ふふ、ふふ、是非ともかの神童には間に合って頂きもので御座います。

共に闇夜を舞い、黒き情念を灯す日を夢想しつつ、わたくしは血臭の寢床に戻りましょう。それでは皆々様、次の夜までおさらばをば致します」

月の明かりも届かぬ宵闇の中。

誰一人として姿も見えず、複数の人らしき者の声だけが響いていた。その声もまた闇にとけるように消え去ったのち、息を潜めていたかのような木々のざわめきや風のなく音が蘇る。

舞台役者が出揃う日まで、物語は静かに眠りにつく……

第十話：魔法使いの異文化交流（後書き）

というわけで依然鬱陶しい主人公と可愛らしい子供先生の日々の様子＋珍妙なキャラの御披露目兼暗躍の様子でした。

原作のキャラクターやストーリーを破壊しない方向にいきたいのですが、イレギュラーがいる時点で原作通りにいくのは有り得ないだろうと諦めています。

主人公と同様に、私も悪あがきを試みますが・・・
バタフライエフェクトがどのように作用してしまうやら。

秋の京都は最高でしたが、最高に人が多かったです。
物語の舞台となる場所のイメージも膨らみましたし、京都編を書くのが今から楽しみです。

本当にいつになるやらしれませんが・・・

メルディアナ逆輸入編はあと一、二話程度の予定です。

お付き合いの程、宜しくお願いします。

第十一話：人と関わるといふこと（前書き）

ちょっと挑戦してみた回です。

何がつて自分の文章力と発想力に対してです。

独自設定を放り込んでみました。

結果は・・・お察しください。

では、メルディアナ逆輸入編・・・というかもっ、のんびりだらだら
編の続きをどうぞ！

第十一話：人と関わるということ

パンと破裂したような空気音が脳内に響く。

顔面に向かつて放たれた一撃によって視界が揺らぎ、伝わってきた衝撃が聴覚を遮る。

正面を向かいあつて筈なのに、顔を上げた時に一瞬相手の姿を見失った。

『不味い』と感じた時には、反射的に身を屈め右足で地面を蹴つており、斜め前方に低く跳んでいた。

瞬間、左半身の皮膚が粟立つ感覚を捉えて、先程自分を襲った『何か』が間近を通り過ぎ、背後にあつた筈の草花をバラバラに吹き飛ばす。

悠長に花卉の散る様を見ている暇はなく、着地した瞬間には再び足に力を籠めて跳ぶようにして駆ける。

ビデオが再生されているかのように全く同じ『何か』が俺の身体スレスレを通り過ぎ続け、草花であったり地面だったりを破碎し決る。それをまた出来る限りの速さと最小限の動作で同じように回避し続ける。

射線は直線的。最大射程距離はおおよそ十メートル。

しかし視認性はゼロに近く、物体に着弾するまで無音。

その特性上、初動から方向を判断することは困難で且つ、速射性に優れているため一カ所に留まることも許されない。

唯一の救いは一撃一撃の威力がそれ程高くないことだが、くらい続けることで体力は消耗するし、当たり所が悪ければ容易く意識を奪われてしまう。

円運動による回避も体力消耗という点では、足を止めて攻撃に耐える方法と同じく意味がない上にジリ貧である。

結局、打開するためには射程外からの遠距離攻撃か、接近戦に持ち込むより他はない。
それすらも相手が距離を詰めたり離れたりすればそれまで。自身で体験して初めて理解出来る。
厄介極まりないとんでもない技である。

「（接近戦は俺のスタイルじゃない。
かと言って遠距離からの魔法攻撃は殺傷力が高過ぎて気軽には使えない）」

低級魔法ならば相手を死傷させず無力化させられるかもしれないが、人間相手に使ったことがない為、危険性を確かめていない内は放つ訳にはいかない。
しかも、もし効かなかった場合には、手痛い反撃を受ける可能性がある。

的を絞られないように姿勢を低くした状態のまま走り続けながら打開策を思考する。

結局、現時点でとれる方法は一つしかなく、それを避ける為に考えた作戦は相手に致命傷を与えることが前提で行わなければならない為、全て却下である。

自身の手持ちのカードは十全にあるのだけれども、殆どが未使用の為、迂闊には切れない。
今に至るまで確認していなかった自分が恨めしい。
故にとれる方法はやっぱり一つ。

「（超高速移動での接近と打撃による直接攻撃。接近戦は苦手だと言うのに全く・・・）」

なけなしの覚悟を決めて、相手の攻撃の起点となる場所を見定める。

いくら速射性に優れていても、一度に放てるのは左右で一発づつ。軸線は二つだけ。

左右に跳び回っていた足に今までより力を籠めて踏みしめる。

急な制動による負荷が両足に加わるが、それをバネにして背後へと跳躍する。

視線は攻撃の起点とその軸線。

急激な方向転換は相手にも僅かな思考の間を作る。

息を吸い込みながら相手の射程外に着地し、叫ぶ。

「『界王拳っ！』」

俺の叫びと共に吐き出された息を瞬時に再度吸い込み、着地の反動と爆発的に上昇する気の勢いを利用して突き進む。

相手の逡巡によって生まれた攻撃の僅かな間隙。

軸線を微かに逸れながら進む。

しかしそれでも足りない。

一度射程外に離れた為に相手に追いつくにはまだ加速が足りていない。

だから・・・！

「『三倍っ!!』」

更なる気の爆発と身体への過負荷を増加させ、相手の予測をもつ一度上回る。

「ぐっ!? 速い!」

俺の身体が真後ろからの爆風に飛ばされたかのような勢いで接近し、突き出した左肘が対峙する相手の左脇腹に突き刺さる。

人体を打つ手応えを感じ更なる追撃を加える為に左肩をぶつけようとするが、これは相手の右掌打でいなされ不発。でもまだ追撃は終わらない。

右足を左足と交差させるように踏み出し、いなされた一撃も利用して体勢を半回転。

勢いに乗った右の裏拳が顔面を狙う。

が、これも上段からの左打ち下ろしに防がれる。しかしこちらもこれが本命じゃない。

左脇腹への肘打ちは軽くない上に追撃が二連。

鈍痛と両手で攻撃を防いだあとの身体の僅かな硬直は致命的な隙となる。

両腕を腰溜めに構えて裂帛の叫びと共に拳打の嵐を呼び起こす!

「『熱き正義が燃えたぎる! 赤き血潮の拳がうなる! 連続拳!』」

間隔無しに放たれた十数発の左右の拳打は相手の身体に全て叩き込まれ、身体を数メートル後方へと吹き飛ばした。

仰向けに倒れた相手・・・高畑先生の姿を見て一息ついてから俺も仰向けに倒れ込んだ。

「いやー、まいったよ。『僕から一本とれたら勝ち』だなんて格好つけて言ったけど、あっという間に接近されて吹き飛ばされちゃったよ。しまらないったらないね。

特に気の強化による加速と最後の連打。あれは凄まじかったよ」

「すぐにケロツとした顔して起き上がって俺を助け起こした人が何を言ってるんですか・・・」

「いや、本当に効いてたんだよ？」

脇腹の一発に、最後にも何発かイイの入ってるからね。

一瞬息が止まったかと思っただくらいだ。あれに魔法が加わったとしたらゾツとするなあ」

「高畑先生も手加減しておいてよく言いますね」

激しい運動後の体温上昇と最近また強くなってきた夏の日差しが

らくる渴きを癒やすべくスポーツドリンクを一気にあおる。
冷えた液体が食道を通過する感覚と口内に残る甘味が、疲れた身体と心にしみていくようで気持ちいい。

都市部より標高が高いメルディアナは夏場であっても比較的過ごしやすい気候だ。

木陰に敷いたレジャーシートに座り、のんびりとした休息はここ何年かの夏の過ごし方の定番となっている。
魔法の勉強や練習の合間に、美しい自然に溢れる風景を眺められるのは何とも贅沢だと思う。

景色の中に小さな人影が映る。

俺と高畑先生の姿を見つけて手を振りながら走り寄ってくる様子は、初めての出会いの日を思い起こさせる。

その人影を追う大小二つの姿もあの時と同じである。

ただあの時と違うのは、二年の歳月で互いに成長し伸びた背丈とこの間に築かれた信頼関係。

「レン兄さん！

タカミチー！」

俺達の名を呼び近寄ってくるネギ君。木陰から漏れる日差しに目を細めつつ、可愛い弟分を出迎える為にこちらも片手を振りながら立ち上がる。

あの日から二年。

緩やかに過ぎ去ってきた温かな日々を思い浮かべながら、先程の高畑先生の言葉を反芻する。

「（魔法か・・・）」

二年という歳月は何かを得るにも諦めるにも十分過ぎる時間だった。

「もう！レンさんったら！」

ケンカは苦手だって言っておきながら、またこんな危ないことをして！

ほら、こんなところにも擦り傷が！」

「えっと・・・すみません。でも大丈夫ですから・・・」

「ダメです！ちゃんと治療が終わるまでジツとしていてください！」

「僕も一応怪我をしてる人なんだけどなあ・・・」

「タカミチさんには悪いけど、ネカネお姉ちゃんの中の優先順位はアキヤマの方が上だから・・・」

「別にタカミチのことを忘れてる訳じゃないよ・・・多分」

高畑先生との模擬戦紛いの訓練の後、合流したネギ達と一緒に昼食を摂る約束をしていたのだが、小さな傷をあちこちにつけた俺を見たネカネさんに捕まり、治療兼お説教を受けることになった。

ネカネさんの心配性な性格はネギ君は勿論のこと、親しい関係の人達にも遺憾なく発揮される。

気苦労が絶えない性分だと俺の方が心配になるが、こうして俺の身を案じてくれているのを見ると、自分がネカネさんにとって親しい人間の一人なのだ実感出来て嬉しくなる。

俺の隣りに座るネカネさんは治療の為に前かがみになっているのでその面差しは見えない。

変わりに目に映るのは夏の陽光にも負けない輝きを見せる綺麗な金の髪。

時折風に吹かれて揺れて香る女性の匂いが、俺の心中を良くない方向にざわめかせる。

ぶつちやけときめくどころか劣情を催すこともしばしば。ネカネさんは男性に対して無防備過ぎるのだ。

温室育ち・・・とはまた違うのだが、男女問わず常に優しく微笑みかけ、さり気ない気遣いや楚々とした所作に心をうたれた輩は数知れず。

そこへきて『お顔の色が優れません』なんて頬や額を手で触れられたり、疲れてうとうとしながらこちらの肩に頭をもたれかけたりされてみる。

ただでさえ禁欲的な生活に思春期真っ盛りな身体を持て余している

のに、理性を破壊するような攻撃をされて、俺はどれだけ理性の最終ラインを突破しそうになったことか。

『マールよ、在るべき所へ去れ！』とばかりに煩惱退散の札を書きまくった時もあり、その奇行をアーニヤちゃんが見てドン引きしていたこともあった。

アーニヤちゃんはアーニヤちゃん、俺に対して遠慮がなくなったのだが、これも親しさの現れだと思いたい。

とまれメルディアナでの生活は充実していたと言えよう。

side 高畑

「でもレン兄さんもタカミチも本当にスゴかったよ！
離れた所から見てたけど、動きが速すぎて全然目で追えなかった！」

未だ興奮覚めやらぬといったネギ君が身振り手振りを加えて話している。
最近落ちてきた視力を補強する為に掛け始めたという眼鏡がズレるのも気にならない様子だ。

この子はこういった子供らしい一面をごく親しい人間にしか見せない。
普段は真面目で礼儀正しいどこか大人びた少年。

それもまたネギ君の本質だろうけど、子供らしからぬその在り方は危うさと悲しさを感じさせる。

その純粹故に儂く、その善性故に脆い。まかり間違えば深く暗闇に沈んでいきそうな綱渡りのような生き方。

そう、ネギ君と彼は似ている。

純粹さも善性も在り方も危うさも。

ただ、ネギ君はまだ無自覚に内罰的でそれでも正しく生きようとしているのに対し、彼は自己否定と自己嫌悪の強さから生きること自体を否定しかねないというところだろうか。

故に二人は惹かれあっている。

お互いの純粹さと善性に憧れと羨望を抱いている。

お互いの自分にはないものを羨ましがらる様子は見てもどかしくもあるけど、それは周りが教えても意味がない。

他者の言葉では彼らはそれを否定するだけだ。

自身で気付いて、自身を受け入れて、漸く前に進めるようになるのだろう。

だから僕は見守り続ける。

彼らの心が成長し強くなれるように悪意から守り続ける。

僕があの人達に守られ託されてきたように、今度は僕が守っている。

先程僕に話していたことを今度は秋山君に言いに行き、ネカネクんに注意されているネギ君。

ネギ君とネカネクんに挟まれ困った顔をしながらもどこか楽しそうなお山君。

仲の良い兄弟や家族のような彼らのやり取りを眺めながらネカネ

くんが用意してくれた昼食の続きを摂り始めた。

「タカミチさん・・なんだか急に老け込んでませんか？
気持ちには分からないでもないですけど」

やれやれといった風情でサンドイッチをくわえながら彼らを眺めているアーニヤくん。

この子もこの子で子供らしからぬところがあるなあ、なんて思いつつ、僕も同じようにサンドイッチを手に取った。

side蓮

「左踏み込み、同時に左掌打で外払い、右手で正中を守り、右中段蹴り、一回転し、右足軸に左前蹴り・・」

夏と言えど田舎街の夜は早い。

まばらに見えていた家々の明かりも殆どが消え、人の気配もない自然特有の静かさがかえって耳に響いてくる。

昼に高畑先生から受けた指導を何度も繰り返し身体に覚え込ませる。

「・・・ここで前蹴りをしたら相手と距離が離れるよな。やっぱり無意識の内に接敵を避けているのか・・・」

今日のように高畑先生は時折メルディアナに顔を見せる。ネギ君や俺の様子見だろうけれども、親しい知人の来訪はやはり嬉しい。時折といってもその間隔は存外長い。

半年に一回か二回程度に会えるくらいなので、『お久しぶりです』から挨拶が始まるのが定番化している。

滞在期間もまちまちだが、会える時には毎回体術の指導をお願いしている。

戦いを望むつもりはないのだけれども、今生では争い事から避けて生きるのは難しい。

その為、敵から身を守る術として最低限の動きがとれるように毎日訓練をしている・・・のだが、この逃げ腰な考えのせいか相手から距離をとる、相手を自分から離す、という行動を意識せず行ってしまうらしい。

「元々の目的としては十分なんだろうけど、男としてこの性分はどうなんだろうね、ネギ君」

「やっぱりバレてたの？レン兄さんって変なところが鋭いよね。あとまた『君』がついてるよ」

「俺は臆病だから人の気配には敏感なんだよ。

それと子供がこんな時間まで起きていてはいけないな。

ネカネさんにまた怒られるよ、ネギ」

「レン兄さんだつてまだ子供じゃない」

「十六歳は大人と子供の境目だ。つまり大人だと言ひ張れば大人に子供だと言ひ訳すれば子供になるんだよ」

「レン兄さんはやっぱり変なところがあるよ」

軽口に軽口を返しながら建物の影からネギ君が姿を現す。心中では『ネギ君』と呼称しているせいか、会話の中でもそう呼ぶことがあり、それがご不満な彼に今のように毎度指摘されている。

鮮やかな赤毛が夜に映えて目につくが、真つ黒なローブを着込んでいるせいでフードを被れば夜の闇に溶け込んでしまつたろう。

小脇には古めかしい本を何冊か抱えており、彼がこの時間まで起きていた理由が思いあたって苦笑が漏れる。

「また禁呪書庫に入つてたね。」

夜更かしに違反行為がバレたらネカネさんが怖いよ？
もしかしたら心配し過ぎて失神しちゃうかもね？」

「うつつ・・・で、でもレン兄さんも夜遅くまで起きてて、コッソリとケンカの練習してたつてバレたら、ネカネお姉ちゃん心配し過ぎで泣いちゃうかも？」

「うつつ、そつちもそつきたか・・・
じゃあ、このことはお互いに・・・」

「「内緒だね！」」

そう顔と声を合わせてクスクスと二人で笑う。隣り合わせに座り、汗を拭きながら持ってきたドリンクをネギ君にも渡す。

日中に比べれば夜は幾分涼しいが、長袖のローブを着込めば暑さは変わらないだろう。額につつすらと汗が浮かんでいる。

暗闇に紛れる為とはいえ、しっかりとローブを纏う辺りが真面目とどうか一直線というか。

どちらにしても好感が持てるに違いないのだけれども。

忍び笑いをこぼす俺をネギ君が怪訝そうに見ながら口を開く。

「でもレン兄さんはやっぱり変わってるよね。

魔法の学校に通ってるのに体術の練習ばかりだもん。

魔法の練習はしなくてもいいの？」

「魔法は・・・一応一通りの勉強はしたから十分だと思っただけけど。ラテン語も覚えにくいしね。

『魔法の射手』も三矢くらいは出せるようになったし」

「それって十分なのかなあ？」

レン兄さんは魔法の選り好みが大きいだけに思えるよ？

先生達だって『才能が勿体無い』って言うてたのに・・・」

「本当に才能があつたら他の魔法だつてとつくに覚えているよ。

本当に才能がある人っていうのはネギみたいな子をいうんだと思うよ？」

また飛び級したから順調にいけば、来年卒業でしょ？」

ネギ君の小さな頭を撫でながら笑う。ネギ君も背が伸びたが、お互い成長期なので身長之差は二年前とさほど変わらないままだ。

「僕もそう言われたって実感はあまりないよ？
じゃあレン兄さんはもう魔法の勉強はしないの？」

「全くしない訳じゃないよ。

魔法の効率化と制御はまだまだ改善の余地がありそうだし、上手くいけば俺の魔法に応用出来るかもしれないからね。

ただ新しい魔法の習得がこれ以上は難しいから諦めるだけだよ。
前に言った話を覚えてる？」

「『頭の中の魔法の本棚』のこと？」

ネギ君が右手の人差し指で頭を差して俺を見る。
それに頷いて肯定の意を示す。

この『頭の中の魔法の本棚』という微妙な言葉は、俺が二年間の学習の末に考えた言い訳・ではなく一つの魔法習得の概念理論である。簡単に言えば、『人が習得し使用出来る魔法の総数は、個々人で決まっており、それは魔力容量の大きさに依存する』というものである。

ここでのポイントは『習得と使用』と『魔力容量』と『魔法の総数』になる。

極端な話、魔法の知識や理論を記憶するだけなら誰にでも出来る。それを魔力を用いて制御し発動する過程までいける人間となると極少数になる。これが魔法の『習得と使用』である。

次の『魔力容量』と『魔法の総数』なのだが、魔法は一つ一つ必要になる魔力が異なる。

これは単純に発動が出来る出来ないだけでなく、その魔法を習得出来るか出来ないかという違いがあるのだ・・と思う。強力な魔法は覚えるだけで魔力容量のキャパを埋めることになり、他の魔法を覚える容量がなくなってしまう。

だから普通の魔力容量しかない人間が強力な魔法を覚えようとする時、それ一つしか使えない魔法使いになってしまふ可能性があるのだ・・多分。

これまた極論になるのだけれども、魔法学校で初歩の魔法から覚えていくことで徐々にキャパが埋まっていき、いざ中級、上級魔法を覚えようとする頃には容量が一杯一杯になって覚えられないこともある・・のかもしれないのだ。

その為、先天的な魔力容量の大きさが重要になり、魔法の使用回数だけでなく習得出来る魔法の総数も多いという大きな差が生まれるという訳なのである。

それを言葉にしたのが『頭の中の魔法の本棚』で、一つ一つの魔法を『本』、魔力容量を『本棚』として表現したのである。

正直に白状してしまうと、一向に西洋魔力の習得が進まなかった俺が、苦し紛れの自己保身の屁理屈を魔法先生に話したのが切欠だったのだけれども、これがなかなか面白い着眼点だと研究畑の先生方に好評になってしまった。

嘘から出た真・・・というより、言い訳から出たデマカセなのだが、これが俺の卒業論文となりそうなのである。

変なところで口が回るのは前世から一緒だが、その口のせいで要らぬ厄介を抱え込むところまで一緒らしい。輪廻を介さず転生しているから、背負った業もそのままなんだろうが。

俺の解脱には何億年かかるのだろうか・・・

「レン兄さんは忙しくなりそうだけど、僕も卒業の研究論文を考えないとなあ。どうしよう・・・」

「ネギだつて、『魔力制御の独自術式の発見と導入』なんて新しい方法を考えて褒められていたじゃないか。正直かなりあれには驚いたよ」

「うーん、あれはレン兄さんの自己開発の魔法があつて気付いたんだから、僕の功績つて言えるのかどうか・・・」

「俺の独自魔法の解釈なんて、気付いた人間がいなければ意味のない話だよ。

あれはネギの功績だよ。自信を持っていいことさ」

「そうかなあ。

でも結局レン兄さんの魔法つて非効率なのは変わらないんだよね。レン兄さんの魔法は全部個別の始動キーがあるような感じなんですよ？」

「独自の詠唱と発動条件が必要になるという方がしっくりくるかな？普通の魔法よりも手間はかかるけれど、それなりに強力だから不便

でもないさ」

「ネギのお陰で魔法の制御も上手くなったしね」と、そう言ってゴシゴシと先程より強めに頭を撫でる。

髪が乱れるのを嫌がりながらも撫でられるのは止めないネギ君。

お互いにこうしているのが好きなのだ。

さらっと流してしまいたかったがそうはいかないだろう。ネギ君は魔力の暴走に気付いただけでなく、なんと新しい制御方法の確立にまで至ってしまったのである。

俺の消極的且つ、中途半端な魔法の暴走に対する制御の必要性の進言が実ってしまったのだ。

本当にどうしよう。

ネギ君個人と周囲の女性方からしてみれば快拳以外の何物でもないのだけれども、この世界とネギ君の命運からすれば本格的に大問題になってしまう。

ネギ君から話を聞いた時には、表面的には喜んではいいたものの、内心では自身の迂闊さと責任の重大さに頭が真っ白になった。

これからネギ君が得る筈であった仲間達との切欠が失われる可能性が大きくなってしまった。

今後俺はどうすればいいのだろうか・・・カモ君よろしく、ネギ君の従者獲得の為に奔走するべきなのだろうか・・・

ネギ君にさり気なく魔法を失敗させる罫を仕掛けるべきなのだろうか・・・

失敗を避けるのが目的だったのに本末転倒なことこの上ない考えだ。

そんな俺の葛藤を知らず眉間に皺を寄せて卒業までの課題に悩むネギ君。

彼には全く責任はない。

これは俺が背負うべきで、解決すべき問題なのだから。

戦いは苦手だし未だに怖い。出来るなら避けていたい。

しかしそんな無責任なことは言っていられない。

ネギ君に仲間がいなくなるのなら、俺がその仲間になるしかない。ネギ君の力が弱くなるのなら、俺が強くなって守らなければならぬ。

例えどんなに危険でも、どんなに汚い方法でも・・・

「もつと強くないと駄目だな・・・」

「ん？レン兄さん何か言った？」

「何でもないよ。」

そろそろ戻ろつか？流石に夜更かしが過ぎるよ」

なおも不思議がるネギ君を誤魔化しながら部屋へと戻る。

ネギ君は何も知らなくてもいい。

間違えさせてしまった、いや間違えて違う道を進ませたことなど知られたくはない。

純粹に慕ってくれる彼に気付かれないように、小さな手を優しく握りながら俺は静かに決意を固めた。

第十一話：人と関わるといふこと（後書き）

主人公がネガティブながらも物語に関わる意思を見せました。

消極的で内罰的な理由で相変わらず鬱陶しい！

二年も経ったのだから少くくらは成長しないとなあと、思いついて、まあそれがちゃんと描けていけばいいのですが。

ネカネさんに関して完全に妄想が入ってます。

一応親しく感じている人にしかそんな真似をしないという設定ですけど。

主人公の使う魔法はかなり異端っぽいので、何かしらの解釈や設定をつけないと使えないだろうと考えていました。

これからはちよいちよい使っていけるかと思えます。多分。

冒頭の高畑氏との戦闘は・・・色々ジタバタした結果であの程度です。畜生。

主人公の強さが不安定ですが、基本スペックだけは異常なので大抵は力押ししていける感じですよ。

・ 実力者が相手だと意表をついたりしない勝負にならないという・
使えねえな主人公。

ネギ少年の成長と変化に伴って原作乖離の兆しが見え始めました。魔法の暴発がない程度だとあまり影響ないかもと考えたりもします。物語の壊れない程度のバランスをとるのが難しいです。

次回でメルディアナ編が終わります。

ネギ少年の最終課題が麻帆良で先生じゃないという、原作の根幹を揺るがすストーリー展開に誘惑されつつ、ちゃんとした物語を描いていきたいと思えます。

第十二話：課題と約束と（前書き）

メルディアナ編の締めの話です。

やっとここまでという思いでいっぱいです。

相変わらずのんびりほのほの路線が続いています。

更に今回は砂糖増量となっております。

では物語の続きをご覧ください。

第十二話：課題と約束と

「卒業証書授与。」

この七年間よくがんばってきた。だが、これからの修行が本番だ。気を抜くでないぞ」

厳粛な雰囲気の中に校長先生の力強い声が響いている。

メルディアナ魔法学校で迎える人生初の卒業式。

考えてみれば、義務教育期間である小中学校ですら俺はまともに通っていなかったのだから、今生の人生は特殊過ぎるにも程がある。

このメルディアナ魔法学校の式典を行う大ホールは何度見ても素晴らしい。

特に朝の陽光が正面や左右のステンドグラスから差し込み、彫像やレリーフが照らされる様は神聖的で、ここに立つだけで自分の心身が浄化されているような気持ちになる。

「ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

大切な弟分の名前が呼ばれ、周りの雰囲気に浮つき気味の意識を戻し彼の様子に目を向ける。

少々気負い気味の返事と緊張でぎこちない動きが微笑ましくて忍び笑いがこぼれる。

そんな俺を一瞥してちょっとムツとした顔をするネギ君に、目配せをして謝意を伝える。

ネギ君はそれに笑みを返して壇上へと続く階段を登っていく。今日の為に卸した深緑色のマント型のローブが翻り、ローブとお揃いの色のとんがり帽子が背中で揺れる。

「(まんまハロウィンのコスプレみたいだな)」

内心でそういう風に称しつつ、自分の格好も似たようなものと苦笑する。

三年前に仕立てたスーツは、成長に伴ってサイズが合わなくなってしまった。

数回しか着ていないので仕立て直したのだが、これはもう世間の流行から遅れているのだろう。

そのスーツの上にネギ君と同じ形の濃いグレーのローブを羽織っている。

ネギ君と一緒に仕立てたローブだが、流石にとんがり帽子は勘弁してもらった。一度試着した時に被ってみたのだが、ネギ君やアーニヤちゃんには似合わないと言われ、ネカネさんまで口元を隠して笑いを堪えていた。
もう一生被らん。

ネギ君が壇上から降りると同時にアーニヤちゃんの名前が呼ばれる。

幼いながらも凜とした返事だが、ネギ君以上に緊張気味で動きが固

い。
普段は勝ち気なのにこういったシチュエーションは意外と苦手らしい。
黒いローブを纏って小さな魔女さんといった姿と相まってこれまた微笑ましい。

メルディアナでの卒業証書授与の順序は成績順となっている。つまりネギ君が主席でアーニヤちゃんが次席ということだ。幼なじみコンビでワンツーフイニッシュとは全く恐れ入る。壇上から降りる際に見せたアーニヤちゃんの嬉しそうな笑顔を出来ればカメラに収めておきたかったが、残念ながらここではそんな真似は許されまい。
今はまだ石となっている彼女の両親に、是非とも見せてあげたい瞬間だったのだけでも。

他にも一緒に卒業する三名の少年少女の名前が呼ばれる。みんなネギ君達とさほど背丈が変わらないので、すすすす育って身長が170cm台になった俺は場違いな程浮いている。
小学生の中に高校生が混じっていれば、それも仕方ないのだろうけれども。
来賓席のネカネさんが羨ましい。

「レン・アキヤマ君！」

「ハ、ハイ！」

いつものように思考に埋没をしていたせいで、名前を呼ばれた瞬間焦ってどもってしまった。

周りからのクスクスした笑いに顔が赤くなる。
壇上に登る際にネギ君とアーニヤちゃんの前を横切るが、二人の笑い顔と呆れ顔は見ていない振りをする。
絶対後でからかわれるだろう。

長い髭に隠れた口元に器用に笑みを浮かべた校長先生から証書を受け取る。

「卒業おめでとう、レン。」

有意義な留学になったようでありよりじゃ。

お前は物事を少々重く考えがちな気があるからの。

もう少し肩の力を抜くことが人生を楽しむコツじゃぞ?」

「有り難う御座います。でもこれが私の性分なので」

「お前もネギもちょっとはガキらしくすればいいのにな」

「性のない奴らじゃわい」と息を一つついて深い笑みをより深い皺が刻まれた顔に浮かべる。

壇上から降りながら結局聞くことが出来なかった疑問を、緊張で渴いた喉を潤すついでの唾液と共に飲み込む。

「(校長にしる麻帆良の学園長にしる、あの長い髭は何を使って洗っているんだらうな・・・)」

およそこの場の雰囲気にはそぐわない疑問を永遠に封印することを誓いつつ、式の進行の声に意識を向けるべく思考を切り替えた。

sideネギ

「じ、校長！」

『先生』ってどーゆーことですか!？」

「ほう……」

『先生』か……」

ネカネお姉ちゃんの慌てた声を聞きながら僕は原因となった出来事を思い出していた。

卒業式が終わってからレン兄さんをかいかいながら、ネカネお姉ちゃんとアーニヤと四人で歩いていただけ……アーニヤの最終課題がロンドンで占い師をやることだっけ話を聞いていたら、丁度僕の最終課題が卒業証書に浮かんできた。

『A TEACHER IN JAPAN』

僕も一瞬なんのことだか分からなくなっただけで、一拍置いたあとにネカネお姉ちゃんとかとアーニヤと一緒に三人で街中に響いたんじゃないかってくらいの驚きの声をあげちゃったよ。

レン兄さんは何だか考え込むような顔をしていたけど、そんなに驚いてなかったなあ。

それはともかくとして、僕以上に騒ぎたてる二人に口を挟む隙がなくてオロオロしていたんだけど、静かだったレン兄さんがフラフラしながら廊下の柱に手をつけている姿が目に入った。

『有り得ない・・・こんな馬鹿なこと有り得ない』ってブツブツ呟くレン兄さんから目を落として下を見ると、レン兄さんのものらしい卒業証書が僕の足元に滑り落ちてきた。拾って中身を確かめてみたら、どこかで見た内容が証書に浮き上がってた。

『A TEACHER IN JAPAN』

啞然として思わず僕の証書と何度も見比べちゃったよ。

僕とレン兄さんのただならぬ様子に気付いた二人も騒ぐのを止めて同じように証書を覗き込んだ。

そのあと、また大きな声が学校内に響いてた。

・・・で、今に至る訳なんだけど・・・

僕とレン兄さんの卒業証書を掴んで、ネカネお姉ちゃんとアーニヤがおじいちゃんにもものスゴい勢いで詰め寄ってる最中で・・・

「何かのマチガイではないのですか！？十歳で先生など無理です！アキヤマさんだって私生活はだらしなくて寝坊とかするし！時々人の話を聞いていないこともあるし・・・」

「そうよ！

ネギったら、ただでさえチビでボケで・・・！

アキヤマも未だに英語の発音怪しいし、変な独り言するし・・・！」

二人がおじいちゃんにまくし立ててるから、僕とレン兄さんは後ろで困惑しながら黙っているしかない。

とりあえずアーニヤの僕への言葉はヒドいと思う。

レン兄さんに対しては駄目な理由が二人とも具体的だし。

僕の左側に立つレン兄さんを見上げたら口元が引きつっていた。

「なんと、二人して同じ課題とは珍しいのう。

しかし卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためには、がんばって修行してくるしかないのう」

お姉ちゃん達の容赦のない心配する理由はまだ続いていたけど、おじいちゃんは飄々とした表情も変えずその言葉を遮る。

確かに卒業証書に現れた課題は絶対に変えられない。

魔法の精霊様との契約だっという話らしいから。この修行の課題の伝承はずっと昔からあるけど、いつ始まって、どのように決まっているのかの、詳しい経緯はあまり知らされていない。精霊様の気紛れって言ったらそれまでんだけど、『ドラゴンを手懐ける』って課題が出た人が昔いて、修行を終えるのに何年もかかったって話も聞いたことがある。それに比べたらまだ良かった・・・のかなあ？

「ああっ・・・」

「あ、お姉ちゃん!!」

ネカネお姉ちゃんがクラツと倒れ込んだ。レン兄さんが抱きかかえたお陰で頭をぶついたりはずせずに済んだだけだ。

「大丈夫。心配し過ぎで立ち眩みを起こしただけみたい。直に目を覚ますと思うよ」

レン兄さんの言葉に安心してホッと息をつく。レン兄さんの服を掴んでお姉ちゃんはウンウン唸ってる。僕としてはネカネお姉ちゃんのことも十分心配だよ。

「ふむ・・・」

安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。

レンも古巣に戻るのだからそんなに心配はいらんじやる。
ま、二人ともがんばりなさい」

おじいちゃんが片目を瞑り悪戯っぽく笑いながら言う。

まだ不安はあるし先生をする自信なんて全然ないけど・・・それで
も立派な魔法使いになるにはやるしかないんだ。

僕の目標はずっとずっと先にある。

だからどんなに大変でも今は前に進んでいく。

手をギュツと握り締め、唇にぐつと力を入れて誓う。

「ハイ！わかりました！」

頑張ろう。アーニヤヤレン兄さんと一緒に。

いつかお父さんにまた会える日を迎えるために。

「ぶつちやけ有り得ない・・・」

レン兄さんがネカネお姉ちゃんを休ませながらまだブツブツ言っ
ていた。

締まらないなあ・・・

「やあレン君卒業おめでとう！

卒業課題がネギ君と一緒に嬉しいね？

なかなか変わった課題だけど頑張ってくるんだよ！」

「ありがとうございます……」

代わる代わる挨拶や激励の言葉を先生方から賜るが、今日だけは外面を取り繕う余裕もなく力無く言葉を返すしか出来ない。毎年恒例の卒業祝いのパーティーを楽しむことも出来ない。

一応ポーズとして皿にサラダを取ってあるが、どうにも食指が動かず、フォークでミニトマトを苛めながら嘆息する。

「……有り得ない。『先生』なんて本当に有り得ない」

今日何度目になるのか解らない有り得ないを呟き、もう一度溜め息をつく。

自分に与えられる卒業課題について考えてなかった訳ではないのだけれども、こんな図ったかのような展開になるとは想像もしていなかった。

精々、日本に帰って高校に編入しても出来る課題ならいいくらいにしか思っていないかったのに。

「レン兄さん、まだ立ち直っていないかったの？
もういい加減しっかりしてよ。」

お姉ちゃんがそんな姿を見たら心配で寝込んでしょよ」

「ネギ君は受け入れたようだね。」

その順応性が心底羨ましいよ・・・
俺も解ってはいるんだけどね・・・」

「レン兄さんがそんな調子だと僕も不安になっちゃっよ。
同じ課題なんだから一緒に頑張ろう？」

あと君付け禁止」

ミニトマトを皿の上でコロコロ転がしていたら背後から声がかかった。

立派な魔法使いになるという目標を掲げるネギ君は、課題に気負いはしても気後れはしていない。

日本に帰る俺と違って初めての海外渡航になるのだけれど、その目には不安を払拭する程の力強い意思が浮かんでいる。もっとも今は、頼りない兄貴分を見て呆れの色が強いが。

「まあネギの言うとおりだよね。」

いつまでも悩んでいても仕方ない、前向きとまではいなくても、建設的な考え方をしないとね。

さしあたってはネギの準備が必要だ」

「僕の準備？」

小首を傾げるネギ君にジューズをつぎながら答える。

「うん、まずはパスポートの申請にビザの取得。この辺は校長先生や向こうの学園長が上手くやってくれると思うけど、ちゃんとお願いなりなんなりしておかないと。」

日本語の勉強も忘れずにね？

英語も通じない訳ではないだろうけど、こういうのは郷に入っては郷に従えだから、これから毎日勉強しよう。

日本の風習についても幾らか学んでおかないと駄目かな？

修行先の麻帆良学園は大らかな場所だけど覚えておいて損にはならないし。

あと教師の仕事についても調べておかないと。これは俺も一緒だから、明日以降にここの先生方に相談しに行つて助言を頂こう。

ああ、当然最低限の荷物も用意したり整理したりしないといけないね。

向こうでも買えるだろうけど日本の物価は存外洒落にならないし、慣れるまでは肌に馴染んだものがあつた方がいい。

それから他にもまだまだあるから」

「そ、そうだね」

思いつく限りのことを立て板に水の如く、つらつらと並びたてる。ヒクヒクと顔が引きつっていくネギ君が何とも面白い。

大人気ない仕返しをする自分の器の小ささを反省し、ネギ君の頭

を撫でながらいつかののように膝を屈め安心させる為に笑いかける。

「ごめん、ちよつと意地悪だったね。

でもネギ一人じゃなくて俺も一緒だからさ。

二人で頑張っつていこう」

「うん！僕も本当はレン兄さんと一緒に嬉しいんだ！

頑張ろうね！」

お互いの右手をグーの形にして軽く合わせて笑いあう。

俺もネギ君と同じく準備がいる。

少なくとも心の準備は必要だ。

「あんだ達二人を見てるとホントに心配が尽きないわ。

自分の心配をする気もなくなるわよ」

「はは、手厳しいねアーニヤちゃんは」

皿に綺麗に料理を盛り付けたアーニヤちゃんが、ハアと息をついて肩を下げながら寄ってきた。

野菜中心で見た目にも拘った盛り付け方が女の子らしい。

「アーニヤちゃんはロンドンで修行だよな？」

占い師って魔法使いの修行っぽくていいじゃないか。

俺達の出立までにロンドンの下見に一緒に行こうか？

修行場所を見ておくのもきつと役にたつよ」「

「それってアキヤマが観光したいだけでしょ？」

「ガイドブック買ったの知ってるんだからね」とジト目で睨まれる。

それも無きにしも非ずなんだけれども。

「アーニヤちゃん達とは暫く会えなくなるから、楽しい思い出作りがしたいってのが本音かな？」

卒業記念も兼ねて遊びに行くのもいいと思うんだよ」「

「・・・そういうことなら付き合ってあげなくもないけど」

ネギ君の方をちらちらと見ながら俯き加減に言うアーニヤちゃん。実際寂しいのだと思う。ずっと一緒だった幼なじみと離れ離れになるのは俺が想像するより辛いのもかもしれない。ネギ君はただの幼なじみって訳でもなさそうだし。

当のネギ君は「僕もスゴく淋しいよ。日本に行く前にアーニヤと沢山遊んでおきたいな」なんてアーニヤちゃんの顔を覗き込んでいる。

アーニヤちゃん、顔が真っ赤だ。

相変わらず、なんとと言う天然ジゴロっ振り。

いい加減ネギ君は自分のモテオーラを自覚すべきだな。全く羨ましいったらない。

「あの子達つたら、どこにいても騒々しくなっちゃうんだから」

ネギ君とアーニヤちゃん初々しくも微笑ましい光景を眺めているのにネカネさんも加わる。

困ったような笑顔に浮かぶ憂いの色がいつもより濃い。

ネギ君達を心配する以上に淋しさが大きいのだろう。

側でずっと見守ってきた大切な家族との別れが淋しくない訳がない。それでも彼女は笑顔で見送る筈と思う。ネギ君の負担にならないように、行かせたくない気持ちを押し殺して。

全くこの世界の人達は何度俺を尊敬させれば気が済むのだろうか。

「ネカネさん。初めて俺がここに来た時にした約束を覚えていますか？」

「えっと、約束ですか？」

「ええ、約束・・・というか誓いでしょうか？」

ネギ君は大丈夫ですよ。きっと向こうでも沢山の人が彼を守ってくれますから」

最初にネカネさんに誓った思い。

それから自分の行動の責任に果てに誓った思い。

決して違えることのない確かな決意。

この心優しい女性の為に、少しでも安心させられるように、今俺に出来ることをもう一度言葉に乗せて伝える。

「俺もネギ君を見守っていきます。
これからもずっと。ネカネさんが今までしていたことを俺が引き継ぎます」

「アキヤマさん……」

「ああそうだ。ネギ君に手紙を書かせますよ、いっぱい。
彼は忙しくてなかなか送れなくなりそうだから、俺から送るように催促します。ネギ君の元気な姿を沢山見せますよ」

嘘はつかない。誤魔化もしない。適当な言葉ではぐらかさない。
一つ一つの言葉に思いを込める。

「心配しないでとは言いませんし、言えません。
でもネカネさんが離れていても笑っていられるように俺も頑張ります。」

正直、頼りないでしょうけど任せてみてください」

俯き加減になっっているネカネさんの顔は見えない。

三年前と違い、彼女より頭一つ分は高くなった俺の背丈からは、いつもの綺麗なブロンドの髪を眺めるしか出来ない。
それでも笑っていようと思う。

彼女の気持が少しでも安らぐことを信じて。

「アキヤマさんからも……」

「はい？」

「アキヤマさんも手紙ください。」

沢山、沢山くださいね・・・」

ネカネさんはまだ俯いたままだ。

しかし白く細い指が俺のスーツの袖を掴まんで離さない。

小さな声が微かに掠れている。

その触れたら壊れそうな指に優しく手を触れ、新しい約束を交わす。

「勿論、ネカネさんからも手紙を書いてくださいね。楽しみにしています」

「はい・・・沢山書きます。約束です。」

・・・あの・・・」

「はい。なんですか？」

「もう少しだけ・・・こうしていてもいいですか？」

先程より少しだけ力がこもる指を撫でながら言葉は出さずに頷いた。

「あ、の、男、は、ホントに・・・!!
全くもう！あれはなんなのよ!!」

「レン兄さん・・・ネカネお姉ちゃん・・・流石に僕も言葉がでないよ・
」

俺とネカネさんが正気に戻った後のことは聞かないで頂きたい。

・・・聞かないで頂きたいっ!!

先程からキョロキョロと周りを見渡して、落ち着かない様子
のネギ君の手を引いて人波をくぐり抜ける。

厚手のコートの上に大きいリュックを背負っているのに、ちよつと
目を離すと直ぐに気になる物を見に行こうとして、危なっかしくて
手を離せない。

俺のもう片方の手は旅行用のカートを引いているので、ネギ君に
引っ張られると俺までバランスが崩れそうになる。

俺の肩に掛けているネギ君の杖が入ったロングケースが周りの人

に当たりそうになる度に神経が磨り減る。

俺が持つ方がまだ目立たないかと考えて担いでいるのだが、人の目を引くことには変わりなかった。そう考えると、ネギ君があちこち手を引く様子の見られる方が、周りの目が温かい分まだマシなのかもしれない。

「レン兄さん！あれは何？ロンドンの時計台みたいだ！」

「はいはい。あとでいくらでも説明なり案内なりしてあげるから今は急ぐよ。」

電車の時間に遅れたら大変だ。

ネギも着任初日に遅刻はしたくないだろう？」

気の漫ろなネギ君が転ばないように注意しながら手を引っ張り、少しだけ足を速める。

駅講内に入ると丁度アナウンスが流れてきた。

『五番線に麻帆良学園行き特急電車が入ります。危険ですので白線の後ろまでお下がりください』

「不味い！？ネギ、電車が来た！
乗り遅れたら遅刻だぞ！」

「えええつ！？」

それは困るよっ！

レン兄さん早く急ごうー！！」

カートを抱え階段を走り降りる。
ぶつかりかける人達に謝りつつ、ネギ君とお互いに慌ただしく駆け
ながら。

俺は三年振りに帰ってきた麻帆良の街を目指した。

第十二話：課題と約束と（後書き）

まず暫くは登場しないであろう彼女へ出来る限りの贈り物という感じですが。

可愛らしく描けていればいいのですが。お互いに無自覚とはいうのは何とも恐ろしいものですね。

主人公の麻帆良での立場は散々悩んだ結果、一番ベタな展開にしました。

子供先生（確定）との絡みを考えたら、これが一番無難かと思いついて。

大した実績のない主人公にはこれが精一杯とも言えます。

次回から原作開始時期と重なります。順調に投稿出来ればいいのですが、少し間隔が開いていくかと思えます。流石に年末進行で流石に時間がなくなりそうなんで・・・

前回は書きましたが、断章毎に短い番外編を挟んでいこうと企んでいます。

早く書けたら明日までには。

では次回もまたお付き合い下さい。

番外編：アーニャンライフ（前書き）

番外編は短くて済むし、気負わずにスラスラ書けるから楽です。

とまあ何かあっさり出来たので連続投稿致します。
タイトルに偽り有りな内容ですが。

小説もどきを書いてることを彼女に言って、実際に読ませたら「おじさんとかお爺さんばかり書いて楽しいの？」とバツサリ切り捨てられました。

ああ、楽しいさ！

番外編：アーニャンライフ

sideアーニャ

『・・・とまあ、そんな感じで、着任早々から話題にこと欠かない一日でした。』

でも周りは優しく楽しい人達ばかりで、ネギ君も戸惑いながらも楽しんでるみたいです。

どちらかというとなんの方がメルディアナの生活に慣れてしまったせいか困惑することが多いくらいですね。

慣れ親しんだ箸の日本料理より、ネカネさんの料理の方が懐かしいです。

本当はネギ君と一緒に写りたかったんですが、早速生徒達にあちこち連れて行かれて、残念ながら今回は無理でした。

彼の人気者な様子が分かるというものでしょう？

・・・何だか手紙というより報告書みたいになってしまいましたね。今度送る時はもう少し手紙らしくなるように頑張ります。

その時はネギ君も一緒にね。

まだ寒い日が続いているでしょうから、風邪など引いたりしないように、ネカネさんもお身体に気をつけてください。

・・・と、いけない。忘れてしまったところでした。

日本に来た時にネギ君と撮った写真を同封しておいたので、アーニャちゃんと一緒にご覧になって下さい。

ではまた。失礼致します。』

「フフツ、ネギだったらとっても楽しそうね。アキヤマさんと一緒に回れて楽しかったのかしら」

ネカネお姉ちゃんが幸せそうに手紙のアキヤマに微笑み返してる。同封してある写真には、ネギとアキヤマの二人が大きな木の前でピースしていたり、学校の前らしき場所でタカミチさんと一緒に映っているものもある。
とりあえず・・・

「元気そう・・・っていうか相変わらず呑気そうな顔してるわね、二人とも・・・
なんだか心配して損したわ」

「あら？やっぱりアーニヤも心配だったのね」

「べべべ別に、心配してた訳じゃないもんっ！
た、ただ、ネギはボケボケだから、失敗してるんじゃないかって思ってたただけだもんっ！」

「もう、アーニヤったら。でもこの様子なら大丈夫そうね」

そう言っつてネカネお姉ちゃんはまた手紙へと目を向ける。アキヤマが手紙を出すっつて言っつたのは知ってるけど、日本に着いて早速送っつてくるとは想像しなかつたわね。

ネカネお姉ちゃんもびっくりしてたけど、それ以上に嬉しそうだったけどね。

アキヤマねえ・・・正直、イマイチ掴みどころのないヤツなのよね

え。

初対面の時は真面目で礼儀正しいかと思ったら、時々ボケツとしたり、魔法そっちのけで体術の訓練ばかりしたり。

やたらと気配りが出来ると思ったら、変なところで抜けてたり。

すっかりしてるように見えて、家事が出来なくてネカネお姉ちゃんのお世話になったり。

・まるつきりネギがそのまま大きくなったヤツね、アキヤマって見かけは全然違うのに中身がそっくりって感じだわ。

頼りがいがあるんだかないんだかってところも似てるし、何かに集中してたら周りが見えないところも同じだし、あとは・・・

「ねえアーニヤ。

私もアキヤマさんにお手紙を返信しようと思うんだけど、一回おフロに入って綺麗にした方がいいかしら？

お洋服もこのままで変じゃないかしら？ねえアーニヤはどう思う？」

「どこの世界にいちいち身を清める作業が必要な手紙があるのよ！」

これよ！この妙に高い女つたらしスキルが一番そっくりなのよ！

「そうかしら？」なんて鏡台の前で百面相してる人は、本当にネカネお姉ちゃんなの！？」

アイツらって女の子が絡むと急に格好良さが増すのよ！

普段だつてそれなりに見られるのにパワーアップよ！？」

更には、単体でも評価が高いのに、二人だと相乗効果がワケ分かんないくらい高まるんだから始末に負えないわ。

バレンタインデーに年齢とか関係なく女性全員にお花や二人で焼

いたクツキーを配ったりしてた時は、思わず焼き殺してやるうかと
思ってたわよ！

・まあ私とネカネお姉ちゃんだけ特別にプレゼントを貰えたから
いいけど。

と、も、か、く！あんな天然女だったらし共を見知らぬところに放
つておいたらどんなトラブルを引き起こすか分かんないのよっ！
ああと、その、それが心配なんじゃなくて・・そう！それで巻き
込まれる周りの女の子が大変だから心配なのよっ！

「うーん、一人で写るのも何だか恥ずかしいわ・・
そうだ！アーニヤも一緒に手紙を送らない？」

「へ？わわ、私はいいのよ！アキヤマへの手紙ならネカネお姉ちゃ
んだけで十分でしょ！」

「・・でも一人だとちよつと恥ずかしくて・・
ねえ、お願いアーニヤ？」

だあかあらあっ！私の知ってるネカネお姉ちゃんはどこへ行つた
のよっ！

私の知ってるネカネお姉ちゃんは、うつすらと頬を染めながらちよ
つと上目使い気味になったり、胸の前で両手の人差し指をツンツン
と合わせたり、あまつさえ「本当にダメ？」なんて覗き込むように
見つめたりなんかしないわよ！

本当に何をしてくれてんのかなアイツ！

「そうだ！きつと手紙はネギも読むはずだもの。
アーニヤと一緒にの方がネギも喜ぶわ！」

「ななな、何で私が一緒だとネギが喜ぶっていうことになるのっ！
？」

「だって大切な幼なじみじゃない？
うん！決まりね！」

「じゃあ、アーニヤも一緒にお洋服を選びましょう。
可愛い格好でネギをびっくりさせないとね」

「何で私の場合はネギ限定なのよー！」

ネカネお姉ちゃんの力とは思えない勢いで手を引かれて、私は部屋を後にすることになった。

こんなことならロンドンに行く日を、来週じゃなくて昨日にするべきだった。

「（ううっ、なんで私がこんな恥ずかしい思いをしなきゃなんないのよー！」

これは絶対にアキヤマと、ついでにネギのせいよ！）」

ギュツと握り締めた拳が怒りと共に熱を帯びる。

ここにネギがないことを改めて残念に思うわ。

理不尽？知らないわよそんなの。もう決めたんだから。

「あの二人！今度会ったら絶対黒こげになるまで殴ってやるんだからーっ！！！」

この誓いを胸に、私はロンドンへと旅立つことになる。

鬱憤を晴らすために質の悪いチンピラを3、4人程ぶっ飛ばしたら、占い師としてよりも先に名前が売れたのはまた別の話だったりする。

番外編：アーニャンライフ（後書き）

まだネカネお姉ちゃんのターンは終わってなかったぜ！
って感じの番外編でした。

・ちよつとやりすぎた感が否めない。端から見ればあからさまな
んですけど、ネカネさんも自分の気持ちや感情には疎い設定です。
気付かずに終わるか・・・？

いろんな意味で「アーニヤの受難」といった話に仕上がりました。

アーニヤは基本的には正ヒロインっぽい立ち位置なのに、原作で
は出番が遅くて准ヒロインにもかなわないのが可哀想だなあと思っ
たり。とりあえずツンツンさせるのが難しく、この作品ではち
よつと甘めになってしまいました。
上手く使ってあげたいのですが・・・

次回からは予定通り、麻帆良リターンズ・原作開始編に入ります。

早ければ明日には・・・遅くとも週末迄には・・・

第十三話：中途半端な新任教師（前書き）

お待たせ致しました。

今回から原作の第一巻の物語に入っていきます。

少々長くなりましたがこれでもまだ話の途中という有り様。展開が遅くて申し訳ありません。

それでは原作開始編を御覧下さい。

第十三話：中途半端な新任教師

西洋形式の建物が並ぶ街並みの中を大勢の人間が走り抜けていく。その人数も異常なのだが、その大勢の人間を構成するのが殆ど学生というのもこの都市の特徴だと言えるだろう。

三年前の記憶と比較しても全く変わりない街並みと学生達の姿に懐かしさを感じながら俺達もひた走る。

地鳴りのような学生達の足音に混ざって聞こえる声は皆一様に「遅刻」「急げ」の大合唱。

「スゴイ人だね、レン兄さん！これが日本の学校なの？」

「ここは特別！

こんな街は日本でも世界でも数えるくらいしかないよ！

それより俺達も急ぐよ！」

初めて見る圧倒的な人の数に驚愕しているネギ君と併走しながら、きちんと訂正をしておく。

日本の学校が全部これなら、社会問題は少子化でなく人口過多による経済の逼迫だろう。

俺としては逼迫しているのは置かれている現状なのだけでも。

「やっぱり電車に一本乗り遅れたのは痛かったよね」

「ネギがあちこちふらふらしなければ間に合ってたと思うのだけだね」

「そ、それは言わない約束だよっ！」

「いつ交わしたんだよ、そんな約束」

まだお互い子供だけれど、一応教師になるのだから早めに学校に行こうと出発した迄は良かったのだけれども、好奇心に全面的降伏を果たしたネギ君のおかげで電車に乗り遅れ、学生と同じ時間に初出勤しかも遅刻寸前という危機的状況に陥ってしまった。

流石に罰の悪そうな顔をしているネギ君だが、荷物を抱えてずつと走り通しの割には疲労の色は見えない。

魔法で身体を強化しているとはいえ大したものだと思う。

強化はしていないが基本的な身体能力が異常な俺に遅れずについて来ているのだから尚更だ。

そんな子供がスイスイと人波を走り抜けていけば悪目立ちしそうなものなのだけれど。

周りは遅刻回避に必死なのと、こと麻帆良にとっては驚異的な運動能力など見慣れたものなので、必要以上に騒がれたりはしない。

この状況で一般人に偽装していたら遅刻確定なので、今に限れば麻帆良学園の特異性に諸手をあげて喝采したい。

腕時計に目を落とすと始業まであと五分と言ったところ。始業開始までには間に合いそうだ。

勿論、教師としては駄目だろうが。

「正直もつすでにアウトだけど、始業には間に合いそうだよネ・・・ギ・・・?」

腕時計から顔をあげて声をかけるが、右隣を走っていたはずのネギ君がいなくなっていた。

「この状況ではくれるとは・・やってくれるじゃないかネギ君」

自分でも顔が引きつっているのが分かる。初日に遅刻とおまけに迷子でアウトがもう一つ追加されそうだ。

あと一つアウトでチェンジだ。

新任教師の枠が違う人に変えられるかもしれない。

馬鹿なことを考えていないでネギ君を探す。

しかしこの人数の中で、あの小柄な姿を見つけ出すのは困難だ。闇雲に探しても絶対に見つからないし、すれ違いになっても困る。滅多なことはないと思うが、事故に巻き込まれたりしたらネカネさんに会わせる顔がない。

とりあえず大声で呼び掛けてみようと思いを吸い込み・・・

「何だと、こんガキヤーっ!!」

通りに響いた悲壮めいた怒鳴り声に驚き激しくむせた。

「取・り・消・しなさいよ」

声が聞こえた方向へ進むと、涙目の美少女が美少年の頭を片手で掴んで持ち上げているという場面に出会った。

その腕力はすごいんだけど、何ともシユールな光景だ。

「あわあわ」言っただけでも涙目のネギ君を放っておく訳にもいかず、おそらくやってくるであろう言葉の爆撃を覚悟して声をかける。

「えつと、その君達。その子は俺の連れなんだけど、返して貰えないかな？」

「何よアンタ、この失礼なガキの保護者なの!？」

「おにーさんはこの坊やの兄弟なん？」

あんまり似てへんけど?」

ギロリという擬音が付きそうな目で睨みつけてくる明るいオレンジ系の髪的美少女と、大和撫子といった風貌のぼやっとした黒髪の美少女が同時に振り向く。オレンジの髪の少女・おそらく神楽坂嬢だろうがこちらに気を取られた隙に、バタバタと暴れて拘束を抜

け出しネギ君が抱きついてきた。

「レン兄さん！」

ねえ、僕の頭割れてないかなあ！？

掴まってた時、ミシミシって音が聞こえたんだよー！」

「それは怖いな・・大丈夫、割れてはいないよ。

それはともかくとして、どうしてこんなことになったのか事情が知りたいのだけれど」

「ともかくで済ませないでよ」と言うネギ君を宥めながら少女達に向き直る。原因の大方の予想はつくけれども。

未だに怒り心頭状態の神楽坂嬢が指をゴキゴキ鳴らしながら近づいてくる。

とりあえず女の子が鳴らす音ではない。

「そこのガキが私にむかってイキナリ、しっ、しっ、しっ・・しっ
れ・・」

「アスナ、あ、その娘のことな。そのアスナにキツツイ失恋の相が出とるって言うたんよ」

「このかーっ！！」

口に出すのも忌まわしいとばかりの神楽坂嬢・・もう明日菜ちゃんでもいいか、その明日菜ちゃんが言い殴んでいるのを遮って、あ

さり告げる木乃香ちゃん。なかなかいい性格をしている。

まあ予想通りというか筋道通りというか。

俺に顔を引っ付けて抱きついたままのネギ君をクルツと回転させて、明日菜ちゃんへと向かい合わせる。

キョトンとした顔で俺を見上げるネギ君の肩に手を置いて前に押す。

「ネギ。明日菜ちゃんに謝りなさい」

「ええーっ！なんでレン兄さん！？」

「ええーじゃない。女の子に、いや女の子じゃなくてもだけど、知らない人にいきなり失礼なことを言われたら誰だって不快になるよ。俺も一緒に謝るからさ」

「でも本当のことなんだよ？」

「本当言っつなー！」

「例え本当のことでも言っつてはいけないこともあるんだよ」

「アンタも黙れえーっ！」

「うん・・・わかったよレン兄さん。」

ゴメンナサイ、えっと、アスナさん・・・本当のことを無神経に言ったりして」

「コラっ！っと、ネギが失礼なことを言っつて申し訳ない。」

「どうか許してもらえないだろうか」

「許すと思ってるのか、アンタらー！」

怒りのあまり明日菜ちゃんの顔が真っ赤になり、鮮やかなオレンジのツインテールが身体の動きに合わせてブンブン揺れ動く。

木乃香ちゃんは俺達のやり取りを見て、楽しそうに笑っている。

明日菜ちゃんの緑と青の瞳に涙が滲んでいるのを見ると罪悪感がとめどなく溢れてくる。

ネギ君と顔を見合わせ、もう一度頭を下げる。

「本当にゴメンナサイ、アスナさん。

嫌な思いをさせるつもりはなかったんです」

「配慮が至らず、不快な思いを重ねてしまい本当に申し訳ない。

心からお詫びする」

「っ！もういいわよっ！

まだ納得はいかないけど、こんなところで子供と年上の男の人に謝らせてるのも気分が悪いし。

だからもう頭を上げてよ！」

許しの声を得て頭を上げる。

明日菜ちゃんはそっぽを向いて、気まずさを誤魔化すように頬を掻いている。

口元がへの字になっていて不満気ではあるけれど、ちゃんと謝っている相手を執拗に責め立てようとはしない。

なんだかんだ言ってもやっぱり優しい娘だと思う。

ネギ君も許してもらえたことに安堵の息をつく。
その頭を木乃香ちゃんが「よかったなー坊や」と優しく撫でながら、何かを思い出して俺とネギ君を交互に見やる。

「そーいや、坊やおにーさんは何でこんなところにおるん？こっから女子校エリアやよ？」

「そう言えばそうよね。見た感じ旅行者みたいだけど、さっさと出て行かないと不審者扱いでとっ捕まるわよ」

「ああ、実は俺達はきょ・・・」

「いやー、いいんだよアスナ君！」

彼女達のもつともな疑問に答えようとしたところに真上から声がかかった。

途中で言葉を切られたことへの不満を込めて、少し睨み気味に声の主、高畑先生を見上げる。

おそらくは俺達のやり取りを最初から見ていたのだろう。片手を挙げて朗らかに挨拶を返すが、口元が愉快そうに笑みの形をしている。

「お久しぶり。ネギ君、秋山君。

おっと、これからは呼び方を変えないといけないね？
麻帆良学園へようこそ。

『ネギ先生』、『秋山先生』

「久しぶり、タカミチー！」

「お久しぶりです、高畑先生。」

あと見ていたのならもう少し早く声をかけて下さいよ」

俺達と高畑先生の様子を見ていた明日菜ちゃんは、「た、高畑先生！？知り合い！？先生！？」と立て続けに起きた出来事と入ってきた情報の処理が追いつかず混乱している。

木乃香ちゃんも流石に予想の範疇を超えた内容に困惑気味である。

ネギ君がコホンと咳払いをして佇まいを直す。

俺もそれに習い、手荷物を置いてスーツの襟元を整え、ネギ君の隣り並ぶ。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

「同じく、この学園で教鞭を取ることになる、秋山蓮です」

先程の謝罪時と同じように、二人揃ってぺこりと頭を下げた。

明日菜ちゃんの驚愕の音が頭上を通り過ぎていくのを聞きつつ、彼女は今日だけであと何回驚くことになるのだろうかと余計な心配をする俺であった。

「修行のために日本で学校の先生を・・・そりゃ大変な課題をもちろ
たのー」

いつかのように「フオフオ」と笑いながら髭をさする学園長。

懐かしい人物の懐かしい所作から、あの頃の自分が蘇り・・・穴を掘
って叫びたくなった俺がいる。

改めて思い返すと昔の自分は色々と酷い。今も決して良いとは言
えやしないのだけれど。

鬱屈としながら過ごし、自分の狭い見で世間を判断し、自己満足
の為に暴走して失敗し、癩癩起こして色々な人に迷惑をかけた挙げ
句に海外逃亡。

黒歴史以外の何物でもない。

過去の自分に嘆息しつつ、横目で学園長に詰め寄る明日菜ちゃん
を見る。

原作と異なり彼女は制服のままだ。

ネギ君のくしゃみによる魔法の暴発は起こらず、彼女の女の子と
しての尊厳は守られた。

俺自身、思うところはあるけれど、これはこれで良かったのだと割
り切った。

・・・だけれども。

結局ネギ君の2-Aの担任就任という流れは変わらず、それに納
得がいかない明日菜ちゃんと、文句をいわれっ放しのネギ君との間

に一悶着があり。

最終的には高畑先生を抜かした4人で連れ立って、学園長に直談判しに行くという原作の流れに添う結果と相成ったのである。

「修行」という言葉を不思議がる女の子二人を置いて話は続けられる。

「まずは教育実習とゆーことになるかのう。今日から3月までじゃ・
・

ところで金髪趣味の秋山君はともかく、ネギ君には彼女はおるのか？どーじゃな？うちの木乃香なぞ？」

「ややわ、じいちゃん」

「わざわざ過去の私の失態を呼び起こさないでください」

木乃香ちゃんの鈍器によるツツコミを頭部にもらい、ちよつと笑えない量の出血をする学園長。

まあ、意地の悪いからかい方をしたのだから多少の罰は受けて頂きたい。

ついでに言えば、メルディアナでの俺の様子をどのように伝えたのか高畑先生に問い詰めたくもなつた。

「ちよつと待つてくださいってば！

だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！
しかもうちの担任だなんて・・・！」

「むっっ・・・」

適当に絆創膏を貼って止血する学園長に明日菜ちゃんが再度詰め寄る。

彼女の言葉にネギ君は頬を膨らまして不服の意を示す。

学園長は明日菜ちゃんの言葉を意に返さず、飄々として更に続けるが。

「そして秋山君はネギ君のクラスの副担に・・・」

「ちょっと待って頂けますか、学園長」

「フオ？何じゃね、秋山君？」

その学園長の言葉を遮って止める。

帰国前から知らされていた2ーAの副担任就任だが、今後のことを考えるとあまりよろしくない。

どうにかして回避して妥協点を模索しなければならない。

「私達の実習を受け入れて下さったことを感謝していますし、学園長の方針に口出しすることも僭越な真似だと自覚もしています。

しかし、私とネギが一緒のクラスに入るのは些か問題があると考えます」

「ほう？なにが問題かの？」

「はい。まず一つ。私もネギも教職に就くことが初めてであり、全く経験がありません。

そのような人間が一つのクラスの担任と副担任になるのは、生徒の学業面でマイナスとなり得ます。また多感な時期である生徒にとつて、不慣れな教育実習生しかない状態は、要らぬ不安やストレスを与える恐れもあります」

「ふむ・・・続けてくれ」

眉に隠れた学園長の目が強さを増す。それに小さく頷いて続ける。

「二つめですが、先程申し上げたように多感な時期、しかも女生徒となれば男性に対して心理的な壁を持ちやすくなります。

これが年齢に差があればまだ教師と生徒と割り切ることが出来るでしょう。

ネギの場合は少々変わったケースですが年下の子供という点では、女生徒が警戒する恐れは低くなると考えます。

まあ、最初は子供扱いされて苦労するでしょうけど、先生として信頼、信用されるのも含めての実習ですから、そこはネギ次第です。子供が先生をすることを問題視されてもそれこそ今更ですけれども。

しかし私の場合だとその辺りの事情が少し問題になると考えます。彼女達より年上といっても本来なら高校生くらいの年齢ではない私は、ネギとは違う意味で彼女達と接するには若すぎます。

心理的な警戒や不信任はネギ以上になるでしょう。

先に述べた学業面の他、学校での生活にも影響を与えかねません。本来生徒達の為にあるべき学校で私のせいで苦痛や不便さを与えてはいけないと思考いたします」

「しかしそれはネギ君もお主も同じでないかの。先生となる以上、年齢や性別がどうか一々問題にあげていては何もできやせんわい。」

言葉を借りれば、それはお主の腕次第じゃろう?」

「勿論です。極端に言えばこれはただの我が儘や言い訳、好き嫌いです。」

教職に就く者の言葉ではないでしょう。しかし、私とネギのどちらもまだ実習生だからこそ言える言葉です。

どちらか一方ならばまだしも、二人同時に一つのクラスに就任させるのはリスクが高いということはご理解頂けましたでしょうか?」

ここまで一気に話して一旦句切る。

正直、屁理屈ばかり並べて学園長にいちやもんをつけているのだから、心情的には申し訳無さや心苦しさでいっぱいだ。ふうと息をついたところで、袖をクイクイと引かれた。

目を向けると、ネギ君が不安そうに俺を見上げていた。

「レン兄さんは僕と一緒に先生をするの嫌なの?」

僕が先生をするのは間違ってるの?」

うつすらと涙を浮かべるネギ君の頭を撫でて笑いかける。

「ネギと一緒にいるのが嫌なもんか。」

俺だってネギと一緒にの方が安心するし助かるよ。

でもね。それだとお互いに甘えてしまうだろ?」

助けられることが当たり前になったら、自分の力で頑張る前から誰かを頼ってしまうようになる。
お互いに協力もするし手伝うのもいいけど、自分でやれることはやらないとね」

「僕はレン兄さんの力になってるの？本当に？」

まだ不安げな顔をしているネギ君の目元をハンカチで拭きながら頷く。

「当たり前だよ。」

今までだつて沢山ネギに助けてもらつたんだから。

それに俺はネギが先生をしちゃいけないなんて思つてなんかいないよ。

ただ、ネギや俺の年齢で先生になるのは特殊なことだから、俺達も生徒達や周りのみんなも大変だつてことを忘れてはいけないよ。それに約束しただろう？『一緒に頑張ろう』って。困つたらことがあつたらちゃんと協力するし、いつだつて相談にのるよ。

俺だつてネギに協力を頼むことがあるだろうしね」

ネギ君が笑つて頷いたのを見てから学園長に向き直す。

「今のネギに話したことが三つめの理由ですね。
如何でしょうか、学園長？」

「かぁーっ！！」

「つたく、ようもまあそんだけ並べ立てたもんじゃわい！」

「おまけに今のネギ君とのやりとりのあとで『でも却下じゃ』なんて言ったら、アスナちゃんや木乃香になんて言われるかわからんわい！」

「ほんまやねー」。

「そんなこと言うたらじいちゃん空気読めへんにもほどがあるわ。にしても仲ええ兄弟やね二人とも」

「いや確か兄弟じゃないんでしょ？」

「っーか、ここであの子が担任になるのを反対したら、私まで空気が読めない人になっちゃうじゃないの」

わざわざ大きな音を立てて椅子に座り直して少し不機嫌気味の学園長と、「麗しの兄弟愛やねー」とホンワカと笑う木乃香ちゃん。そして盛大な溜め息をついて若干諦め気味の明日菜ちゃん。三者三様の反応を見せる中、やむなしといった風情で学園長が口を開く。

「しゃーないの」。

21Aにはネギ君だけ入ってもらおう。

「ネギ君が担任になるのは変わらんが、タカミチ君にサポートをしてもらえるように頼むとしよう」。

「・・・それで秋山君。お主はどうしたいんじゃない？どうせ代わりの案も持ってきてるんじゃない？」

「ええ、勿論」。

「幾つか案があるので可能かどうか学園長が判断して下さい。まず」

つめの案は、男子中等部で教職につくこと。
出来れば一年か二年生で。

多感な時期であることは女生徒と変わりありませんが、同性であればまだ警戒心も低いでしょうし、一応年上の男ですからそれなりに良い距離感をつくりやすいでしょう。

三年生を避けた理由は、受験を控える生徒に余計なストレスを与えたくないからです」

「却下じゃな。中等部というか男子側は教員の空きがない。高等部も一緒じゃ。臨時の教員枠も埋まっとる」

「では二つめの案ですが、初等部で教鞭をとるのはどうでしょうか？
一応、国、算、理、社を教えることは不可能ではありませんが」

「それも却下。」

初等部の担任枠も簡単に替えはきかん。どっちかと言ったら人手は必要なんじゃが、専門科目の先生が必要で。

流石に音楽や技術関係の知識はないじゃろう？
だから却下じゃ。

一応言うとか、大学で臨時の講師なんか無理じゃぞ？
いくらお主が俊英とは言え、大卒レベルの人間が講師なんかしたら教授達から怒られるわい」

見事なまでに付け入る隙がない。

まあ初等部は駄目元で言ったようなものだから仕方ないのだけれど。しかし端っから女子校くらいしか空いていないのは何故だろうか・・
作為的なのか悪意あってなのか。

はたまた所謂ご都合主義のせいなのか。身も蓋もない考えだけれども。

とりあえずこの辺が落としどころなのだろう。
これ見よがしに溜め息一つついてから最後の案を出す。

「では・・・女子中等部の一年か二年生のクラスで担任か副担任は可能でしょうか？」

勿論、ネギとは別のクラスで」

「女子中等部ならば2・Dの担任補佐なら可能かの。
それで良いか？」

「お互いに妥協するのならここまででしようね。
それをお願いいたします。」

いろいろご無理を申しあげてすみませんでした」

「・・・まったくじゃわい。とんだ手間がかかってしもたわ。しかし・
・お主も変わっておるのう。」

普通お主くらいの年齢なら、女子校に勤務なんて夢みたいなものじやろうに。」

他の男子からしたら羨ましい話なんじゃがのう」

「普通であるなら尚更です。男一人で女子に囲まれる生活なんてしんどいだけですよ・・・」

少なくとも私はあまり考えたくはありません。

あと羨ましいと恨めしいは、語感だけじゃなくて、案外中身も似たようなものなんですよ」

こんな生活、事情を知らぬ輩に恨まれるだけ損だ。

生前もそうだったのだが、女性の多い空間では男の立場なんてあつてないようなものなのだ。

角が立たないように立ち回り、吊し上げにあわないようにそつなくこなす。

仕事以上に気を配っていたと思う。
自分の外面を取り繕うスキルや心にもない言葉を並べるスキルが向上する筈だなこれは。

学園長が話はおしまいとばかりに手を叩いて、みんなの目を集める。

ポケーツと俺と学園長のやりとりを眺めていたネギ君や明日菜ちゃん達が慌てて学園長の方を向く。

「ネギ君に秋山君。この修行はおそらく大変じゃぞ。
ダメだったら故郷に帰らねばならん。」

二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな?」

「は、はいっ、やります。やらせてくださいっ!」

「私も全力を尽くして頑張ります。
どうかよろしくお願いします」

学園長の真剣な眼差しと問い掛けに緊張しながら答えるネギ君と俺。

ここまでやって手は抜けない。
やれるだけのことはしなければいけないだろう。

俺達の返事に満足げに頷いてから学園長は相手を崩す。

「うむ、わかった！では今日から早速やってもらおうかの。秋山君は覚えておるかと思うが、指導教員のしずな先生を紹介しよう」

学園長の呼びかけに答え背後の扉が開いて女性が入ってきて・
ネギ君の頭がボフンとその女性の胸元に埋まった。

「あら、ごめんなさい。

貴方がネギ先生ね？よろしくね。

それとお久しぶり秋山君、ああ、今は秋山先生かしら。
大きくなって格好良くなったわね」

「お久しぶりです。源先生もおかわりがないようで何よりです」

眼鏡をかけ、少しウェーブがかかったロングヘアの大人の女性、
しずな先生が微笑みながら挨拶をし、俺達もそれに返す。

男の夢というなら、今のネギ君の状態がそれをいうのではなからう
か。

というかネギ君がどこかに旅立ってしまった。気持ちは解るが帰っ
て来い。

「あー完全に忘れてしまっておったがもう一つ。

このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君と秋山君をお前達の部屋
に泊めてもらえんかの」

「げっ」

「え……」

「んーまあええよ」

「良くないだろう、木乃香ちゃん……」

学園長の道理を通り越して奇天烈とまで言えそうな発言に各々が反応を返す。流石にこれは予想していなかった。とりあえず手近な所から修正しよう。

「あのね、木乃香ちゃん……」

ネギはともかく、一応俺はそれなりに成長している男なんだよ。勿論、倫理的にどうか理性的な行動をとる自信はあるけれど、そんな発言を迂闊にはいけないよ。ていうか絶対したら駄目だ。男は怖いんだよ、何するか分からないだからね？
分かった？分かったら反省して以後は気をつけてね？」

思いの外動揺していたのか、しどろもどろな説得を繰り広げる俺に対し、木乃香ちゃんは面白そうにニコニコと笑みを浮かべる。

「べつにウチかて何も考えんと言ったわけやないよ。

さっきの話聞いとったら、おにーさん真面目そうやし、案外堅物みたいやし、何よりへたれっぽいからな！」

安全度合いで言うたら、その子とおんなじくらいやと思うもん。ちよっと泊めるくらいなら大して問題ないやん」

「いや、問題しかないよ!？」

これ、大問題だらけだからね!？」

この孫といい、その祖父といい、近衛家の思考はアグレッシブにもほどがある。

というか中二女子にへたれ扱いって。

これは何だろうか。男として試されているのだろうか。

これに喜び勇んで飛びつくのが男なら、俺は一生男にはなれまい。

「学園長っ!!」

貴方の孫娘は何だか間違っています!

貴方も大概だが、早期に然るべき教育が必要です!」

「この人の言う通りよ、このか!

あんたちよつと危機感無さ過ぎっ!

この人がへたれなのは私にだって分かるけど、イイ年した男と寝泊まりなんか出来るワケないじゃない!!」

「ちよつ!明日菜ちゃんまでそれを言うのか!？」

「うっさいわね!へたれ!人を馴れ馴れしくちゃん付けすんなっ!」

「今更っ!？」

「なんや二人して言いたい放題やな!」

「秋山君も変わったのう。それともこれが地なののか?」

「僕はどうしたらいいんだろう・・・」

喧々囂々といった俺達のやりとりは、我慢の限界を迎えたしずな先生が一喝するまで続いた。

学園長が呼ぶまですつと外で待機していたと考えれば、彼女なりに思うところがあつたのかもしれない。

とりあえず微笑みながら叱られるというのは存外に怖いものだと学んだ。

教室が並ぶ長い廊下を妙に落ち着かない気持ちで歩く。

通り過ぎる教室の中からは、女の子達の笑い声や話し声が聞こえ、それがより一層気持ちを不安定にさせていく。

この場の雰囲気自分が如何に場違いな空間にいるのかを教えてくれる。

「やっぱり落ち着かない？僕も初めて赴任した時はこの雰囲気に飲まれて戸惑ったもんだよ」

隣りを歩く青年、21Dの担任で俺の指導とサポートを請け負った瀬流彦先生が、人の好きのする笑みを浮かべて俺を気遣ってくれる。

「すみません、ただでさえ無理を言って21Dの担任補佐をするこ
とになったのに、私の指導教員の役目まで・・・」

「あはは。大丈夫、大丈夫、気にしないで。」

僕も最初は驚いたけど秋山君が言ったことも正論だしね。
寧ろこの方が良かったと思うよ。

僕も仕事を手伝って貰えるんだから有り難いくらいだし。

まあ21Dの生徒は割と大人しめだからそんなに手はかからないと
思うけど。

21Aの担任になったネギ君の方が大変かな？

あのクラスは頭一つ飛び抜けてる感じだから」

別れ際に瀬流彦先生は「力を抜いて気楽にしなよ」と言って俺の
肩を叩き自分の仕事へと戻っていった。

瀬流彦先生の後ろ姿にもう一度頭を下げてから校外へと足を進める。

瀬流彦先生の言うように、21Dの生徒達は可もなく不可もなく
と言った感じであり、麻帆良学園の生徒の中ではまだ普通のクラス
と言えそうだ。

あくまでも麻帆良の中でだけでも。

担任補佐として自己紹介した時も、俺の若さに驚きや訝しむ声もあ
ったのだが、概ね好意的な反応が多かったので内心ホッとしている。

俺の場合、急遽就任となったことでネギ君のように初日から授業
とはならず、業務内容の確認や引き継ぎを行い、瀬流彦先生の授業
の見学させてもらうことで一日を終えた。

因みに担任教科は英語である。海外留学の経験を生かすことが出来
そうな科目なので有り難い。

今回は俺自身無茶な交渉をしたと思っっている。

ネギ君を守ると誓ったものの、俺が過度に2-Aに接触しては本来の流れから異なってしまう可能性がある。

ネギ君の仲間や従者が筋書き通りに集まるためには、不確定要素はない方がいいだろう。

今朝の明日菜ちゃん達との接触も果たせたことだし、細部はともかく大まかな流れに沿うことは出来そうだ。

そのせいで迷惑をかけてしまった人達には本当に申し訳ないのだけれども。

胸中をチクチク刺激する申し訳無い思いを抱えながら、街路樹の茂みに隠れるように目的の場所を目指す。

立派な彫像が置かれている台座の前に座っているネギ君の姿を確認し、こちらはネギ君から見えないようにそのまま茂みに潜む。

持っていた名簿に何やら書き加えているネギ君。おそらく明日菜ちゃんへの悪口だろうが。

「（備品に落書きは駄目だろう、ネギ君・・・しかしこれも後々必要になるんだったか？）」

職業倫理に逆らい見てみぬ振りをすると決めたところで、ネギ君が顔を上げてどこかを見ているのに気付く。

視線の先には小柄な少女が重そうに本を抱えて、階段をヨロヨロと降りている姿があった。

柵のない階段の端を歩くことに危なっかしさを感じながらも、彼女の性格や心情から鑑みれば、往來の真ん中を歩くことの方が怖いのだろうと独りごちる。

ネギ君と彼女、のどかちゃんの動向に注視していると、のどかちゃんがフラリと身体を傾けて階段下へと落ちかけていた。

ネギ君は魔法を放つために杖を取り出そうとして・・・って杖を持っていない!?

慌てふためくネギ君から視線を外し、殆ど反射的に茂みから飛び出して、のどかちゃんの元へと駆ける。

「レン兄さん!?!いつの間に!?!」

「話は後で!ネギも走れっ!?!」

俺の声に事態を思い出し弾かれたように駆け出すネギ君。それに一瞥もせず落下するのどかちゃんに向けて右手を翳し魔法を放つ。

「『慈悲に満ちた大地よ、つなぎとめたる手を緩めたまえ・・・レビテト!』」

地面に落ちる直前で、のどかちゃんの身体がフワリと浮いたまま停止する。

重力から切り離された身体が再び落下しないように制御し続ける。その身体を滑り込んできたネギ君が両手で受け止めたことを確認し魔法を解く。際どいタイミングだったが何とか間に合ったことで、ダイビングキャッチで顔を擦りむいたネギ君と二人して安堵の息を吐く。

「アタタタ・・・」

レン兄さん、助かったからいいけど、いつからいたの？
現れるタイミングが良すぎだよ」

「いや、俺もネギを探していたところで偶然出会したんだよ。
ちよつと出来過ぎだけど。」

それより彼女の方は大丈夫？」

「そ、そうだよ！？だ、大丈夫？宮崎さん・・・」

落下時のシヨックで気を失っているのどかちゃんだが、特に外傷
などは見当たらない。

当たり前のように口から出る嘘の言葉に続いて、先程のことを問い
かけようとするが。

「ネギ、何で杖を持っていな・・・」

「あ・・・あんたたち・・・」

口を半開きにしたまま固まるネギ君が見据える先には。

同じように口を半開きにしたまま、ペットボトルの入ったビニール袋を片手に呆然とした表情で固まる少女が立ち尽くしていた。

2月の冷たくて乾燥した風に靡いて揺れる、夕陽のような色の彼

女の髪がやけに目に痛かった。

第十三話：中途半端な新任教師（後書き）

第一巻どころか、第一話の半分くらいしか話が進んでいない現状。これは酷い。

主人公の学園での立場ですが、普通の原作の流れなら脇役どころかモブになってもおかしくありませんね。実に微妙な立ち位置になりました。

瀬流彦先生が2-Dの担任なのは独自設定です。

彼も2-Dも修学旅行にネギ先生と一緒に来ていたので、担任でもあまり違和感はないだろうと試行錯誤した結果です。更なる裏独自設定では、瀬流彦先生は三年前に麻帆良に就任したことにしています。

主人公と丁度入れ違いみたいな感じですね。これならば若手教師としてまだ通じる筈……

ネギ先生の主人公への甘えや細部の変化等がだんだんと物語に影響を与え始めています。

これも一つの歪ませ方なんですけどね。

原作第一話の話は次回までには終わりたいと思います。

・・ちゃんとまとまるかなあ。

第十四話：崩れゆくモノ（前書き）

何だか眠れなかったので、寝落ちするまでと思いながらケータイを弄って書いてたら、いつの間にか次話が完成

なんてこったい。

前回と今回の話はある意味一つなんですけど、内容と雰囲気はガラリと変わっています。

自分っ書いといて「うわぁ・・・」って感じでした。

では原作初日の続きをご覧ください。

第十四話：崩れゆくモノ

『・・・ネギ君と撮った写真を同封しておいたので、アーニヤちゃんと一緒にご覧になって下さい。
ではまた。失礼致します』

手紙に向かって語りかけるといふ、他人には色んな意味で見せられない作業を終えて一息つく。

三年前と変わらない・・・というよりも三年前より更に乱雑になった部屋の状態に、先程とは違った意味で息を吐いて立ち上がる。
カップ麺の容器が積み重なる台所を抜けて、バスルームの隣りの洗面所で顔を洗う。
心の底に溜まった暗澹とした思いも、一緒に洗い流されてくれれば有り難いのだけれど。

鏡面に映る顔は歪つに皮肉気に笑っている。手紙の中の俺はちゃんと笑えているだろうか。
ちゃんと誤魔化しきれているだろうか。こんな顔で大丈夫だと言われて安心する人間はいまい。

表情を力づくで変えようと乱暴に顔を拭いてリビングへと戻る。
ソファーに腰掛けてガラステーブルの上の吸い殻が山になった灰皿と数本だけ残った煙草の箱に目を落とす。
なんとなく箱から煙草を一本取り出し、くわえる真似を試してみた。

「君が学生なら違反の現行犯で即補導なんだけどね」

「未遂だから見逃してくださいよ。」

それにもとより吸うつもりはありませんから。

未成年特有の好奇心と社会への反発心をポーズとして表現しただけです」

「どちらかという君の表情は、やるせない疲れた心を煙草で誤魔化そうとしている大人に見えたけどね」

「人を老け込んだ親父みたいに言わないでください。」

まあネギ君を連れてこなくて正解でしたよ。ここは教育上にも生育上にもよろしくない環境です」

「そういうところがまるで保護者みたいなんだけどね」

「返す言葉もないけどね」と入ってきた背後の扉を閉めながら、しつかり俺に一言を返して対面のソファア―に高畑先生が座る。

胸元のポケットから煙草を取り出し火をつけてゆっくり煙を吐き出す。

「ここにも開けた煙草があるじゃないですか。なんで中途半端に吸っておくんです?」

「いやー、出先で煙草が切れたら困るからね。毎朝出掛ける前には新しい煙草を持っていくんだ」

「用意がいいのかズボラなのか判断しかねますね、それ。
・・そろそろ時間ですか？」

「察しがいいね。
それじゃ行こうか」

そう言つて、つけたばかりの煙草を消して立ち上がる高畑先生。
それに習い俺も立ち上がつて、足下の書類を踏まないようによけながら部屋から出る。
外はもう薄暗く、後一時間もしない内に夜のとばりが下りるだろう。

昼間の喧騒も今は大人しく、生徒の殆ども寮や自宅へと戻つた筈だ。
より冷え込みの増した外気を払うかのように、俺と高畑先生は学園長の元へと足早に向かつた。

俺達が学園長室に入室した時には既にスーツ姿の男女が何人も待機していた。見覚えのある人、ない人半々といったところか。
「少し遅れてましたね、スイマセン」と言う高畑先生に続いて俺も一礼する。

「なあに、大して待つとりはせんよ。
他の皆も今きたところじゃ」

「やあ秋山君。三、四時間程振りだね」

「秋山君、本当に久しぶりだ。
こうしてまた会えて嬉しいよ」

学園長の待ち合わせ時の定番になる言葉に続いて、瀬流彦先生とガンドルフィーニ先生が声をかけてくれる。
ガンドルフィーニ先生に会うのは本当に久しぶりだ。

「先程振りですね、瀬流彦先生。
それにガンドルフィーニ先生は本当にお久しぶりです。
いつぞやは大変なご迷惑と失礼な真似を致しました。
改めて謝罪を致します」

「何を言うんだ。君が謝ることは何もない。仮に間違ったことをしたとしても、もう何年も前に終わったことだよ。
せつかくまた会えたのに、そんな顔をされてはこちらの方が堪らない」

「すみません・・・有り難う御座います」

俺の背を叩いて力強い笑みを浮かべるガンドルフィーニ先生。
そんな風に言われたら何も言葉を返せない。ただ感謝をするだけだ。
少しだけ沈んでいた心が浮き上がり、俺も笑みを返す。

「フオフオ、まあお互いに積もる話もあるじやろうが、そこはまた後でじゃ。」

秋山君は察しがついておろうが、今日集まってもらった先生方は皆、魔法関係者所謂魔法先生じゃ。と言っても、ほんの数人じゃがの。いずれはまた他の先生方にも会う機会があろう。

秋山君はまだ教育実習生であり、本来は顔合わせの段階ではないが、以前の事件のこともあり裏の事情も詳しく知っておるからの。ま、特別にすることじゃ」

居並ぶ魔法先生方が頷いたのに再度一礼を返す。

ガンドルフィーニ先生と瀬流彦先生とは多少交流はあるが、こうして他の先生方と向かいあったのは三年前の事件の夜以来になる。

「本日より赴任して参りました。秋山蓮です。」

私も今ここにいないネギ君も、教師としても魔法使いとしても未熟で至らぬ若輩者ではありますが、どうぞよろしくお願い致します」

「葛葉刀子です。」

三年前にも一度お会いしましたね。」

その節は御尽力有り難う御座いました」

「神多羅木だ。まともに会うのは初めてだが、三年前の事件には一応参加していてな。君のことは人伝に聞いている」

「明石です。ネギ君のクラスには僕の娘がいてね。娘共々よろしく頼むよ」

三人の先生方と挨拶を交わす。

ストレートの長い髪を綺麗に切り揃えた眼鏡をかけた美人、葛葉先生と握手を交わした時はやけに緊張して手に汗をかいてないか心配になったが。

神多羅木先生は違う意味で緊張する。

黒で統一されたスーツにサングラス。

オールバックに口元と顎に整えられた髭と威圧感がたっぷりである。風格のある男性と言うべきか。佇まいに隙がない。

それ故に穏やかな表情で話し掛けてくれた明石先生には本当に安心にした。

図らずも俺の緊張を解してくれたのだから色んな意味で感謝に絶えない。

「うむ、一通り挨拶も終わったようじゃし、そろそろ本題に入ろうかの。

言い方は悪いが先生方の顔合わせはついでの、秋山君の帰国に伴って浮上・・・いや再浮上じゃな、してきた問題があるのじゃ」

「やはり私を狙って呪術関係者が動き始めましたか？」

学園長と俺の言葉に和やかな雰囲気が一変し、先生方の表情も厳しいものになる。

学園長は小さく頷き話しを続ける。

「今のところは極一部の連中じゃがの。あからさまに騒いだ輩は既に注意なり処罰なり受けとる。」

それでもお主を自分の懐に入れようと画策する連中はまだおつての。そういう連中の接触には気をつけてもらいたいのじゃ。そして危険なのが」

「私を消そうとする者達ですね。」

「それも西洋、東洋の魔法関係者両方の」

「なっ!?!? どういうことだ秋山君!

学園長も一体何を仰有るのです!?!?」

この言葉には流石に表情を変える先生方もいた。

特にガンドルフィーニ先生は黙っていられなかつたようだ。しかしこれはどうしようもない事実で、如何ともし難い現実だ。

「ガンドルフィーニ先生。」

先生もご存知のように私は出自は関東の呪術師の家系です。更に言えばその呪術師の筆頭とも言える家の出です。

三年前、私は理由や原因が何であれ彼等呪術師達を裏切り、西洋魔法使いに組みしました。

そこに少なからず遺恨が残っています。それに私のせいで関東の呪術師達は更に肩身が狭くなりましたからね。

私を憎しと思う人間はそれこそ掃いて捨てる程でしょう」

「だがそれはもう終わったことで、君を憎むことに意味はないだろう」

「人間、楽しいことや嬉しいことは忘れても、嫌なことや憎しみなんかはすぐに思い出せるものなんですよ」

本当に困ったものである。何しろ自分がそうなのだから、言葉にも説得力が出るといふものだ。

思わずついた溜め息は彼等呪術師達に向けて出たものか、自分に向けて出たものか。

「だが西洋魔法使いにまで命を狙われる謂われはない！
そんな真似をする魔法使いがいるはずがないだろう！？」

「正直なところ、あまり想像したくはないのですが・・・
学園長、私は西洋魔法使いにとってどのような立場になっていますか？」

「大多数は好意的な意見が多いの。下心や裏事情はともかくとして
じゃが。」

しかし否定的、悪意的な意見や主張も少なくはないの。
呪術師からの刺客やスパイと訝しみ危険視する者。

その才能と力を使って己の西洋魔法使いの地位を脅かすと恐れる者。
東西両方の魔術を極め新たな派閥や組織をつくらうとしていると邪
推する者。

あとは英雄の息子を誑かして己の手ごまにしておると糾弾する者も
おるの。
特に地位の高い輩やある程度の権威を持つ連中が嫌っておるようじ
やの。

下衆な勘ぐりや一方的な決め付けをする者はどこにでもおるのじゃ
よ、ガンドルフィー二君・・・」

流石に溜め息をつくようなことはなかったが、学園長は椅子に深く座り天を仰ぐように見る。

流石にメルディアナでは露骨な嫌がらせや危害を加えようとする人間はいなかったが、俺と距離を取ったり、常に警戒したり観察する教師や生徒もいなかったわけではない。

図書館の閲覧許可が俺だけ申請に時間がかかったこともあったな。人間、日頃の行いが良くても信用されない時は全くされないのだと残念な真実を得てしまった。

しかしネギ君との接触まで危険視されていたのか。冷静になって考えてみれば、確かに穿った見方も出来るのだけれども。

このことが将来的にネギ君の不利益にならなければいいのだが、実際に今日の放課後の一件のこともある。

自分の想像以上に物語は変化している恐れがあり、今この時も何かしらの危険がネギ君やその周囲に迫っている可能性も捨てきれない。ざわつく心中を気取られないように抑えながら、目の前の話し合いへと意識を戻す。

ガンドルフィーニ先生は決して納得した訳ではないだろうが渋々引き下がっていく。

その表情には、自身の正義と異なる魔法使い達への憤りが見え隠れしている。

複雑な事情に巻き込んでしまい本当に申し訳ない。

「ふむ、ガンドルフィーニ君だけでなく皆も思うところはあるうが現状は様子見しかあるまい。

当面は夜間に侵入してくる連中に今まで以上に注意をしてくれんかの。

背後関係がややこしくなっておるかもしれぬから、出来れば生かし

て捕らえてくれ。向こうが勝手に逝くようなら仕方ないがの」

学園長の言葉に皆それぞれの表情を浮かべ頷く。

俺にも責任がある以上黙ってはいられない。俺が自分の意見を伝えようと前が出るが学園長に手で制される。

「秋山君。お主のことじゃから『自分も夜間の警備に』なんて言うつもりじゃろが、それは駄目じゃぞ？」

儂がそういう理由も分かっただろう」

「彼等の狙いの一つでもある私を危険な場所には出させませんか？でも責任や原因が私にもあります。

黙って守られていると言うのですか？」

「そうじゃな。お主が出ていっては返って危険が増す。

今は目立たぬようにすることが何より安全じゃ」

「でも納得は出来ません。私にだって戦えるだけの力があります！」

「ならん！お主の自己責任の為に他者を巻き込むでない！」

「俺は守られてちゃ駄目なんだ！

守らなきゃいけないんだ！戦わなきゃ駄目なんだっ！」

自分の撒いた争いの種は自分で刈り取る。責任をとることの何が悪いのか。

それに自分せいで誰かが傷付いていくのは嫌だ。

そんなものからネギ君を、みんなを守る為に強くなると誓ったのに。そんな俺の感情的に荒げた言葉を止めたのは、高畑先生とガンドルフィーニ先生だった。

「秋山君。君が何を思っただけで力を得たのかは知らないけれど、今の君は戦うことを義務付けして責任を取ろうとしているようにしか見えない。それは自分の命を量りにかけてまで行うことなのか？君自身が正しい行いとして選んだことなのか？」

私には誰かが死ぬのが嫌だから、まだ自分が死んだ方がいいと考えているようにしか見えないよ」

「ガンドルフィーニ先生、俺は！」

「秋山君は人を殺す為にメルディアナで僕と訓練をしてきたのかい？」

「っ！？・・・違います！俺が戦うのは守る為で！」

「責任感や無理矢理な理由付けで守ると言うのなら、君はいずれ力の向ける先を見失う。」

守るべきものにその力を向ける。

覚悟なんて言葉を自分に言い聞かせて力を振るえば、君はまた壊してしまうよ、人も周りも。

忘れたのかい？あの時の君自身を」

忘れていない。忘れる訳がない。

嫌なことは簡単に忘れられないって、さっき言ったばかりだから。力を求めたのは何の為だ？ネギ君を守る為だ。その誓いに嘘はない。

だから訓練をした。守る為に、自分の犯した過ちを償い、責任を果たす為に。

なのにそれは間違っていると言う。

俺の思いは間違っていると。

腹ただしいし悔しいし苛立つ。

思うままに、感情のままにぶちまけたかったが、俺は何も口に出せずに。

学園長が先生達との話し合いを取りまとめ終わりとした中で。

一人俯いたまま職員寮の高畑先生の部屋へと戻った。

『で、アスナさんとクラスのみんなが歓迎会を開いてくれたんだ！ビックリしたけど嬉しかったよ！あ、あと、あの階段から落ちて僕達が助けた宮崎さんから図書券を買ったよ！』

レン兄さんの分も預かってるから明日渡すね！』

「そうかい、何にしる初日から色々なことがあって大変だったね。

宮崎さんだっけ？彼女にも俺からも改めて返事しておかないとな。ちゃんとお礼を用意するなんて律儀で真面目ない子だね、まった
く」

『うん！それに髪に隠れてたけど、スゴく可愛いんだよ！』

レン兄さんもビックリするかもね』

「それは期待してしまうな。それより明日菜ちゃんにもちゃんと今日のお礼をしておくようにね？」

あの子のおかげで俺達はまだ修行が出来るんだから」

『そうだね、なんだかんだ言われちゃったけど、僕のこともちゃんと泊めてくれたし。』

本当はいい人だって思ったよ』

「本当だね。ああ、もうこんな時間か。そろそろ休むとしようか。長い時間電話をしていたら、明日菜ちゃんや木乃香ちゃんにも迷惑がかかるだろうし。」

二日続けて遅刻なんてしたら先生を首になってしまう。
ネギもちゃんと休むんだよ？」

『うん、分かってるよ。レン兄さんもゆっくり休んでね。
また明日からも頑張ろうね！
おやすみなさい！』

「ああ、おやすみなさい、ネギ」

携帯電話を切ってソファーにもたれかかるように身体を預ける。
連絡用にと渡した携帯電話だったが、予想以上にネギ君に好評で電話で話すことの楽しみを覚えたようだ。
最後の声が若干残念そうだったのは、まだ話す内容がいっぱいあったからか、俺との会話が終わることの寂しさからか。後者だったら嬉しいと思う俺は、まるで単身赴任の父親みたいで苦笑が漏れてしまう。

すっかり夜も更けてしまったが、高畑先生は戻っておらず俺一人

しかない。先程の話し合いの件で、俺に気を遣ってくれているのかもしれないし、単に夜間警備に出ているのかもしれない。どちらにせよ今は顔を会わせ辛いので助かっているのだが。

「あーうー・・・」

思い出してしまうと複雑怪奇な感情を整理出来ず、恥ずかしいことを思い出した時のように、意味の無い言葉が勝手に口から出てしまう。実際恥ずかしい思い出となっではいるのだけれども。

しかしそれだけではない。

憤りも苛立ちも悲しみも情けなさも煩わしさも罪悪感も。

何に対しての気持ちなのかも誰に対しての気持ちなのかも。自分の気持ち分からない。

「一つだけは確かに分かる気持ちはあるけどな」

自問から自答。

右手をリビングの蛍光灯に透かして握っては開いて、それを何度も繰り返す。

思い出すのは放課後の出来事。

思い出すことで突きつけられた事実。

『ところでネギ？どうして杖を持っていないんだ？』

杖があつたらネギもすぐに彼女を助けられたのに』

『僕も持っていたつもりだったから焦っちゃった。

今朝、レン兄さんが言つてたことを守らなきゃって思つて、置いてきてたの忘れてて・・・』

『俺の言つたこと？何か言つたっけ？』

『言つたつて言うか呟いてたの聞いてたんだ。

「あんまり魔法使いみたいな物は持たない方がいいな」

つて小声だけどね。確かに大きな杖を持つてたら、バレちゃうよね。それで気をつけようつて気付いたんだ』

翳していた右手をソファーに叩きつける。憤りのままに。悪いのはネギ君じゃない。

彼は魔法の秘匿を理解して、自らその為に正しい行いをとつただけ。その行為は褒められはすれ、非難される謂われは全くない。だがしかし・・・

「もしかしたら、あの時のどかちゃんも死んでいたかもしれない・・・」

理屈では正しい筈の行いのせいで、本来助かる筈の少女が助からなかったかもしれないのだ。

ネギ君が正しく魔法を使うことで。

ネギ君が誰もが非難しない道を進もうとすること。

「ネギ君のせいじゃないだろうが！
全部俺のせいだろうがっ！！」

俺がネギ君に与えてきた影響が、愚かな行動のつけが返ってきただけだ。

それが俺ではなくネギ君や周囲の誰かに対して返っていくだけだ。

「怖いよ・・・」

ポツリと漏れたのは確か気持ち。

自分の行動が及ぼした他者への影響が怖い。

原作と異なる結果を生み出しかねない物語の先行きが怖い。自分のせいでもた誰かを『殺して』しまう可能性が怖い。

「う・・・っ!？」

突然催した嘔吐感にたまらず洗面所まで駆け出す。

吐き出す物は胃液がと唾液が混じった酸臭のする液体だけ。そう言えば昼に軽くパン摘んだ程度で、それ以降は何も食べていないことを思い出す。

喉に焼けるような痛みを感じるが構わず吐き続ける。

目の前が涙で潤みぼやけており、それを唾液で汚れた袖で拭う。

鏡に映る顔は見慣れた筈なのにまるで別人のように青ざめて生気が

ない。

「酷いな・・・こんなことになる前に手紙を用意しといて良かったよ」

ふと手紙のことを思い出した。あんなことがあったのに俺は暢気に手紙を出したのか？

何事もなかった顔をして、いつもの自分を取り繕って？
いつもの自分を取り戻す為に？

「はは、ははは・・・何だよそれ？

馬鹿みてえだ！ははははは・・・っ！」

笑っしかない。

俺は自分を守る為に手紙を出した。

壊れそうになる程の自分の罪悪感から逃れる為に、遠い地の優しいあの女性を逃げ道にした。

一人では恐怖感に堪えられないから優しいあの人をこんな所からも頼っていた。

「『守ります』？

『頼ってくれ』？

ははは、何言ってるんだよ。

俺はずっと、今も優しい人達に守られて頼りっ放しなくせに！」

俺は今笑っているのか、泣いているかも分からない。
分かりたくもない。こんな感情なんか消えればいい。
こんな自分なんか消えてなくなればいいんだ！
俺は・・・！

「転生なんかしなければよかった」

第十四話：崩れゆくモノ（後書き）

前回は明日菜ちゃん引きで終わったのに今回一切登場しないとか見事にオッサンばかりの回です。

あ、刀子さんがいたわ。

主人公がまた急降下しました。

もうお前メンタルクリニックに行けよと言いたいです。

しかし実際怖いと思います。自分が関わって物語が変わるとか、人が死ぬ可能性とか考えると。

既存の物語に転生するリスクって、案外洒落にならないことが起こりかねないと思います。

夢も希望もないこと言ってますが。

主人公がもっと前向きな人間でいたら展開も違ったんでしょうけど。

因みに本屋ちゃん落下。マジで瀕死。魔法で回復。それを明日菜ちゃんに見られて魔法バレ。

なんてもっと酷い案も考えましたが、流石に可哀想過ぎる、てか『本当に死んだらどうする！』と思っ直して却下。多分主人公の精神も保たない。

原作開始の導入部は主人公視点のみでまとめました。

本当は女子視点とかあった方が華やかだろうに。

次回からはもう少し華やかに・・・なるのかなあ。

オッサン書く方が楽しいし。

多くの方に読んで頂いて本当に感謝にたえません。
今後も精進していきます！

第十五話：疑惑と疑念（前書き）

仕事と学業に追われ執筆する時間が全然とれなくなってきた現状。両方の隙間を縫うような状態で何とか完成しました。

では物語の続きをご覧ください。

第十五話：疑惑と疑念

sideネギ

「全くもー！
バイトも遅刻しちゃったし、ホントあんななんか泊めんじゃなかった！」

「えうつ、僕のせいじゃ・・・」

「仲悪いなー二人」

昨日の朝の風景をそっくりそのまま再生するように僕たちは走る。昨日と違うのは一緒に走る人がレン兄さんじゃなくて、アスナさんとこのかさんだと言うこと。

アスナさんは起き抜けから怒りっぱなしで、この人は怒らずに一日を過ごせないのになって思ってしまう。

寝ぼけてアスナさんのベッドに潜り込んだ僕にも原因があるんだけど・・・

一緒に生活するこのかさんが優しいからどうしても比較してしまうよ。

「ねえ！ちょっと！」「って、こっやって耳を引っ張られるし。僕

に対して一々厳しいところなんか特にこのかさんとの違いを如実に表している。

「・・・なんかあんた失礼なこと考えてない？」

「そそそ、そんなこと全然考えてないです！」

その上、変に勘が鋭いんだよね。昨日の黒板消しトラップを魔法で受け止めたことも気付かれちゃったし。

今もジトーツとした目でアスナさんは僕を見てる。こういうのが生きた心地がしないって言うんだらうね。

「・・・まあいいわ。それよりも、あんたとあの秋山ってお兄さんが魔法使いだって知ってるのは私だけなんでしょ？」

バレたらマズいって言ったのに、そんなの持ってたて大丈夫なの？」

アスナさんが小声で僕の背中にある杖を指差す。

昨日みたいにケースじゃなくて包帯のような布でくるんだだけの杖は人目につきやすい。

魔法の秘匿という点じゃ明らかにマズいと思うんだけど。

「そうなんですけどレン兄さんに、昨日みたいなことがあるかもしれないからって一応持つように電話をした時に言われたんです」

「んー、確かに昨日の本屋ちゃん危なかったしねえ。」

でもあんなことが毎回あるとは思わないんだけど」

「僕も心配し過ぎだとは思いますが」

実際のところ、昨日僕が杖を持っていたら、僕一人でも宮崎さんを助けることが出来たかもしれない。
でもあの場にはレン兄さんもいたんだから、僕一人で絶対助けなきゃいけない訳でもないと思う。

レン兄さんは僕が助けられないといけないように考えてるみたいなのは何故だろう。

宮崎さんを助けたあとでアスナさんに魔法がバレたのは問題だったけど。

レン兄さんが魔法の秘匿や僕たちがここにいる理由をちゃんと説明して、アスナさんも秘密を守ってくれることを約束してくれた。
僕一人だと上手く説明出来たか分からないから、やっぱり二人でいたことが良かったんだと考えてしまう。

レン兄さんの言葉や考えがちぐはぐで違和感がある。

変になったのってアスナさんとの話しが終わったくらいからかな。
確か、僕が杖を・

「なんだか昨日の朝の風景を繰り返しているみたいだね」

「わあ！って、レン兄さん！」

「うわ！ビックリした！急に後ろから声をかけないでよ！」

噂をすれば……って言うのとは違うけど、レン兄さんのことを考えてたらイキナリ本人が登場するんだもん。
アスナさんも僕も飛び跳ねるくらいビックリしちゃったよ。ってレン兄さん！

「ど、どうしたのその顔！？目の下に隈が出来てるよ！？」

「ああ、これが。

昨日は早く寝るつもりだったんだけど、今日から俺も一人で授業を受け持つことになるだろう？
緊張して眠れなくてさ。
気付いたら朝だった上に、ボーっとしていたせいで遅刻しかけている始末さ」

そう言っって苦笑いするレン兄さん。

なんだろう……。どこか変だ。

いつも通りの筈なのに何かが違う。

まばたきをする一瞬に感じた僅かな違和感。

まるで知らない人を見たような感覚があった。

気のせいかな……

アスナさんに怒られて困った顔のレン兄さんはいつもと変わらないし。

「あやー昨日のおにーさんやん。

そーいやおにーさんも先生やったね。

ちゃんと挨拶せなあかね。

おはよーございます秋山先生」

「俺も挨拶を忘れるところだったよ。」

うん、おはよう近衛さん、神楽坂さん、ネギ君」

えっ………？

「おはよーって、昨日までちゃん付けだったのになんで変わってんのよ？」

「いや馴れ馴れしいって言われたし、一応先生だから公私のけじめもつけないといけないかなって」

「……別に今更いいわよ、そんなの……かたつくるしくて逆に落ち着かなくなるから」

「うちも普通に呼んでええよ？」

それにこの学校でそんなん気にする人おらんし」

「そうよね……ってどうしたのよ、あんた？」

「ネギ君どないしたん？」

急に立ち止まってしまった僕を三人が不思議そうに見ている。

なんだか身体も口も強張って思うように動かない。

なんで？なんで……

「レン・・・兄さん・・・君は・・・知らない・・・よ」

「ああ、またうっかり君付けをしてしまったのか。

ごめんね、ネギ？

でも一応先生同士だから呼び捨ては良くないかな？」

「だからそんなん気にする人はおれへんって」

何事もなかったように笑いあう三人を見ても僕の心は全然晴れない。

違うんだ。全然違うんだよ、今の「ネギ君」は！

僕は今、誰に名前を呼ばれたの？

あそこにいるのは間違いなくレン兄さんなのに。

顔も声も身体も仕草も雰囲気も間違いなくレン兄さんのはずなのに。

まるでレン兄さんをコピーした精巧な人形を眺めているような気分だ。

頭の中で高速でいろんな出来事が思い起こされて再生される。

ノイズがはしり、グルグルと目の前が回転しているような錯覚。

あの表情を。あの姿を。あの人を。

僕は昨日見たんだ。

僕が杖を持っていない理由を伝えて、表情を無くしていたレン兄さんに表情が戻ってくる、あの一瞬に現れたレン兄さんを形作る何か。

「ネギ？どうかしたの？どこか調子でも悪いの？」

心配そうに僕を見つめるレン兄さん。ああ、今ここにいるのは間違いないレン兄さんだ。

『レン兄さんらしきモノ』じゃない。
でもざわめく気持ちがおさまらない。

「だ、大丈夫だよ。ちよつと走り続けたせいで疲れただけだから・

」

「そうなの？大丈夫ならいいけど無理をしたら駄目だよ？
でもとりあえずは学校に行かないと。
本当に遅刻してしまうかも」

「やばっ！もうギリギリじゃない！？
急ぐわよ、このか！ほらあんたもっ！」

慌てて駆け出す三人に遅れないように僕もついて行く。
何かの弾みで脳裏に浮かんだ言葉が出たりしないように。
大切な思い出が壊れないように。
しっかりと口を閉じながら。

「（レン兄さん）」

僕を気遣いながら隣りを走る優しい兄を失わない為に。

僕は言葉を自分の中の深い深いところに沈める。

『アナタはいつたい誰なんですか？』

もう二度と浮かんでこないでと願いながら。

side 学園長

「ふむ・・・昨夜捕縛した連中は雇われのはぐれ者か小者ばかりか」

「ええ、背後関係がありそうな者も組織の下っ端ばかりで、重要な情報を持たされてはいないと思われませう」

「普通は警戒の厳しい初日に無茶をして尻尾を掴ませるような下手は打たんからの」

昨晩の秋山君らとの話し合いのあと、先生方にはいつも通り警備に入ってもらったが芳しい結果は得られなかった。

殆どが血気に逸った馬鹿者と捕縛されても痛手の少ない使い捨ての駒ばかり。

予想の範疇とは言え徒労感が半端ないわい。

ここ三年の間に関東の主だった呪術組織は魔法協会に恭順の意を示し、反旗を翻そうとする者達は大方処分なり追放なりされておる。あくまで『関東』はじゃがな。

黙読しておった報告書から目を上げて二人の魔法先生、タカミチ君と葛葉君を見やる。

「これを見るかぎり関西の呪術師が多いようじゃな。
とすれば狙いはこのかかの」

「一概にはなんとも．．しかし関西呪術協会の過激派は、以前より木乃香お嬢様を手中におさめようとする動きを見せていましたので、不自然な行動とまでは見られません」

「そう見せかけて実の狙いは別に．．なんてことも考えられますけど。」

まあ僕としては今はこれまで通りの対処を続けるしかないと思いますね」

僕も同感じゃ。こちらが相手の思惑などを探っても、確証のない現状ではかえって混乱や疑惑を深めるだけじゃ。

後手に回るのは癪じゃが、守りを固め確たる情報を得ることに努めるのが正しいじゃろう。

守らねばの．．世界樹もこのかも、そして．．

「それはそれとしてタカミチ君。今朝の秋山君の様子はどつじやうた？」

昨日の今日じゃ、流石に彼もいつも通りとはいくまい」

儂の言葉にいつも穏やかな表情をしているタカミチ君の顔が苦いものを噛み潰したように歪む。

「彼は・・・秋山君はある意味いつも通りの彼でした。

昨晩は色々悩んでいたのか目の下に隈が出来ていましたが表情自体は穏やかなものでしたよ。

『昨日は己の分を弁えず失礼を致しました』なんて謝罪までされましてしね。

しかしそれがおかしいんです」

「私や神多羅木先生のところにも謝罪に訪れていましたね。自分の過ちを恥じているように感じられました。

ですが特に不審なところは見受けられませんでしたよ？」

タカミチ君の様子を訝しみながら葛葉君が言葉を返す。

それにタカミチ君は小さく首を振り話を続ける。

「他人のことを知った顔で話すつもりはありませんが、秋山君の内面は非常に繊細です。悪く言えば脆くて危うい。

そしてそれを他人に見せないように隠すことに長けている。普通の人間や彼との関わりが浅い人では気付かないでしょうね」

「それは儂も感じておる。およそ若者らしからぬ性質じゃ。本音と建て前などというよりも、本心や感情と真逆の人格を外側に形成しておるといった方がよいかの」

それも恐ろしく歪つで精巧な仮面を被つておる。

自分を守る為に作られた自分というべきか。

他者を拒絶する為の手段とも言える。

三年前の彼は特にそれが顕著に表れていた。

「じゃが、昨日の朝に再会した彼は見違えるほど良い顔をしておった。

特にネギ君と話しておる姿は誰が見ても優しい兄と弟といった風情じゃったぞ？儂は彼が本来の自分を見せられるようになったと思つとつたのじゃが」

「僕もそう思っていました。メルディアナでの彼はとても穏やかで本心を表すことも多かったですね。きっと彼にとって幸せな日々だったんだと思います。

だから僕も忘れてしまっていたんです」

「何をですか？」

葛葉君の表情も厳しさを増しておる。自分に見せた姿が偽りかもしれないと言われれば警戒や不信感を抱いてもおかしくはない。

「今言つた彼の本質のことです。」

彼の心の弱いと言いましたが、彼はその弱い部分を自分で更に傷つけながら生きています。

自分の行いが正しいとされても、それが誰かの為であったとしても、彼はその中にある僅かな過ちを後悔し自らを苛む。精神的な自傷行為でもいっべきでしょうか。

自分は許されてはいけない罪深い人間だと言いついて聞かせているようなところがあるのですよ」

「そうじゃな・・・」

生まれ育った背景も影響しておるじやろうが、彼の場合は些かそれが顕著なのだろう。う。

なるほどの、それで昨晩はあんなに責任を果たすことに執心したのか・・・」

不器用な、いや真面目で高い良識をもつからこそ、真つ当で幸せな生き方を得ることを避けておるのかもしれない。

哀れというのは少々高みからの言葉じゃが、あのまだ若い青年は自分を加害者にしなければ精神の均衡を保てないのやもしれん。その在りようは哀れとしか言えんの。

「昨日から今朝にかけて彼に表面上の変化はなかった。

昨晩のやり取りから考えれば、本来なら意気消沈したり不満を露わにするような態度をとってもおかしくないのに。

寧ろその方が普通の反応だと言えます。しかし彼は普段通りの姿を見せた」

「・・・つまり自分の葛藤や焦燥を押し殺していると？」

いや本心や感情そのものを閉じてしまったということなのでしょう

か？」

タカミチ君の言葉に葛葉君が眉をひそめながら返す。

それにやりきれないといった表情を見せながらタカミチ君は頷く。

そして懐から煙草を取り出し一息吸い煙を吐き出す。

心の苦さを煙草で誤魔化すように。

「学園長・・・僕は彼に監視をつけることを進言します。

今の彼を一人にしてはいけない。

このままだと彼だけではなく周りの人間に対しても取り返しのつかない結果を招く恐れがあります」

溜め息をつかずにはいられなかった。僕はきつと情けない姿を晒しておるのじゃろう。

守っていこうと決めた筈の彼を儂等は裏切ることになるやもしれんのじゃから。

他の先生方へこの連絡を頼み葛葉君が先に退室する。

タカミチ君もそれに続こうとして、ふと立ち止まりこぼすように一言残した。

「学園長。僕は運命なんてものが本当にあるのなら呪いたくありません」

タカミチ君らしくもない深い悲しみを目に浮かべた力無い笑みを見せる。

「彼がずっとウェールズで生きていけたら良かった」

扉が閉められ儂一人になった静かな部屋に響く、生徒達の明るい声がいやに耳に痛かった。

side蓮

部活動に向かう生徒や下校後の予定を話し合う生徒の愉しげな声を聞き流すように足早に歩く。

ネギ君ほどではないがまだ年若い先生である俺に怪訝そうな顔する生徒は少くない。

俺も彼女達も先生と生徒という距離感をまだ計りかねているのだ。不慣れた教師、不慣れた環境に戸惑うのは無理もない。

これが普通なのだ。

「そういう意味じゃ21Aは流石としか言いようがないな」

HRのあとで、昨日の件でのどかちゃんに貰った図書券のお礼をするべく2ーAに立ち寄ったのだが。

少し顔を出したただけであつという間に取り囲まれ、半強制的に質問の嵐に巻き込まれてしまった。

常識の通じない2ーAのみんなが悪いのか、迂闊な俺が悪いのか、明日菜ちゃんとかこのかちゃんが助け舟を出してくれなければ、あと一時間は帰してもらえなかつたかもしれない。

それでも嫌な思いをしなかつたのは、彼女達が皆アイドル顔負けの美少女で、そんな美少女達に囲まれることが嬉しかったからか。ネギ君や俺といった特異な存在を肯定的に受け取ってくれる心の広さを感じ入ったからか。

どちらにしてもネギ君は大変だとは思っけれども、あのクラスのみんなと一緒に学園生活を送れることは望外の幸せであることは間違いない。

互いに苦難を乗り越えていく仲だ。
原作同様に良い関係を築けることを祈ろう。

「のどかちゃんも元気そうだったし。

このまま順調にネギ君と仲良くなってくれたらいいな」

お礼のためとはいえ、男性が苦手で赤面しっぱなしののどかちゃんには悪いことをした。

新任教師の二人と初日から関わりをもったなんて、彼女を知る人間にしたら驚愕の事実だろう。

からかわれたり、変に勘ぐられたりと、彼女にしたらさぞかし居心

地の悪い時間だった筈だ。

今後は俺から接触することはないのだから今回だけは我慢してほしい。

「影からは関わると思っけどね」

呟いた言葉を自分に言い聞かせる。

昨日の一件で原作の流れに致命的な変化が起き始めていると痛感させられた。

俺の存在は正史を歪めている。

それもかなりまずい方向へと。

本来の流れに沿う為にはネギ君に多少の無茶や失敗が必要になるのだが、俺の与えた影響によりネギ君は魔法使いとして慎重な行動をとるようになっていく。

本来なら今日は惚れ薬による騒動が起きる筈だったのにそれがなかった。

21Aに赴いたのもその観察を含めてのつもりだったのだが。

明日菜ちゃんとの衝突も少なそうだし、最悪の場合、仮契約をすることにも支障きたす可能性も考えられる。

本格的にカモ君のアシストをすることも視野に入れておく必要があるかもしれない。

勿論バレないようにこっそりとだが。

興味がなくはないとはいえ、オコジョになるのはやはり勘弁してほしい。

「いつそオコジョになった方が世の中の為かもな」

そう自嘲しながら校外に出る。

生徒達の好奇の視線から逃れるようにショッピングモールのある街の方へと向かう。

メルディアナから来日するにあたり、最低限の荷物しか持ってこなかった為生活用品が不足しているのだ。

高畑先生に借りることも出来るがこれ以上迷惑をかけたくはない。昨夜の件で俺のことを気にしているだろうし。

「ちゃんと誤魔化せたかな・

いつもと同じように振る舞えたと思うけれど」

そう言ったものの不安は消えない。

嘘も偽りも誤魔化しも、今までの自分を形成してきたものが以前よりも頼りなく感じる。

学園長や高畑先生は俺を不審に思っていないだろうか？

他の先生方は俺を怪しんでいないだろうか？

ネギ君は？

彼は俺を今も兄として見てくれているのだろうか・

俺が纏う自分らしさが酷く滑稽で弱々しい。まるでボロ布一枚を羽織った歩くような心細い。

自然に早まる足が自分の不安を象徴している。

居心地の悪さから逃げ出したのは嘘ではない。

ただその居心地の悪さが自分の中に渦巻く恐怖感のようなものに追いついて立っていることに起因しているのだと解ると情けなくて泣きそうになる。

なんてことはない。俺はこの世界の人達から逃げ出したいんだ。自分の犯した罪や過ちを知られて責められることに怯えて、ひたすらに人の目の無い場所に行きたいだけだ。目的も理由も後付けで。ただ他人から逃れるだけの行為。そして何よりも・

「俺は許されたくない・・・」

周りのことも気にせず歩き続けていたら人通りも少ない道に立っていた。

ショッピングモールに向かうつもりが、知らず知らずのうちに人の少ない場所を選んで歩いていたらしい。

大都市と言える大きさと人口密度を誇る麻帆良学園でも人気の少ない場所の一つや二つはある。

そんな場所に無意識に辿り着ける自分に感心すべきか呆れるべきか。自嘲めいた笑みが浮かぶのを止められない。

自然と漏れた独り言の意味を理解することでまた笑ってしまう。笑うしかない。

「そっか・・・俺は誰かに罰せられたいんだ」

犯した過ちをバレたくはない。人に知られないうちに隠れて対処してしまいたい。

だがその贖罪を果たすことは許されず、ただ安寧と生きることを望

まれる。

でもそれを良しとすることは自分の罪を償うことなく逃亡することと同じ。

誰にも明かせない罪を抱えながら、守られ勞られ優しくされることは、糾弾され追求され断罪されているのと変わらないくらい辛い。こんな思いをしながら生きていくなんて死ぬよりも辛い。

助けてほしい。

見捨ててほしい。

許してほしい。

責めてほしい。

優しくしてほしい。冷たくあしらってほしい。

相反する思いに縛られて身動きが取れなくなる。

ああ、なんて歪な人間なんだろう。

無機質なコンクリートの壁にもたれかかり空を見上げる。

自分は何をしたくてここにいるのだったかも分からない。

空はいつかと同じように曇っており、行くべき道を差し示すものは何一つなかった。

「お可哀想に・・・」

貴方のお心は今も暗い牢獄に囚われたままなのですね・・・」

「っ!?!? 誰だ!?!?」

横合いから、しかも極間近からかけられた声に驚いて振り向く。人の気配を読む術に長けているとは言わないが、すぐ側まで容易く接近されるほど間抜けでもない。警戒を強めて声の相手を見据え・・・

言葉を失った。

「ああ、貴方は昔とお変わりなく美しくあらせられる。
その瞳も御髪もその立ち振る舞いも。
そしてどこまでも孤高で孤独で孤立して・
貴方の全てがあの中のまま」

陶醉しているかのように独白を続ける女性から目が離せない。

「世の無情を愛おしみ、人の非情に愛惜なさる。
お優しいお心を見えぬ刃で傷つけられながらもなお深い愛情で慈し
み」

夕闇が迫る中、街灯もまだ灯らない薄暗い小路に浮かぶ白い影。
全てが白く塗りつぶされたような異様な姿。

髪も肌も着ている服も全てが白。
ただ爛々と輝く紅玉のような双眸と、
妖艶な笑みを浮かべる唇だけが異様な程に赤く色付く。

その眼から顔を背けることも出来ず、その唇から紡がれる言葉に
耳を閉じることも叶わない。
俺はまるで魂を奪われたかのように立ち尽くす。

「ああ・・・その貴方に再びお目にかかる日を心よりお待ちしており
ました」

純白と言つても差し支えない程の美しさなのにもかかわらず、こんなにも不吉で妖しい純白を見たことがない。

危険だと判断する理性が、この女性に全てを捧げてしまいたいという感情とせめぎ合う。

そんな俺の心情を知つてか知らずか。女性は笑みをより深く妖しくたたえ、流れるような所作で俺に右手を差し出す。まるで遊女が誘うかのように。

天使が祝福を授けるかのように。

悪魔が契約を交わすかのように。

「お迎えにあがりました。秋山蓮様。

私はこの世界で唯一貴方を理解してさしあげられるモノで御座います」

逢魔が時に現れた人ならざる美貌の女性はそう言って、いつの間にか伸ばしていた俺の手に細く冷たい白い手を重ね合わせた。

第十五話：疑惑と疑念（後書き）

元から不安定だった主人公に更なる綻びが生じました。

周囲もその違和感を感じ取っています。子供先生はまだ主人公との関係に不和を生むようなものではなく「何か変だ」くらいなんですが、先生方は少し危険視しています。敵対する意思はないのですが。

あとおかしなのが登場しました。

予定ではまだ登場させるつもりはなかったのに・
何故だろう？

前書きにも書きましたが少々忙しくなってきたので投稿ペースが落ちてしまいそうです。

最低でも一週間に一話くらいは投稿していきたいとは思っています。

読んで頂いている皆様のご期待に添えるよう今後も精進していきます！

これからもお付き合いのほどよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7202y/>

自分らしい生き方を

2011年12月11日08時49分発行